

国立国語研究所学術情報リポジトリ

昭和38年度 国立国語研究所年報

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/0000001191

昭和 38 年度
国立国語研究所年報

—15—

国立国語研究所
1964

刊 行 の こ と ば

本書は、昭和38年に行なった調査研究について、その概要を記したものである。それぞれの課題に関する研究が完了次第その成果を「報告」「資料集」等の形で別途に刊行しているが、本年度内に刊行した「報告」「資料集」は次の通りである。

横組みの字形に関する研究 (報告24)

現代雑誌九十種の用語用字一分析一 (第三分冊) (報告25)

分類語彙表 (資料集6)

昭和39年10月

国立国語研究所長 岩 淵 悦 太 郎

目次

刊行のことば	
昭和38年度の調査研究のあらまし	1
話しことばの調査研究	
話しことばの文法の調査研究	4
書きことばの調査研究	
現代雑誌一般の用語・用字の概観調査	8
大量語彙調査機械化のための準備的研究	20
地域社会の言語生活の調査研究	
各地方言の共通語との対照的研究	22
日本言語地図作成のための調査(第7年度)	25
国語教育に関する調査研究	
中学校生徒の言語能力の発達に関する研究	33
言語の効果に関する調査研究	
国語文章の横組みのための印刷条件の研究	49
言語表現における場面の効果の研究	50
国語の歴史的発達に関する調査研究	
明治時代語の調査研究	52
『色葉字類抄』の用語索引の作成	99
特殊問題の調査研究	
類義語の調査研究	101
現代語における漢字ならびに用字法に関する調査研究	103
国民各層の言語生活の実態調査(A)	106
〃 (B)	146
国語関係文献の調査	154
図書の収集と整理	161
庶務報告	169

昭和38年度の調査研究のあらまし

本年度の研究項目および分担は次の通りである。

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| (1) 話しことばの文法の調査研究 | 話しことば研究室 |
| (2) 現代雑誌一般の用語・用字の概観調査（継続） | 書きことば研究室 |
| (3) 大量語彙調査機械化のための準備的研究 | // |
| (4) 各地方言の共通語との対照的研究 | 地方言語研究室 |
| (6) 日本言語地図作成のための調査（継続） | // |
| (5) 中学校生徒の言語能力の発達に関する研究
（継続） | 国語教育研究室 |
| (7) 国語文章の横組みのための印刷条件の研究
（継続） | 言語効果研究室 |
| (8) 言語表現における場面の効果の研究 | // |
| (9) 明治時代語の調査研究（継続） | 近代語研究室 |
| (10) 「色葉字類抄」の用語索引の作成
（継続） | 古代語研究室開設準備室 |
| (11) 類義語の調査研究（継続） | 第一資料研究室 |
| (12) 国語関係文献の調査 | 第二資料研究室 |
| (13) 現代語における漢字ならびに用字法に関する
調査研究 | 第三資料研究室 |
| (14) 国民各層の言語生活の実態 | |

「話しことばの文法の調査研究」は本年度は語順の研究、イントネーションと文法との関連の探究、ポーズ（間）と文構造との関連の探究等を行なった。

「現代雑誌一般の用語・用字の概観調査」は昭和32年度以来、現代雑誌九十種について調査を行なって来た。その成果の一部は既に刊行したが、本年度はさらに「分析」編を「現代雑誌九十種の用語用字」の第三分冊として刊行し、また、この調査で得られた使用度数の多い語約1万2千語を含む3万2千語について意味による分類語彙表を作製し刊行した。

「大量語彙調査機械化のための準備的研究」は大規模な語彙調査を機械化することを目標とし、電子計算機を導入するための準備的な研究を行なった。

「日本語語地図作成のための調査」は昭和32年度以来続けているが本年度はその第7年度である。230 地点の調査を終わり、通算2,160地点になった。

「各地方言の共通語との対照的研究」は各地方言の文法と共通語の文法とを対照的に研究し、共通語の教育に役立つ資料を得ようとするものである。本年度は秋田市と鹿児島市との方言について調査を進めた。

「中学校生徒の言語能力の発達に関する研究」は次年度以降本格的に追跡調査による研究を行なう予定で、その準備作業として学習指導法の実態調査を行なった。また昭和28年度以来実施してきた小学生の言語能力の発達に関する研究について、そのまとめとして総合編「小学生の言語能力の発達」の原稿を完成させた。（昭和39年度刊行）

「国語文章の横組みのための印刷条件の研究」は昭和35・6 年度に活字の字形を中心に調査を進めたが、成果がまとまったので「横組みの字形に関する研究」を報告書として刊行した。

「言語表現における場面の効果の研究」は言語表現が場面によってどのような変容を示すかを伝達という観点から調べようとするものである。

「明治時代語の調査研究」は前年度に引き続き郵便報知新聞以下の文献により、文体と用語との関係についての考察など、語彙調査の整理を行なった。

「色葉字類抄の用語索引の作成」は、本年度は用語を語末から五十音順に排列した「逆引き」の索引を作った。

「類義語の調査研究」は類義語が、コミュニケーションにおいてどのように用いられ、どのような障害を起しているか等を調査しようとしたものであるが、本年度は結果を整理記述した。

「現代語における漢字ならびに用字法に関する研究」は「現代雑誌九十種の用語用字」で得られた資料に基づき、漢字の音訓使用の実態ならびに表記のゆれに関する考察を行なった。

なお、今年度も所内の総合研究として「国民各層の言語生活の実態調査」を行なった。国民各層がどのような言語生活を営んでいるか、どのような問題を

持ち、どのような意識を持っているかを調べようとするものである。昨年度、長岡市で実施したのは文字生活を中心とするものであった。本年度はその整理を行なう一方、その補充調査を東京都内で行なった。また本年度は島根県松江市を選んで市民の話しことばに主眼をおいて、問題点と意識を探る調査を実施した。

本年度当初の研究組織は次の通り。

第一研究部	(部長) 林 大				
	話しことば研究室 (室長)大石初太郎	宮地 裕	南不二男	鈴木重幸	
	書きことば研究室 (室長)見坊 豪紀	水谷静夫	石綿敏雄	宮島達夫	
	方言言語研究室 (室長)柴田 武	野元菊雄	上村幸雄	徳川宗賢	
第二研究部	(部長) 興 水 実				
	国語教育研究室 (室長)芦沢 節	村石昭三	吉沢典男		
	言語効果研究室 (室長)永野 賢	高橋太郎	渡辺友左		
第三研究部	(部長) 山 田 巖				
	近代語研究室 (室長)林 四郎	進藤咲子			
	古代語研究室 (主任)山田 巖	広浜文雄			
第四研究部	(部長) 岩淵悦太郎 (兼任)				
	第一資料研究室 (室長)松尾 拾	西尾寅弥	田中章夫		
	第二資料研究室 (室長)飯豊 毅一	大久保愛	高田正治		
	第三資料研究室 (室長)斎賀 秀夫	松本 昭			

話しことばの文法の調査研究

A. 前年度までの経過

話しことばの文法の調査研究の第1段階として、各種の対話のことば、および、講演・講義・演説・説明等の独話のことばを資料として、話しことばの文型の研究を行ない、報告書『話しことばの文型（1）——対話資料による研究——』（昭和35年3月）、『話しことばの文型（2）——独話資料による研究——』（昭和38年3月）を出した。そこでは、話しことばにおける文の認定の基準を設定し、文を表現意図・構文・イントネーションのそれぞれの面から分析し、話しことばの文に関する文法の基礎的、概観的調査を行なった。

B. 本年度の作業と担当者

本年度からは、話しことばの文法の調査研究の第2段階として、話しことばの文法の体系的な研究を目ざし、問題点を順次取り上げて詳しい調査研究を行なうことになった。

まず、文の構造の面において語順の研究に着手し、一方、イントネーション・ポーズ（間）等、文法と関連すると考えられる音声面の研究を進めた。

この研究に当たる話しことば研究室における仕事の分担は、次のとおりであった。

語 順 —— 鈴木 重幸 イントネーション —— 宮 地 裕
ポーズ —— 大石初太郎

なお、補助研究員吉村香苗・高橋隆子（昭和38年12月末退職）が作業を助けた。（室員南不二男は、本年度は「国民各層の言語生活の実態調査」の班に属し、主としてその作業に従った。）

1. 語順の研究

映画シナリオの会話文を資料として行なう。本年度はその第1年度として、別表の作品の会話文の文ごとのカード（約28,000枚）を作り、一部分分析にと

りかかった。

資料として採用したシナリオは、最近の『年鑑代表シナリオ集』、雑誌「シナリオ」（ともにシナリオ作家協会の編集）に掲載されたもののうち、おもな登場人物のことが標準語的なものに限った。なお、時代劇作品は除外した。

採用した作品は、次のとおりである。

（作 品）	（作 者）	（出 典）	（作 品）	（作 者）	（出 典）
張 込 み	橋 本 忍	年鑑代表シナリオ集 '58年版	キューポラのある街	今村 昌平 浦山 桐郎	年鑑代表シナリオ集 '62年版
巨人と玩具	白坂依志夫	〃	秋 津 温 泉	吉 田 喜重	〃
鯛 雲	橋 本 忍	〃	秋刀魚の味	野田 高梧 小津安二郎	〃
裸の太陽	新藤 兼人	〃	私は二歳	和田 夏十	〃
裸の大將	水木 洋子	〃	非情の青春	恩地日出夫	シナリオ '62年4月号
点 と 線	井手 雅人	〃	憎いあんちくしょう	山田 信夫	シナリオ '62年7月号
暗 夜 行 路	八住 利雄	年鑑代表シナリオ集 '59年版	謎の赤電話	長谷川公之	〃
独立愚連隊	岡本 喜八	〃	19号埋立地	〃	〃
人 間 の 壁	八木保太郎	〃	真 昼 の 罌	高 岩 肇	シナリオ '62年8月号
も ず	水木 洋子	年鑑代表シナリオ集 '61年版	獣 の 戯 れ	舟橋 和郎	シナリオ '63年2月号
世界大戦争	八住 利雄 木 村 武	〃	愚連隊純情派	増村 保造	シナリオ '63年6月号
二人の息子	松山 善三	〃			

2. イントネーションの研究

『話しことばの文型(2)』の一部として行なった研究調査に続いて、話しことばの文における音調がいかに意味表現に参与するか、イントネーションと文法との関連はどうかを探究することを目的とする。そのために、東京語のイントネーションによってイントネーションの理論的体系的考究を行ない、また、比較対照、反省に資するために、一、二の他の方言のイントネーションの調査研究を行なうことにしたが、本年度は、東京語による理論的体系的考究と、一型アクセント地帯のイントネーションの調査を行なった。そのうち、調査は次のとおりである。

調 査 地 点

被 調 査 者

福島県須賀川市仁井田南町

小橋寅之助・岡部マサノ

山形県山形市城西町

太田 米吉・畔柳和次郎

宮崎県都城市上長飯町

友重 和郎・平川元次郎

愛媛県喜多郡長浜町

久保シゲ子・大石 藤蔵

各2名の自由対話である。それぞれ約30分を限度としてカナモジ化し、録音と対比してイントネーションを観察考究し、さらに一部(都城の資料)については、その発話の文節的部分ごとにアクセントの確かめを行なった。このほか、補助資料として、福島県伊達郡桑折町成田・福島市清明町・福島市泉町・山形県東根市神町で自由対話を録音採集した。以上の調査について、菅野宏氏(福島大学助教授)・鈴木善弘氏(同)・佐藤亮人氏(山形大学厚生課長)・佐藤亮一氏(東北大学大学院学生)・鈴木久雄氏(都城市五十市中学校教諭)・宮田猛義氏(長浜市公民館主事)の御助力を受けた。

以上のほか、次の作業を行なった。

NHK放送文化研究所との共同研究として、放送劇団の男女俳優、女性アナウンサー計11名によるニュース等の発話を録音して、イントネーションを比較検討し、試みに、三つのセンテンスについてソナグラム・オシログラム・ピッチグラムの対照図を作成した。

イントネーション関係文献のうち、Wiktor Jassem “Intonation of Conversational English”(1952), František Daneš “Sentence Intonation from a Functional Point of View”(1960)について検討した。

3. ポーズの研究

ポーズが文の構造とどのように関連するか、文の構造にどのように参与するかを見ようとする。

まず、ポーズの問題を概観してみようとして、ポーズの性質上の種類、発話資料別のポーズの数(発話の量に対する比)、ポーズの場所と文の構造との関連、さらに、ポーズの大きさの別と文の構造との関連、声の切れ目(ポーズの直前)における音調その他の音声的様相、間投語(エー・アーなど)とポーズとの関連などを、少量の発話資料によってあらかう調べた。いずれも、今後の調

査のために見通しを得ようとする準備的作業である。使った発話資料は、ラジオのニュース解説2種(男・女)、講演、文学作品の朗読であった。また、ペン書きのピッチグラムを作成して、上記の、ポーズの大きさ、声の切れ目の音声の様相等の吟味のために利用した。次年度は、本年度の調査研究を継続、発展させる。(大石)

現代雑誌一般の用語用字の概観調査

A. これまでの研究経過

昭和31年度以降、現代雑誌一般の用語・用字の概観調査を行ない、その成果を36年度は『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊総記および語彙表（国立国語研究所報告21，昭和37年3月）で、37年度は同上第二分冊漢字表（国立国語研究所報告22，昭和38年3月）で、また、今年度は同上第三分冊分析（国立国語研究所報告25，昭和39年3月）でそれぞれ報告した（第三分冊の概要はE項〔pp. 9～14〕にしるしてある）。

以上三冊でこの調査の報告を終了する。なお、別に刊行した『分類語彙表』（国立国語研究所資料集6，昭和39年3月）には、報告書第一分冊語彙表所収の語のうち、人名・地名・記号などを除く大部分の語約7000を収める。

計量的調査では、調査目的に即応した統計理論の整備の必要はもちろんであるが、そのほかに、大量のカードを等質的に作成・操作するための、調査単位（単位語）の認定のしかた、カード採集・集計整理などの作業方式の決定、作業の手順、作業の品質管理などに関する周到な計画と実施が大切である。

われわれの用語用字調査の方法上の特色は、標本の抽出から数量的な主要結果の算定まで、一貫した計画のもとに標本抽出理論を使ったことである。この種の調査では十万分の一のオーダーにあるような小さい比率のものまでを多数扱わなければならない等の事情があるため、既成の標本抽出技法では思わしくない所がある。こうしてわれわれは新たな技法を開発する必要に迫られ、確率比例抽出法や比推定の長所を加味して、層化集落抽出法の一変形を案出した（担当は水谷静夫）。これで手作業による場合の用語・用字調査の方法はほぼ確立したと考える。

こうして、方法論的には、層化集落抽出法の一変形による語彙調査の理論と方法を開発し（→報告13，pp. 79～108；→報告21，pp. 295～320），標本から調査対象全体の語彙量を推定するための公式を求め（→年報6，pp. 52～59；→報

告13, pp. 26~37), また, 同音の別語か同じ語の意味の違いかを操作的に判別する公式を作り (→報告13, pp. 108~115), ある語がよく使われる語であるかどうかを論ずるには, なまの使用度数から, 相対尺度である使用率を計算し, かつ, 調査対象全体での使用率の推定精度をも考慮すべきであることを明らかにし (→報告12, p. 5), さらに, 基本語の選定に役立てるために語の基本度函数を実験的に求めた (→報告25, p. 21, p. 23)。

一方, 実践上の成果としては, 五十音順・使用率順の各種語彙表 (婦人雑誌→報告4, 総合雑誌→報告12, 雑誌九十種→報告22), 意味による分類語彙表 (資料集6はその集大成), 各種漢字表 (→報告4, 報告19, 報告22), 語の表記の一覧表 (→報告22), 助詞・助動詞の用例一覧 (→報告4, 報告25), 語の基本度の一覧表 (→報告25), 人名・地名, 語種・品詞の分布表 (→報告25), 活用形別の分布表 (→報告25), 〈かかり〉の一覧表 (→報告25), 複合語の一覧表 (→報告25), 同じ語か異なる語かの判別実例集 (→報告25) など, 国民の言語生活の実態を反映する資料を蓄積してきた。

以下に, 書きことば研究室がこれまでに行ってきた用語・用字調査の規模その他をまとめて示そう。

用語調査

資 料	調査対象	抽出比	標本 延べ語数	標本異な り語数	母集団の推 定延べ語数	発 表
1 婦人雑誌	主婦之友 [*] (25年1月~12月) (本文全体)	約1/6	14.6万	2.7万	90万	報告4
2 総合雑誌	13種 (28年7月~29年6月) (本文全体)	約1/40	23万	2.3万	900万	報告12~13
3 現代雑誌 一般	5部門90種 (本文全体) (31年1月~12月)	約1/230	53万	4.0万	1億6千万	報告21, 25

^{*}別に, 実用記事だけについて婦人生活 (25年1月~12月) を同じ抽出比で調査した。標本延べ語数は5.2万, 同異なり語数は1.0万, 実用記事全体の推定延べ語数は33万である。参照, 報告4。

用字調査

資 料	調査対象	抽出比	標本 延べ字数	標本異な り字数	現われなかつ た当用漢字数	発表
4 婦人雑誌	1に同じ [*]	全標本	17.0万	3048	41	報告4
5 総合雑誌	2に同じ	全標本の1/2	11.7万	2781	73	報告19

6 現代雑誌一般 3に同じ 全標本の2/3 28.0万 3328 15 報告22

※婦人生活の実用記事の場合は、標本延べ字数6.0万、同異なり字数2,000字である（追記参照）。

参考 婦人雑誌の調査の前に、朝日新聞の昭和25年6月分に対し全数調査を行ない、延べ24万、異なり1.5万（人名・地名を含まない）の語数を得た（→資料集2『語彙調査——新聞用語の一例——』昭和27年3月）。

B. 現代雑誌九十種の調査の輪郭

目 標 現代書きことば資料のうち雑誌という形態をとる刊行物について、広く各種の部門にわたり、その用語ならびに用字の概観を標本調査法によって計量的に試み、基本語彙設定ならびに表記法体系の改善のための基礎資料を得ようとする。

ここに現代雑誌一般とは特定の部門にかたよらず、ひろく各分野にわたり選定された成人用の雑誌（季刊、月刊、旬刊、週刊）をさす。ただし学術・技術・専門雑誌の類を含まない。

調査対象 昭和31年度刊行の雑誌、5部門90種（1月～12月号）の本文全体（付録・増刊号を含む）。

部門の分け方と各部門の雑誌の種類は次の通り。

一 評論・芸文（世界・中央公論・新潮・群像等）	12種
二 庶民（文芸春秋・家の光・週刊朝日等）	14種
三 実用・通俗科学（ダイヤモンド・自然・時の法令等）	15種
四 生活・婦人（主婦の友・装苑・暮らしの手帖等）	14種
五 娯楽・趣味（オール読物・読切小説集・映画の友・野球界等）	35種

調査対象の大きさ

延べページ数 22万6358ページ（正味）

推定延べ語数 約1.6億（β単位による）

内訳 { 下記以外の語 約1億語
助詞・助動詞 約5,600万語

抽出比 1/227

標本の大きさ

(1) 助詞・助動詞以外の語…広告を除いた全紙面から1/8ページ大の部分

8,000箇所。ページに換算して1,000ページ分。

(2) 助詞・助動詞……(1)の1/3。

(3) 表記・漢字……(1)の2/3。

(4) 複合語……(1)の2/3

標本延べ語数 約53万（総合雑誌の語彙調査で用いた基準（ β 単位）によって数えた語数）。おおよその内訳は次の通り。

区分	助詞・助動詞以外		助詞・助動詞		合計	漢字調査の部	
	延べ	異なり	延べ	異なり	延べ	延べ	異なり
前段	14.5万語	2.3万語	9.5万語	150語	24.0万語	13.8万字	2943字
中段まで	29.2	3.4	—	—	38.7	28.0	3328
後段まで	43.8	4.0	—	—	53.3	42.0(推定)	3505*

*漢字調査は中段までの原本について行ない、後段には及んでいない。しかし後段ではじめて現われた漢字の種類については、別に追跡を試み新たに177字を得た。したがって、後段までの全標本を調べた場合は、異なり字数が3505になる見込みである。なお、その場合の延べ字数は約42万字と推定される。

作業の段階 各部門とも9段階に分け、3段階ずつまとめて（前段、中段、後段）集計する。

C. 前年度までの経過および 本年度の作業

1. 前年度までの経過

資料用雑誌の決定とその収集、採集個所の抽出、採集用カードのリプリント、全段階のカード採集・検査・整理・集計および語の使用率ならびに推定精度の計算。

助詞・助動詞調査用のカードの採集・検査・整理・集計、記述法の研究および語の使用率ならびに推定精度の計算。

表記調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

漢字調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

複合語調査用のカードの採集・検査・整理・集計。

報告書『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊総記および語彙表（国立国語研究所報告21，昭和37年3月），同第二分冊漢字表（国立国語研究所報告22，昭和38年3月）の刊行。

2. 本年度の作業

報告書第三分冊「分析」編の原稿を作成し、これを印刷した（→E項〔pp. 9～14〕参照）。

『分類語彙表』の原稿を作成し、これを印刷した（→F項〔pp. 14～16〕参照）。

E. 報告書第三分冊「分析」編の内容

本年度は、『現代雑誌九十種の用語用字』の第三分冊（国立国語研究所報告25）として、「分析」編を印刷した。その内容は以下の通りである。（かっこ内は執筆者名）

目次細目・内容解説 pp. IV～VI

ページの左半分に目次細目を、右半分に内容解説をしるした。この部分と最後の「調査のデータ概略」を読めば大体のことがわかるようになっている。

0 調査のあらまし（見坊） pp. 1～6

5項目に分け、この調査全般の経過・対象、第三分冊の調査項目などを説明する。

1 語の基本度（水谷） pp. 7～51

基本語彙の選定に役立つ物さしとして、語の基本度というものを考え、基本度を実験的に求める方式とその結果を記述した。ここにいう語の基本度とは語の使用率と散らばり度（様々の分野の読みものにまんべんなくあらわれる度合）で表わされる函数で、基本度 $z = a + bx + cy$ で表わされる。この式の定数を調整するためには次のような実験を行なった。すなわち使用度数50以上の語1220中、使用率・散らばり度の観点で数量的性質が似ている語の中から五語ずつ、二十五組をランダムに抜いて、被験者（9名の専門家）にどちらの組が一層基本的と思うかを判定させた。この判定結果を使って、試作基本度函数

$$\text{基本度 } f = -0.6350 + 1.5825x - 0.4181y$$

を得た。ただし、 $x = \log_{10}(\text{使用率}) + 5$

$$y = \log_{10}(\text{散らばり度}) + 3 \quad \text{であるとする。}$$

この式を使って、標本使用度数50以上の語を基本度の高い順にならべた一覧表 (pp. 26~45) を作り、基本度の高い語700については意味の分類も行なった。700語についてみると、抽象的關係をさす語が半分以上を占め、生産物・用具や自然物・自然現象をさす語が少ない。

2 語彙の量的な構造 (水谷, 石綿, 宮島) pp. 52~68

(1) 使用率の分布〔全標本〕(水谷)

ある定まった値以上の使用率を持つ見出し語がいくつあって、その見出し語が延べ語数の何割をおおうか、について全体・各層に分けて計算した一覧表を作った。全体についての結果の一部をまとめて示すと、次の通りである。

使用率(%)	20	10	5	3	2	1	0.5	0.3	0.2	0.1	0.05
その使用率までの累加異なり語数	1	5	15	31	50	98	234	412	655	1375	2799
以上のものが延べ語数をおおう割合	3.0	8.4	15.2	19.7	25.8	32.6	42.1	48.8	54.6	64.6	73.5

大ざっぱに言えば、主要な 500 語を知っていれば、雑誌の半分は辞書をひかずに読める、という計算になる。

(2) 語種・品詞〔全標本〕(石綿)

語種と品詞の内訳を、語の使用度数・雑誌の部門と関連させて扱った。この中、語種・品詞別の%を、異なり語数(内がわの円)と延べ語数(外がわの円)とに分けて図示すると、図1のとおりである。また、これを使用度数ごとに分けて示すと図2、図3のとおりである。概括していえば、語種については異なり語数では漢語が和語よりも多くて半ば近くを占めるが、延べ語数では和語が漢語よりも多くて、全体の半ば以上を占める。品詞については、異なり、延べともに名詞が過半数を占める。

(3) 活用形の使用度数〔全標本の1/3〕(石綿・宮島)

動詞では「て」「た」などに続く形が多く、形容詞では終止連体形が多い。詳細は表の通りである。

活用形	語形の例	動詞	形容詞
未然形 1	{ 読まない 高からず	3333	8
" 2	{ 読もう 高かろう	345	13
連用形 1	{ 読みたい 高くて	3468	1049
" 2	{ 読んで 高かつた	13638	141
" 3	なかりせば	—	1
終止連体形		9222	2408
仮定形		456	13
命令形		239	2
計		30701	3635

図 1 語種・品詞別の異なり語数と延べ語数（百分比）

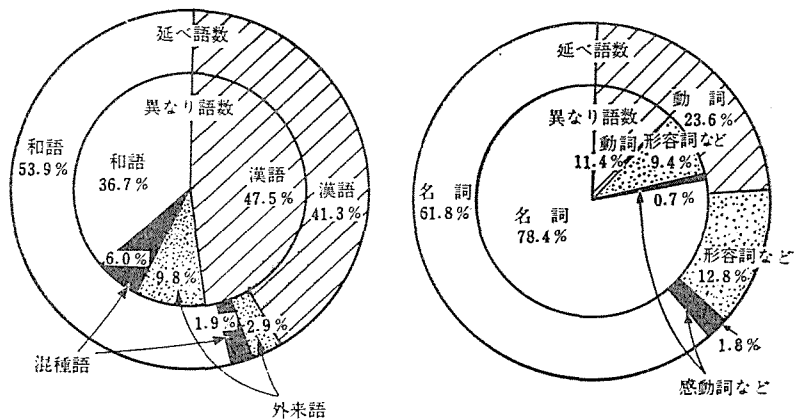


図 2 度数別にみた語種・品詞（異なり語数）

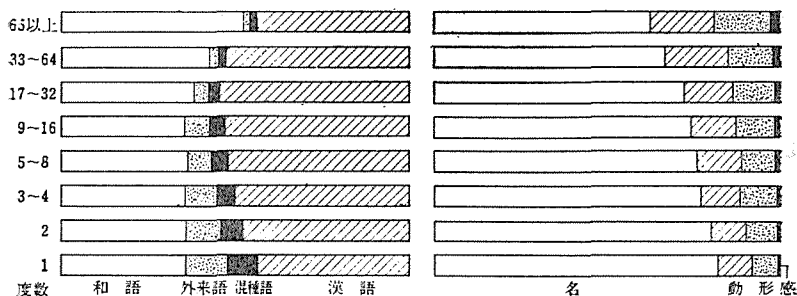
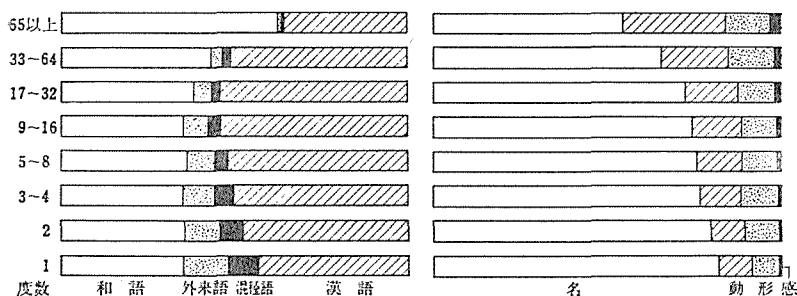


図 3 度数別にみた語種・品詞（延べ語数）



3 助詞・助動詞の用法 [全標本の1/3] (宮島) pp. 69~239

現代語の助詞助動詞の用法に関するくわしい記述は、すでに『現代語の助詞・助動詞——用法と実例——』（国立国語研究所報告3，昭和27年）があるので、この分冊ではその点は簡単にあつかった。すなわち、「用法別度数表」（pp. 74~90）では、この調査で得られたすべての助詞・助動詞あわせて140項目について、意味用法上の分類を行ない、各分類のもとに実例をあげ、全体と各層ごとの使用度数を示すにとどめ、くわしい記述・論証を省略した。その代わり、前記の報告書にない事柄を広範囲に取り上げた。

たとえば、「文節形度数表」（pp. 93~111）では、「書いたでしょう」「花

ならば」などのように、助詞・助動詞がついた文節の形の度数を全体と各層に分けて示した。「二つの〈かかり〉の前後関係」〔602項目〕(pp.178~228)では、「太郎に本を与える」と「本を太郎に与える」の、二つの表現のどちらが多く現われるかを比較一覧することができるようにまとめた実例集を用意した。これと似た一覧表に、「三つの〈かかり〉の前後関係」(pp.229~231)がある。このほか、助詞が文の成分上どの位置に来るかを概観した一覧表(pp.232~233)、〈かかり〉に対する〈うけ〉の異なり語数、延べ語数を示す一覧表(pp.234~238)、一つの〈うけ〉にかかっている助詞のうち、どれとどれは同じ文中にあって共存しやすいかを示す一覧表(pp.238)など、従来開拓されることの少なかった諸面を、数量的に記述・概観した。

助詞・助動詞の部で特に力をそそいだのは類義表現の比較である。たとえば受け身の表現には、「～に～れる」式の言い方と「～から～れる」式の言い方と二通りの表現がある。われわれの調査の結果では、相手が人間のばあいには「～から～れる」を用い、相手が人間以外のばあいには「～に～れる」を用いることが多い、ということが数量的に証明された。このような比較を、主格の表現(「が」「は」「の」)、出発点の表現(「から」「より」)、基準の表現(「に」「と」)結果の表現(「に」「と」)など各種の表現24項目にわたって取り上げ、統計学的な考察もくわえて記述した(pp.115~171)。

4 複合語 〔全標本の2/3〕(見坊) pp.240~293

このたびの調査では文を単位語に分割する際、 β 単位という規準に従った。このため、たとえば〈自転車〉ということばは、〈自転〉と〈車〉との二語として取り扱われるなど、語彙表(第一分冊)の利用上、十分でない面があった。そこで今回は、 β 単位を土台として形成された複合語(β 結合)のうち、出現回数3回以上のもの4,718語の一覧表を出すことにした。

複合語の表にのせた4,718語は、延べ約29万語の単位語について調査した結果の抜き書きで、出現回数の最高は〈数字+年〉の821回であった。以下主として人名・地名・数字などとの結合形が続く。複合語をもっとも多種類生産した単位語は〈する〉で、1,957種の複合語を生産した。

複合語について言えるおもな傾向は次のようなことである。

- (1) よく使うことばほど複合語をつくり、かつ、多種類の複合語を生産する。
- (2) 人名・地名・数字は、それ以外の語よりもよく複合語を作り、かつ多種類の複合語を生産する。
- (3) 複合語の生産量についてみると、語種では漢語、品詞では名詞と動詞がすぐれ、語種・品詞の組み合わせでは和語動詞がまさる。

5 同じ語か異なる語かの判別 [全標本] (石綿) pp. 294~330

ある単位語にどのような見出しを与えて整理するか、言いかえれば、ある見出し語を定めたとき、その中に属する単位語としてどの範囲の単位語までを含めるかということは、語彙調査では重要かつ基本的な問題である。たとえば、「焼け野原」の〈ヤケ〉と「やけになる」の〈ヤケ〉とは、同じ見出し語とするかどうか、「強豪」と「強剛」とは同じ見出し語とするかどうか、これをはっきりさせなければ、異なり語数も確定しないし、語ごとの使用度数を集計することもできない。この章では、1 語の変化、2 語形と意味の並行性の二つの観点から問題を概観し、このたびの調査にあらわれた問題語を五十音順に整理して、その語の簡単な用例ならびに処置を示した一覧表をのせた(pp. 303~330)。もとよりこの表は、このたびの調査にあらわれた見出し語四万の範囲内でのものであるから、すべてを尽くしたものではないけれども、同語別語を判別するさいの資料として役立つ面が大きいだろう。

索引 pp. 331~334

報告21, 22, 25の三冊にわたる項目・人名・地名の索引である。

調査のデータ概略 pp. 335~336

これは第一分冊にものせたが、今回は全三冊にわたる主要なデータの概略をまとめ、調査の全体に関する概念を数字的につかめるようにした。

報告書要目(第一~第三分冊) pp. 336~337

各分冊の内容紹介と目次の抜粋である。第三分冊のそれは巻頭にある。

F. 資料集『分類語彙表』の内容

『分類語彙表』(国立国語研究所資料集6, 昭和39年3月)は、もと『雑誌九

十種の用語用字』の一部として刊行する予定であつたが、都合により別に刊行することになった。

この『分類語彙表』は、語を意味によって分類し、同義・類義の語が同じところに集まるように作った語彙表であつて、たとえば「類似・一致」の関係を表わす語は同じ分類番号のところに集まっている。ただし、この本では、語をまず品詞によって大きく 1. (体の類), 2. (用の類), 3. (相の類), 4. (その他の類) の四つに分けることにしたので、上記の例で言えば、〈相似〉, 〈近似〉 (1. 1121), 〈似る〉, 〈似合う〉 (2. 133), 〈似つかわしい〉 (3. 133) は、それぞれ整数の位のところでは別な場所に分かれることになる。その代わり、小数点以下の番号は大体そうようになっている。

分類語彙表の作成の試みは、『婦人雑誌の用語』（国立国語研究所報告 4, 昭和28年）以来、順次成長してきたのであるが、このたびは、従来の用語調査の成果のみならず、さらに収録語数を大幅に広げ、広い見渡しのもとに、雑誌九十種の調査で得られた高使用率の語約 7,000 の、意味分類上の位置づけを行ない、日本語の一種の基本語彙表としても役立つようにした。

この分類語彙表に収めた語はおよそ 3 万 2600 語である。その内訳は次の通りとなっている。

『現代雑誌九十種の用語用字』 調査で使用度数 7 以上の語	約 7,000 (報告書第一分冊所収の 7234 語から人名・会社名・記号など を除いたもの)、『分類語彙表』では * 印をつけて示す。
同上調査で使用度数 6~4 の語	約 5,000 (第一分冊には収録してい ない)
阪本一郎氏『教育基本語彙』 所収の語	約 7,000 (2 万 2500 語の中、上記と 重複しないもの)
主観的に増補した語	約 3,600
合 計	約 32,600

『分類語彙表』の全体の体裁は次のようになっている。

まえがき (pp. 1~9) 分類語彙表というものの意味・役割、内外の類書の紹介、この『分類語彙表』の性質、この本の意味分類のしかたと特色、分類表の体裁などについて説明した。

分類項目一覧 (pp. 10~20) 分類各項目に与えた見出しの語句を番号順にあ

げて、分類語彙表そのものの目次とした。

本文 (pp. 21~167) 意味の違いに応じ、同じ語形が二か所以上に出るときは、随時相互参照をさせた。

索引 (pp. 171~362) 求める語の分類番号を知るために、五十音順の語彙索引をつけた。

G. 担 当 者

担当者は

見坊豪紀 水谷静夫 石綿敏雄 宮島達夫

で、第一研究部長の林大が、意味による分類語彙表関係の仕事を分担した。なお、補助者として、研究補助員橋本圭子、高木翠、鈴木百合子、小林さち子、本多レイ子が作業に従事した。

H. 来年度以降の予定

来年度以降は、「現代語の語誌的研究」という総合的な題目のもとに、次の二つの調査研究を行なう。

1 語の意味の記述的研究

2 注目すべき用例の採集と整理

1に関しては、書きことば研究室がこれまでに採集したカードを主体とし、これに明治以降昭和にわたる有名な文学作品二十七種から豊富に用例を追加採集して、語の意味の分析・記述を行ない、将来の辞書編集のさいの基礎資料とする。さしあたり、来年度は、動詞・形容詞・形容動詞などを中心とする約20万語を取り上げる予定である。

2に関しては、新聞、雑誌、単行本などの中から適宜選択して、めずらしい用語例、用字例などを採集・整理して、現代語の目録作成の資料に役立て、辞書編集その他の補助資料として随時活用する。来年度は、1と同じ資料を使って約11万語を採集・整理する。

(見坊)

大量語彙調査機械化のための準備的研究

A. この研究の目的

書きことば研究室ではこれまで比較的規模の大きな語彙調査を行ってきたが、確定した使用順位をもつ語数を万のオーダーで得るためには「現代雑誌九十種の用語用字」の規模の数十倍の調査が必要である。このような大規模な調査は、従来のような手集計ではとうてい不可能である。（もし手集計で行なえば、非常な長年月を要し、完成したときにはすでに資料としてはほとんど役に立たないものになってしまう）それゆえ、機械を用いることによって調査期間の短縮を考えなければならない。このために、大規模な語彙調査を機械化することを目標として、本年度から準備的研究に着手した。

B. 担 当 者

書きことば研究室の水谷静夫、石綿敏雄の2名がこれに当たった。

C. 本年度の研究

語彙調査の機械化のためには種々の方法が考えられようが、いわゆるパンチド・カード・システム（PCS）による方法とディジタル電子計算機を用いる方法とが考えられる。簡単な実験の結果、ディジタル電子計算機を用いる方が、はるかに短時間で処理でき、かつ人力を節減できることが明らかになった。そこで電子計算機すなわち電子情報処理組織（EDPS）の性質および能力について、また語彙調査やそれに関連あるEDPSによる実験についての情報を集め、かつそれに関するいくつかの小実験を行なった。

このような情報の整理や実験の結果は所内で配布した小冊子「こんぼーと」1～4号にまとめた。その主な内容を示せば次の通りである。

第1号（63. 10）

ヤマトによる模型的な語彙調査（一）

水谷

自動抄録と自動インデキシング（紹介）	水谷
第2号（63. 11）	
フェランティマーキュリ計算機の言語問題への応用	//
グロッサリの自動作成	//
第3号（63. 12）	
ヤマトによる語彙調査の模型実験（二）	石綿
第4号（63. 12）	
ソーティング—五十音順排列プログラムの準備—（一）	水谷
語の認識プログラムの一つの考え方	//

D. 来年度以降の予定

EDPS 導入のための準備的な研究を続けて行ない、機種、性能などに関する各種の情報を集め、大量語彙調査のためのEDPS の使用法を検討し、各種プログラム、実験データの蓄積をはかる。

（水 谷）

各地方言の共通語との対照的研究

A. 目的と意義

地方における共通語の教育、ことに共通語の文法の教育に役立つ資料を得るために、各地方言の文法と共通語の文法とを対照的に研究する。また、昭和39年度をもって、「日本語地図作成のための調査」の8か年の計画が終わるので、昭和40年度以降に地方研究員に委託すべき研究の準備を兼ねる。

B. 計画の概要

1. 期間

昭和38年度から3か年の予定。

2. 対象とする方言

秋田市方言、鹿児島市方言、京都市方言。

研究の目的にかんがみ、とりあえず、東北地方から一つ、九州から一つ、近畿地方から一つ、合計、上に記した三つの方言を選んだ。日本語の方言中、相互にはなはだしく違っており、かつ共通語と相当違う方言であること、近隣に対する影響力の大きい、都市の方言であることが、この三つの方言を選んだおもしろい理由である。

3. 方法

次のようにして行なう。

- (1) 現地へおもむき、現地の方言をよく保持する老人数人をインフォーマントを選んで二人ずつ対話をしてもらい、それを録音する。対話の話題はインフォーマントが自由に選ぶものと、われわれが指定するものとの二とおりとする。
- (2) 録音した対話を、現地でくり返し聞きながら文字（音声表記または音韻表記）に直し、共通語の対訳を付けて、分析のためのテキストにする。なお、それに先立って、既存の研究文献によって、現地方言に関する予備的な知識

を得ておく。また、録音の聞きとりには、現地の方言を保持する大学生に協力してもらう。

- (3) テキストから、分析の対象とすべき項目ごとに、カードを作成し、そのカードによって分析を行なう。文法的な現象全般を対象として分析するが、そのうちとくに、「助詞」として総称されている形式の分析に重点をおく。
- (4) ふたたび現地におもむき、分析によって得られた結果にもとづきながら、適当なインフォーマントについて質問調査を行なう。そして、「助詞」を中心に現地方言の文法を記述する。
- (5) 記述の結果にもとづいて、現地の方言と共通語との差異がもたらす、文法教育上の問題点を指摘する。また、この段階で、さらに現地をおとずれて調査する必要が起これば、これを行なう。

C. 経 過

昭和38年度中に、秋田市方言、鹿児島市方言について、その録音、テキストの作成、カード化を終わり、かつ一部の分析を始めた。

(1) 秋田市方言

インフォーマント5人について、2人ずつの対話を合計約6時間録音した。インフォーマントの氏名・性別・生年は次のとおり（敬称略）。

羽生トミ（女、1899）、福地発明（男、1882）、伊藤ヨシ（女、1905）、石井武治（男、1900）、鈴木セキ（女、1900）

録音したもののうち、1時間50分の分を文字化して分析用のテキストにした。文の数にして約1,150である。また、1時間50分のうち、約25分が指定された話題による対話、残りが自由話題の対話である。そして、テキストにもとづいて、分析用カード約13,000枚を作った。

なお、インフォーマントの選定その他について、秋田大学教授北条忠雄氏（国立国語研究所地方研究員）の協力を得た。

(2) 鹿児島市方言

インフォーマント6人について、2人ずつの対話を合計約6時間録音した。

インフォーマントの氏名・性別・生年は次のとおり（敬称略）。

千早ミツ（女，1880），武元武男（男，1900），神村フデ（女，1912），大山宏（男，1903），川上サク（女，1911），近藤旅庵（男，1901）

録音したもののうち，50分の分を文字化して分析用のテキストにした。文の数にして約900である。また，50分のうち32分は指定された話題による対話，残りは自由話題の対話である。そして，テキストにもとづいて分析用のカードを約10,000枚作成し，分析にとりかかった。

なお，インフォーマントの選定その他について，鹿児島大学教授上村孝二氏（国立国語研究所地方研究員）の協力を得た。

D. 今 後 の 予 定

昭和39年度には，京都市方言について，秋田市・鹿児島市の場合と同じように，録音・テキストの作成・カード化を行なう予定である。また，鹿児島市方言についての分析と記述を進め，39年度中に終える予定である。秋田市方言と京都市方言の分析と記述は，昭和40年度中に終えることを目標にしている。

E. 担 当 者

地方言語研究室の次の3名の共同研究である。

柴田 武（室長） 上村幸雄 徳川宗賢

計画の立案，および方言の録音，文字化は上の3名が共同して行なった。カード化と分析とは主として上村が担当して行なっている。また，白沢宏枝が補助的な作業を担当している。
（柴田・上村）

日本言語地図作成のための調査(第7年度)

A. は じ め に

北海道から沖縄まで、日本語地域の全域を範囲として、語の地理的分布を明らかにし、日本語の歴史を再構することを目的として始めたこの調査は、今年度、8か年計画の第7年度を終えた。今年度は、後期計画の第2年度に当たるが、230地点での調査を終わり、初年度からの調査地点数は、合計2,160になった。

B. 担 当 者

前期計画と同様、地方言語研究室が調査センターとなり、調査全般の企画・運営および結果の整理に当たった。臨地調査は、もっぱら地方研究員が地域を分担して行なった。昭和38年度に当たって、臨地調査を分担した地方研究員は次のとおり。

調査者

番号	担当地域	氏 名	勤務先 (1964年5月現在)	住所 (左に同じ)
01	北海道Ⅰ	五十嵐三郎	北海道大学文学部(助教授)	札幌市月寒西3条5丁目
02	北海道Ⅱ	長谷川清喜	北海道学芸大学札幌分校(助教授)	札幌市北23条西7丁目
03	北海道Ⅲ	石垣 福雄	市立東栄中学校(校長)	北海道札幌市手稲町西野79
04	青森	此島 正年	弘前大学教育学部(教授)	弘前市袋町20
05	岩手	小松代融一	県立杜陵高校(教頭)	盛岡市下小路63
48	宮城	加藤 正信	聖和学園短期大学(助教授)	宮城県宮城郡多賀城町八幡県営住宅55
07	秋田	北条 忠雄	秋田大学学芸学部(教授)	秋田市手形東新町1
59	山形	佐藤 亮一	東北大学文学部大学院(学生)	仙台市福室字松堂市営住宅LB32の135
54	福島	三浦 芳夫	県立田村高校(教諭)	福島県田村郡三春町大町51
55	茨城	金沢 直人	茨城大学教育学部(助教授)	水戸市石川町4043の2
11	栃木	多々良鎮男	宇都宮大学学芸学部(助教授)	宇都宮市一ノ沢町1の61
12	群馬	上 野 勇	県立沼田女子高校(教諭)	沼田市西倉内町810
52	埼玉	江 原 襄	市立城南中学校(教諭)	川越市南通町9の17

57	千葉	後藤 和彦	国立茨城工業高等専門学校 (講師)	勝田市東石川197の2桜本 アパート3D
58	東京	馬瀬 良雄	長野県短期大学(助教授)	長野市淀ヶ橋柳町アパー トB14の1
49	神奈川	日野 資純	静岡大学文理学部(助教授)	静岡市大岩町2の82静岡 大学大岩宿舎内
16	新潟	剣持隼一郎	県立柏崎高校(教諭)	柏崎市柏木町1255
17	富山・石川	岩井 隆盛	金沢大学教育学部(助教授)	石川県河北郡津幡町字清 水ホ313
18	福井	佐藤 茂	福井大学学芸学部(教授)	福井市湊新町66
19	山梨	清水 茂夫	山梨大学学芸学部(助教授)	山梨県中巨摩郡白根町百 々3062
20	長野	青木千代吉	市立三陽中学校(教諭)	長野県更級郡更北村中氷 鉤1089
21	岐阜	谷開 石雄	県立岐阜商業高校(教諭)	岐阜市旦の島402
22	静岡	望月 誼三	静岡大学教育学部(教授)	静岡市北安東628
23	愛知	山田 達也	日本福祉大学(助教授)	名古屋市中村区大秋町 3の26
56	三重	慶谷 寿信	名古屋大学文学部(助手)	名古屋市北区若園町2の 50今村方
50	滋賀	笥 大 城	県立虎姫高校(教諭)	長浜市分木町1260
60	京都	遠藤 邦基	京都大学文学部大学院(学 生)	京都市左京区下鴨上川原 町43
29	大阪	西宮 一民	奈良を見よ。	
27	兵庫Ⅰ	和田 実	神戸大学教養学部(助教授)	神戸市垂水区西垂水町神 田122
28	兵庫Ⅱ	岡田荘之輔	町立温泉小学校(校長)・ 同 幼稚園(園長)	兵庫県美方郡温泉町湯
29	奈良	西宮 一民	皇学館大学(教授)	伊勢市岩淵町342
30	和歌山	村内 英一	和歌山大学学芸学部(助教授)	和歌山市片岡町1の1
31	鳥取	広 戸 惇	島根大学文理学部(教授)	出雲市元宮町
32	島根	岡 義 重		島根県簸川郡斐川村大字 富村
33	岡山	虫明吉治郎	県立岡山操山高校(教諭)	岡山市津島字イックシ山 2413の15
34	広島	村岡 浅夫	町立三興中学校(校長)	広島県佐伯郡五日市町屋 代121
35	山口	阿 波 陽	県立下関南高校(教諭)	下関市小月町中迫2561中 野方
36	徳島	宮城 文雄	徳島大学学芸学部(教授)	徳島県那賀郡那賀川町島 尻931の2
37	香川	近石 泰秋	香川大学学芸学部(教授)	高松市九番町8 公務員宿 舎41
38	愛媛	杉山 正世	新田高校(教諭)	今治市河南町267
39	高知	土居 重俊	高知大学教育学部(助教授)	高知市弥生町44
40	福岡	都築 頼助	福岡学芸大学(教授)	福岡市高宮玉川町56

41	佐賀・長崎	小野志真男	佐賀大学教育学部（教授）	佐賀市赤松町中館93
43	熊本	秋山 正次	熊本大学教育学部（助教授）	熊本市若葉町36の12
44	大分	糸井 寛一	大分大学学芸学部（助教授）	臼杵市海添190
45	宮崎	岩 本 実	宮崎大学学芸学部（教授）	宮崎市下水流町190の1
46	鹿児島	上村 孝二	鹿児島大学文理学部（教授）	鹿児島市武町965
61	沖縄	外間 守善	琉球大学（講師）	那覇市首里当蔵町3の1 琉球大学国語研究室

（以上地方研究員47名）

なお、結果の整理については、言語地理学の専門家W・A・グロータース神父の協力を受け、また、作業一般に、研究補助員白沢宏枝が参加した。

C. 調査——進行状況

調査一般は、前年度と全く変わらない。詳細は、年報14について見られたい。

昭和38年度に調査した230地点は、次のとおり。

調査地点	調査者番号	調査地点	調査者番号
北海道		九戸郡九戸村伊保内	05
亀田郡七飯町字本町	03	九戸郡山形村川井	05
山越郡長万部町字国縫	03	宮城県	
幌泉郡幌泉町字幌泉	01	伊具郡丸森町耕野川前	48
広尾郡大街町字振別	02	伊具郡丸森町裏	48
青森県		登米郡米山町西野	48
弘前市富田二丁目	04	栗原郡花山村山内	48
東津軽郡平内町大字東田沢字田沢	04	桃生郡河北町長面	48
西津軽郡深浦町大字深浦字浜町	04	秋田県	
南津軽郡平賀町大字葛川字折戸	04	本荘市大簗	07
北津軽郡市浦村大字十三字深津	04	南秋田郡五城目町高樋	07
北津軽郡小泊村字小泊	04	鹿角郡八幡平村字坂比平	07
下北郡川内町大字川内字家之辺	04	山本郡八森町字八森	07
下北郡佐井村大字長後字牛滝	04	由利郡象潟町小砂川字中磯	59
岩手県		仙北郡中仙町長野	07
一関市本寺	48	仙北郡田沢湖町田沢字沼田	07
大船渡市日頃市町字石橋	05	雄勝郡皆瀬村畑等字湯元	07
上閉伊郡大槌町金沢	05	雄勝郡東成瀬村岩井川字東村	07
下閉伊郡川井村小国字末角	05	山形県	
下閉伊郡普代村普代	05	鶴岡市大字加茂	59
二戸郡福岡町上斗米字野月平	05	新庄市北本町	59
二戸郡安代町荒沢字細野	05	東田川郡黒町大字川代檀平	59
二戸郡一戸町中山	05	鮎海郡遊佐町大字豊岡字大内	59

福島県			
西白河郡西郷村大字羽太字谷地田	54	新潟市沼垂古町4丁目	16
信夫郡松川町大字浅川字館	54	直江津市塩屋区	16
信夫郡飯坂町大字中野字大滝	54	新井市大字新井朝日町	16
伊達郡桑折町字北町	54	西蒲原郡岩室村字間瀬	16
岩瀬郡天栄村大字田良尾字居平	54	南魚沼郡湯沢町二居	16
石城郡三和村大字下市萱字堀ノ内	54	三島郡寺泊町上荒町	16
双葉郡川内村大字下川内字宮下	54	刈羽郡小国町大字新町	16
茨城県		岩船郡粟島浦村字内浦	16
結城市白銀町	55	富山県	
東茨城郡常北町勝見沢	55	京砺波郡庄川町字湯山	17
鹿島郡鉾田町大字紅葉	55	西砺波郡福岡町字沢川	17
行方郡北浦村繁昌	55	中新川郡立山町芦峯寺	17
栃木県		石川県	
足利市大町	12	金沢市大野町4丁目	17
上都賀郡栗野町大字入栗野小字水沢	11	小松市打木町	17
芳賀郡芳賀町大字上稲毛田	11	珠洲市馬継町	17
塩谷郡栗山村大字川俣	11	加賀市伊切町	17
安蘇郡葛生町大字水木小字太田沢	11	鳳至郡柳田村字鈴ガ嶺	17
群馬県		福井県	
桐生市東久方町	12	敦賀市神楽2丁目	18
桐生市梅田5丁目	12	敦賀市追分	18
安中市板鼻町	12	大野市上打波中村	18
碓氷郡松井田町上町	12	坂井郡丸岡町本町2丁目	18
埼玉県		山梨県	
飯能市大字虎秀	52	中巨摩郡芦安村沓沢	19
比企郡小川町大字小川	52	南都留郡道志村善ノ木	19
千葉県		長野県	
銚子市芝町	57	松本市幅上町	20
市原市市津町東国吉	57	大町市高見町	20
山武郡大網白里町四天木納屋	57	塩尻市塩尻町	20
海上郡飯岡町菰園	57	東筑摩郡四賀村中川横川	20
東京都		西筑摩郡橋川村贅川	20
太田区桃谷町	58	西筑摩郡王滝村	20
町田市本町田1丁目	58	南安曇郡安曇村稲核	20
南多摩郡多摩村関戸	58	北安曇郡白馬村北城塩島	20
神奈川県		岐阜県	
横須賀市佐島	49	大垣市長沢町	21
足柄上郡山北町中川簗沢	49	揖斐郡春日村六合小字榎	21
新潟県		本巣郡根尾村大字長嶺	21
新潟市島見町	16	山県郡美山村大字岩佐	21
		大野郡清見村池本	21

大野郡白川村字小白川	17	吉野郡野迫川村大字平	29
吉城郡神岡町船津	21	和歌山県	
静岡県		東牟婁郡那智勝浦町勝浦	30
静岡市緑町	22	東牟婁郡熊野川町上長井	30
清水市西河内河内	22	西牟婁郡中辺路町小松原	30
三島市三島	22	西牟婁郡白浜町白浜	30
庵原郡蒲原町神沢	22	鳥取県	
周智郡森町三倉小字大河内	22	鳥取市賀露町	31
周智郡春野町小俣京丸	22	東伯郡羽合町大字宇野	31
愛知県		日野郡日南町阿毘縁	32
名古屋市緑区鳴海町字三皿	23	島根県	
蒲郡市蒲郡町本町	23	大田市大森町駒の足区	32
南設楽郡作手村大字菅沼字落合	23	八束郡島根村大字野波	32
三重県		遼摩郡温泉津町温泉津大字小浜	32
鳥羽市答志町	56	美濃郡美都町大字都茂	32
員弁郡北勢町瀬木	56	岡山県	
一志郡美杉村奥津	56	笠岡市笠岡	33
多気郡宮川村唐櫃	56	新見市草間井倉野	33
志摩郡阿児町安乗	56	児島市林	33
滋賀県		後月郡芳井町大字西江原小字西村入	33
神崎郡永源寺町箕川	50	英田郡作東町原	33
高島郡朽木村古川	50	広島県	
京都府		山県郡芸北町大字東八幡字菅原	32
舞鶴市西神崎	60	神石郡三和町高蓋	34
北桑田郡京北町大字上黒田小字森ノ本	60	神石郡三和町坂瀬川	34
北桑田郡美山町大字盛郷小字林	60	双三郡三和町下板木宮蔵	34
大阪府		双三郡布野村上布野二井殿	34
北河内郡交野町字星田	29	比婆郡東城町内堀	34
兵庫県		比婆郡比和町比和	34
尼崎市大物町2丁目	29	山口県	
相生市那波	27	下関市上田中町8丁目	40
加西郡北条町千ノ沢峠	27	下関市大字蓋井島	35
飾磨郡家島町真浦	28	防府市大字向島字郷ヶ崎	35
宍粟郡安富町植木野	27	下松市大字笠戸島字本浦	35
城崎郡竹野町椒小字中村	28	小野田市刈屋	35
養父郡養父町長野小字尾ノ上	28	光市大字室積浦上西之浜	35
朝来郡生野町黒川小字黒川	28	吉敷郡秋穂町大字秋穂東本郷	35
氷上郡青垣町佐治	28	徳島県	
津名郡淡路町岩屋片浜	27	阿南市大井町	36
奈良県		那賀郡上那賀町平谷字椎野尾	36
吉野郡天川村大字洞川	29	海部郡海南町皆ノ瀬	36

香川県		球磨郡水上村大字江代川口区字藤藪	43
小豆郡土庄町豊島唐櫃	37	球磨郡山江村大字万江字屋形	43
香川郡塩江町塩江	37	大分県	
愛媛県		豊後高田市大字呉崎中新開	44
東宇和郡野村町小屋字大久保	38	東国東郡安岐町大字下原	44
南宇和郡西海町船越	39	東国東郡姫島村北浦	44
南宇和郡内海村家串	38	下毛郡山国町大字槻ノ木字新谷	44
北宇和郡宇和海村大字蔦淵字豊浦	38	宇佐郡安心院町大字寒水	44
北宇和郡宇和海村大字日振島字明海	38	宮崎県	
上浮穴郡柳谷村西谷字古味	38	宮崎市大字鏡洲	45
高知県		延岡市新町	45
高知市江の口	39	日向市美々津町別府村	45
宿毛市沖の島弘瀬	39	西臼杵郡高千穂町大字河内	45
中村市常六	39	西臼杵郡日之影町大字見立字川之詰	45
土佐清水市下川口郷	39	児湯郡木城村大字石河内	45
福岡県		鹿児島県	
門司市八幡町3丁目	40	谷山市下福元町錫山西山部落	46
宗像郡玄海町大字鐘崎	40	薩摩郡薩摩町永野	46
宗像郡大島村字西区	40	姶良郡姶良町脇元	46
遠賀郡芦屋町第一船頭町	40	姶良郡福山町大字佳例川小字柴建	46
佐賀県		姶良郡溝辺町大字有川小字石原	46
武雄市若木町大字川古山中	41	嚙嗹郡有明町大字伊崎田小字繩瀬	46
小城郡小城町北小路	41	肝属郡内之浦町大字岸良小字辺塚	46
長崎県		肝属郡大根占町大字城元小字神之浜	46
長崎市竿の浦町	41	肝属郡佐多町大字馬込小字大泊	46
東彼杵郡東彼杵町平似田郷	41	沖縄	
西彼杵郡長与村本川内郷大越	41	北部地区(国頭郡)東村字平良	61
南高来郡有家町原尾名	41	北部地区(国頭郡)久志村字瀬嵩	61
南高来郡愛野町中島	41	北部地区(国頭郡)国頭村字安波	61
北松浦郡小佐々町田原	41	北部地区(国頭郡)恩納村字恩納	61
熊本県		北部地区(国頭郡)金武村字金武	61
八代市東塩屋町	43	南部地区(島尻郡)知念村字久高	61
球磨郡球磨村大字神瀬字上葎	43	中部地区(中頭郡)西原村字桃原	61
球磨郡錦村大字一武字本別府	43		

以上 230地点

次に示す地点では、地方研究員の調査に、調査センターの方言言語研究室員が同行し、調査現場で起こるいろいろな事態について打ち合わせをして、全国での調査が統一して行なわれるように努めた。京都府地方研究員遠藤氏は、昭和37年度途中から、この調査に加わった。

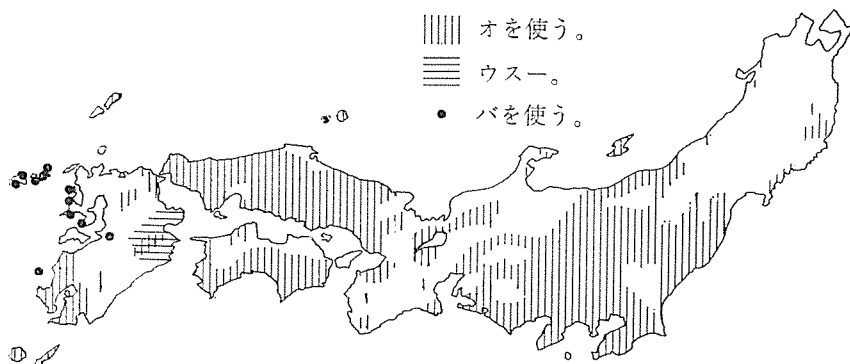
地 点 名	地方研究員	同行研究室員
京都府北桑田郡京北町大字上黒田	遠藤 邦基	野元 菊雄

D. 結 果 の 一 部

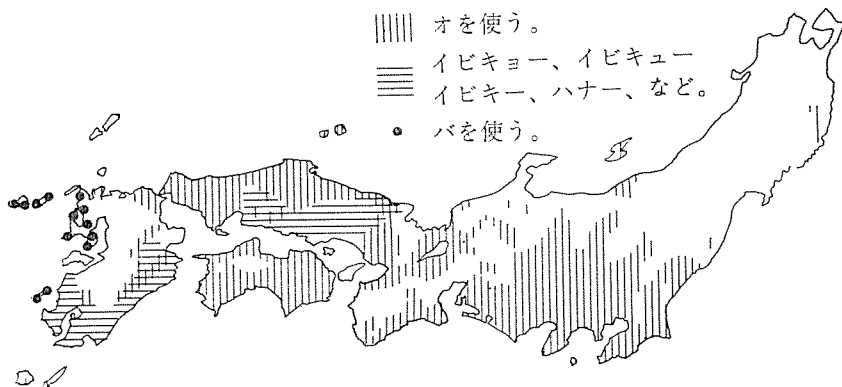
結果整理は進行中であるが、その一部を示そう。

「嘘をつく」^{うそ}「𦵏をかく」^{いびき}の報告のうち、「を」という格助詞を使うかどうかについて、まとめたものである。

第1図 「嘘をつく」



第2図 「𦵏をかく」



両項目とも、特に「を」の有無を調べるための項目ではなかったが、両図の分布はきわめてよく一致した。両図とも、特定の調査方針のもとに調査した結果をまとめたもので、これだけからは、空白の地域が必ずしも「を」や「ば」という助詞のない地域とは言えない。しかし、両図が、多少違いつつもほとんど一致していることは、なんらかの意味を持つものと考えられる。

なお、日本言語地図作成のための調査項目の中には、別に「灸^{きゅう}をすえる」「句^くをかぐ」「咳^{せき}をする」「胡座^{あぐら}をかく」「片足び跳をする」などがある。さらに、これらとも比較すべきである。

E. 来年度の見通し

昭和39年度には、日本言語地図作成のための調査8か年計画は、その全計画を完了するであろう。調査は、前年度と同じように、後期計画の方針で行なわれる。

(柴田・徳川)

中学校生徒の言語能力の発達に関する研究

A. 前年度までの経過

国語教育研究室では、小学生の言語能力の発達に関する調査研究にひきつづいて、継続調査法による中学生の言語能力の発達に関する研究を行なう予定でいたが、この調査を始める前に、あらかじめ、中学校1年から3年までの間にみられる言語能力の発達の実態、傾向、問題点等を概観し、中学校の特殊性に適した調査方法、調査問題等を検討しておくために、昭和36年度に、中学校生徒の言語能力の実態について概観調査を実施した。

調査の実施校には、特定地域にかたよらずなるべくいろいろな地域の特殊性や、地域性による問題点を把握することができるように、大都市、地方都市、農村、山村、漁村、炭鉱地域の性格をもった、東京都新宿区四谷第二中学校・滋賀県大津市打出中学校・神奈川県中郡比々多中学校・長野県諏訪郡富士見南中学校・宮城県桃生郡雄勝中学校・佐賀県多久市中部中学校の6校を選び、各校の各学年の生徒（1学級分）を被調査者とした。調査項目は、聞き方、話し方（録音器使用）、読解、読書量（読書速度）、作文、文字（漢字）、語彙、文法、表記（送りがな・かなづかい）、付帯調査（文字・語彙・作文の発達要因調査）にわたり、テスト所要時間は延べ8時間を要する規模のものとなった。この調査項目が広範にわたったことと、テストの実施時期が遅れたことから結果整理の大半が37年度にもちこされ、37年は、さらに国民各層の言語生活の実態調査（特別共同研究）のうち、学校の生徒を対象とする調査——「中学生・高校生の文字習得要因調査」を担当、問題作成、実施、結果の集計整理にあたったために、実態調査は、各調査項目の第一次集計整理を終了したのみで、まとめのための全体的、関係的、分析的整理作業は次年度の仕事として残された。

B. 本年度の研究作業の概要

本年度のおもな仕事は、(1)中学生の言語能力の実態調査の結果整理とまとめ

(2)中学校国語科学習指導の実態調査 (3)次年度の研究（追跡調査による中学生の言語能力の発達に関する研究）のための準備作業 (4)小学生の言語能力の発達に関する研究の報告書（総合編）の刊行である。

1. 中学生の言語能力の実態調査の結果整理とまとめ

実態調査のそれぞれの能力についての第一次集計は前年度までに終ったが、まとめのために、今年度はさらに、全体の集計をもとにして、学年的発達状況、中学生の言語能力の問題点、小学生の言語能力との比較、各言語能力相互の相関関係、男女差、地域差等の観点から、全体的、関係的、分析的な整理作業を進め、所期の整理作業の大体を終えた。

2. 中学校国語科学習指導の実態調査

中学生の言語能力の実態調査で、中学生の能力の実態は一応概観でき、教科書を中心とした教材調査等で、中学生はどのような教材によって学習しているかもわかるが、どのように指導されているか、指導面の実態については、中学校は、小学校・高等学校に比べて、まだ十分にわかっていない点もあるので、能力を概観したこの機会に、国語科指導法の実態調査をあわせて実施した。実施の概要および結果の大体は別項で報告する。

3. 次年度の研究のための準備作業

3.1 調査方法の再検討吟味調査を行なう。

次年度の研究のための準備作業として、初め、36年度の実態調査の結果に倣して、従来この種の調査方法を検討し、調査項目等をはっきり決めるための吟味的な小調査（例、語彙習得の地域差）を行なう予定であったが、研究室の人員異動のために、そうした調査は実施できなかった。しかし、実態調査の結果を考慮してそれぞれの調査の方法を検討しあい、次期調査の計画・方法等の立案に資した。

3.2 調査資料の準備・作成

従来も、調査に際して、教材や他の諸資料の調査検討を行なってきたが、さらに資料の整備・充実をはかるために、教科書提出の漢字や語彙の使用状況を調べ、それをカード化して検索の便をはかり、カードを蓄積して、調査資料として利用できるようにする。漢字テストでは、従来も、各社の国語教科書の漢

字の提出・使用状況を調べて問題作成にあたってきたが、語彙もカード化する予定で、今年度はさしあたり三種の国語教科書の主要語句の採集を終った。このカードの作成は今後も引き続き行ない、本カードに記載収録して、各種の国語教科書の学習上主要な語句が、学年別・語種別・教材別などでわかるようにする予定である。

3.3 継続調査校の選定と次年度新入学生徒の調査問題の作成

次年度（昭和39年）から新しく着手する中学生の言語能力の発達に関する継続調査は、4月早々第1回めの調査を開始するので、38年度中に、調査協力校を選定しておかなければならない。①地理的になるべく近い ②学校側の理解と協力がえられる ③標準的な中学校（生徒の学力・地域環境などの上で、特殊なカタヨリのない学校）などの条件を考慮し、研究所所在地の北区教育委員会指導主事相川正志氏のご協力で、北区稲付中学校（校長 伊東甚吾氏）を新しく始める研究の協力校にお願いすることができた。

4月早々、新入1年生を対象に行なう当用漢字全数調査（よみ・かき）のために、問題作成の準備を進めた。

4. 小学生の言語能力の発達に関する研究の報告書（総合編）の刊行

昭和28年以来実施してきた小学生の言語能力の発達に関する調査研究の結果は、今までに、報告書7「入門期の言語能力」10「低学年の読み書き能力」14「中学年の読み書き能力」17「高学年の読み書き能力」および「国立国語研究所年報8・9・10」（聞き方・話し方について）で、中間報告をしてきたが、さらに、6年間を通してみた各言語能力の発達状況、発達上の特徴、問題点、言語能力と発達諸要因の相関関係、事例研究などをまとめて、報告書（総合編）を刊行する予定であった。総合編をまとめるにあたり全体のまとめという観点から新しく資料を分析整理しなおしたり、考察をすすめるために、その後行なった補充調査の結果との比較検討をしたりしなければならず、一方、新しい仕事を並行させたために、まとめのために相当時間を要したが、原稿が完成したので、「小学生の言語能力の発達」（約600ページ）として、39年度刊行の予定である。

C. 担 当 者

上述（１～４）の研究調査は、下記の国語教育研究室員および第２研究部長（興水実）の共同研究であるが、調査項目が広範なために、問題作成、結果の整理、まとめ等については、それぞれ分担を決め、随時、共同討議にかけながら、研究作業を進めた。

興水 実〈読解・読書量・学習指導法〉

芦沢 節〈作文・文字・表記〉

村石 昭三〈聞く・話す・発達要因〉

吉沢 典男（昭和38年5月16日まで）〈語彙・文法〉

根本今朝男（昭和38年12月1日から）〈学習指導法〉

（「小学生の言語能力の発達」については、前室員高橋太郎が、文法・語彙・話すをまとめた）

なお、研究補助員、川又瑠璃子が、集計整理などの作業一般に参加した。

また、一定期間、数名の臨時補助者が、一部の集計作業を助けた。

（芦沢）

D. 中学校国語科学学習指導の実態調査

中学校国語科学学習指導は、学習指導要領や教科書によってその大綱が決められているが、それが実際にどのように行なわれているのか、学校の指導の実態については、中学校は、小学校および高等学校とくらべて、まだ十分にかたまっていないところがあるといわれている。学習指導の実態を知る方法はいろいろ考えられるが、ここでは全国的な概観を目的として、質問紙法をとった。調査票にはつぎの13の質問事項をふくめた。

質問Ⅰ 学校の環境と学校の国語科学学習指導

質問Ⅱ 教科書，ワークブック，ノート，筆記用具

質問Ⅲ 書道塾，学習塾，家庭学習

質問Ⅳ 文法の指導

質問Ⅴ 漢字・表記等の学習指導

質問Ⅵ 語句の学習指導および辞書指導

質問Ⅶ 発音および話すことの学習指導

質問Ⅷ 聞くことの学習指導

質問Ⅸ 作文の学習指導

質問Ⅹ 読むことの学習指導

質問Ⅺ 読書指導

質問Ⅻ 中学校国語科学習指導の問題点

質問Ⅼ 中学校国語科学習指導の各領域に対する時間比重

調査票の作成にあたって、横浜市指導主事金子保雄氏をはじめ、横浜市中学校国語教育研究会のかたがたの助言をいただいた。

調査票の配布先についてはA・B二通りある。Aは研究所の所在地である東京都北区および隣接の板橋区の中学校全部と、横浜市の全校とである。これについては、北区教育委員会指導主事相川正志氏、板橋区同染田屋謙相氏、および横浜市中学校国語教育研究会長石田武雄氏のご協力を得た。Bは、全国的に、厳密なサンプリングではないが、いろいろな地域類型にわたるように、北海道をはじめ、東北、関東、中部、近畿、中国・四国、九州の各地方から一、二県ずつを選び、それぞれの県としていろいろな地域にわたる学校の推せんを、各地の指導主事、研究会長、研究会幹事のかたにお願いした。これにご協力いただいたかたは次の通りである。（敬称略）

大槻富雄（北海道教育庁学校教育課） 岩下忠男（宮城県立教育研究所） 斉藤正夫（福島県教育委員会指導室） 塙保貞（福島県教委信夫出張所） 伊藤武司（福島県教委田村出張所） 石井広中（福島県教委伊達出張所） 武藤成能（福島県教委耶麻出張所） 藤田茂（福島県教委東白川出張所） 佐藤政吉（福島県会津若松市教育委員会） 田中久直（新潟県長岡市教育委員会） 徳橋善四郎・葦塚知久（埼玉県深谷市立深谷中学校） 中沢政雄（東京都教育庁指導部） 横山克巳（岐阜県教育委員会学校指導課） 小林春夫（名古屋市立志賀中学校） 西村文彦（三重県志摩郡磯部中学校） 池田新市（滋賀県立教育研究所） 吉川隆美（島根県教育庁学校教育課） 小野保（香川県教育委員会学校指導課） 仲田庸幸（愛媛大学） 石田精二（愛媛県教育委員会指導課） 小野志真男（佐賀大学）

調査票は昭和38年12月下旬に配布し、39年2月25日までにほとんどが回収さ

れた。(配布総数580, 回収数414)

回収されたものを都・道・県別一覧表にすると、次のようになる。

中学校国語科学習指導の実態に関する質問紙調査回収状況

北海道	32	埼玉県	11	岐阜県	27	愛媛県	10
宮城県	36	東京都	72	滋賀県	27	香川県	18
福島県	26	神奈川県	37	三重県	18	佐賀県	15
新潟県	34	愛知県	26	島根県	25	計	414

質問の内容と結果のあらまし

以下、質問のあとに二つ示してある数字の、前は (A群) 東京都2区・横浜市全校の計、あとは (B群) 北海道・宮城県・福島県・新潟県・埼玉県・東京都・愛知県・岐阜県・滋賀県・三重県・島根県・愛媛県・香川県・佐賀県の抽出校の計。() 内は%, () なしは平均数。

質問Ⅰ 学校の環境と学校の国語科学習指導

(1) あなたの現在の学校の地域環境

1. 住宅市街 (61.6 20.8)
 2. 商業市街 (30.1 16.1)
 3. 工業市街 (23.3 3.8)
 4. 鉱業市街 (0 0.6)
 5. その他の市街 (1.4 3.8)
 6. 都市近郊農村 (17.8 15.0)
 7. 普通農村 (0. 19.9)
 8. 鉱山 (0. 0.9)
 9. 小都市 (0. 12.0)
 10. 豊山村 (0. 16.1)
 11. 純農村 (0. 7.3)
 12. 漁村 (1.4 8.5)
 13. 山村 (0. 2.1)
 14. その他 (0. 2.3)
- (二つにまたがっている場合は両方をかこむ)

(2) // 全学級数 23.7 19.0学級

(3) // 国語科教員数 1. 専任者 4.7 3.0名 2. 兼任者 0.9 2.2名

(4) // 毛筆習字は

1. 国語科教員全員で指導 (60.0 35.7)
2. 国語科教員のうち得意な教員が指導 (24.3 39.8)
3. 国語科教員以外の教員が指導 (5.7 21.1)
4. 特別の非常勤の講師を依頼 (10.0 3.4)

(5) // 図書室があるか 1. ある (95.9 92.1) 2. ない (4.1 7.9)

(6) // 読書指導は、国語科教員の仕事になっているか

1. はい (65.2 75.2)
2. いいえ (34.8 24.8)

(7) // 学校放送の施設 1. ある (100. 97.0) 2. ない (0. 3.0)

(8) // 放送施設の国語科学習への利用、

1. たびたびする (11.0 9.4)
2. いくらかする (53.4 49.6)
3. ほとんどしない (35.6 41.1)

(9) // 現在、学校新聞を出しているか

1. 出している (79.5 84.3) (年 3.0 3.9回) 2. 出していない (20.5 15.7)
- (10) // 学校文集・学級文集
1. 現在学校文集を出している (54.9 49.7) (年回) 1.1 1.2
2. 出していない (45.1 50.3) 3. 現在学級文集を出している (44.6 50.7) (年 1.6 1.9回) 4. 出していない (55.4 49.3)
- (11) あなた自身の現在の国語科の受け持ち (教頭や兼任者の場合を除く)
- 学級数 5.3 4.7 総時間 (1週) 22.8 21.5
- (12) あなたのそのほかの校務分掌 (かんたんに書いてください)

(1)の学校の地域環境について、A群は等質度が強いが、B群にはかなりのバラエティーがある。学校放送の施設を97.0%もの学校が持っているということは、学校放送の普及度がひじょうに高いことを示すとみてよいであろう。しかし、放送施設を国語科学習に利用することはいくらもなされていない。

図書室はほとんどの学校にある。全体の73.4%は読書指導も国語科教員の負担となっている。毛筆習字は、A群(都会地)では国語科教員全員の指導が多く、B群(全国的)では得意な者が指導することが多い。講師依頼も都会地のほうが多い。

質問Ⅱ 教科書、ワークブック、ノート、筆記用具

- (1) 学校で現在使っている教科書は 1. 全学年 ○○会社本 (75.3 95.0)
2. 学年によってちがっている場合 (24.7 5.0)
- 1年生 ○○会社本
- 2年生 ○○会社本
- 3年生 ○○会社本
- (2) あなた自身の受け持ちの学級では、教科書に付属するワークブックを
1. 使っている (35.2 54.3) 2. いない (64.8 45.7)
- (3) // 国語科のノートを
1. 用意させている (93.2 94.7) 2. 特別に用意させない (6.8 5.3)
- (4) あなた自身の受け持ちの学級では、国語科の筆記用具は現在 (○を二つ以上つけてもよい)
1. 鉛筆 (100. 99.7) 2. ペン (8.2 9.7) 3. 万年筆 (57.5 42.8) 4. その他 (8.2 5.6)
- (5) // 漢字のテストブック、ドリルブックを、中学校にはいつから
1. 使った (49.3 60.1) 2. 使ったことがない (50.7 39.9)
- (6) // 国語のテストブック、ドリルブックを中学校にはいつから
1. 使った (68.5 77.4) 2. 使ったことがない (31.5 22.6)

(7) あなたの学校では学力増進会等のテストペーパー（国語科をふくむ）を最近

1. 大いに使っている (19.2 25.4) 2. 少し使っている (46.6 52.2) 3. 使っていない (31.5 22.4)

(1)の使用教科書は、ここでは省略する。教科書に付属するワークブックの使用は、大都会地よりも、全国各地区のほうが多い。全体的には、使っているところといないところと、約半々である。教科書に付属するのではない漢字のテストブック・ドリルブック、国語のテストブック・ドリルブック、その他学力増進会等のテストペーパーなどの使用率は、かなり高い。これは、国語科学習指導の現況を示すものと言えよう。

質問Ⅲ 書道塾，学習塾，家庭学習

(1) あなた自身の受け持ちの生徒で，現在書道塾へ行っている者の数 6.1 2.7名
〔全員に対する大体の比率 (3.5 1.6) 〕

(2) // 現在学習塾で国語も勉強している者の数
12.2 5.0名 (6.4 3.5)

(3) あなた自身の受け持ちの生徒は，現在家庭で国語の参考書やワークブックのようなものを使って勉強しているでしょうか

1. しているらしい (84.7 86.7) その全員に対する比率
(20.2 48.4) 2. ほとんどない (15.3 13.3)

書道塾へ行っている者，学習塾で国語も勉強している者ともに，A群：B群の比はほぼ2：1である。これは，この種の塾が都市部に多いということを裏書きしているように思われる。この調査では，学習塾へ通うもののうち国語も勉強している者と限定したが，この限定をはずせば，学習塾へ通う者の数はおそらくずっと多くなるであろう。(3)の参考書やワークブック等の家庭での使用度を見ると，その全員に対する比率が，A群：B群＝20.2：48.4で，(1)(2)のばあいと逆の傾向を示している。

質問Ⅳ 文法の指導（必要によって， 1. 自分の場合 2. ほかの先生の場合 3. 学校としてのどれであるかをお書き加えてください）

(1) 読解・作文等の場合における文法的事項の学習指導の時間

- 1年生の場合 年間合計 13.3 15.6時間ぐらい
2年生の場合 年間合計 15.3 17.2時間ぐらい
3年生の場合 年間合計 18.3 18.4時間ぐらい

(2) 正教科書に付録されている文法のまとめの特別指導

- 1年 1. する (70.2 81.2)(年間合計9.1 10.7時間ぐらい)
2. しない (29.8 18.8)

- 2年 1. する (75.0 84.0)(年間合計9.0 11.1時間ぐらい)
 2. しない (25.0 16.0)
 3年 1. する (79.7 89.1)(年間合計10.5 11.5時間ぐらい)
 2. しない (20.3 10.9)

(3) 正教科書以外の特別の文法教科書

1. 現在使っている (26.8 33.7) 2. 現在使っていない (73.2 66.3)

(4) 以上のほか、文法の学習指導について、あなたの学校で特に時間をかけてしていることがあったら下に書いてください。

ここに示してある数字は、自分の場合、ほかの先生の場合、学校としての三つをふくんでいる（三つの場合に分けることが、回答からみて困難であったため）。

文法的事項の学習指導は上学年に行くにつれて約2時間ほどの割合で増加している。正教科書に付録の文法のまとめは8割前後が行なっており、これも学年が進むにつれて増加するという傾向を示している。正教科書以外の特別の文法教科書は、全体の約3割が使用している。

(4)の「以上のほか、文法の学習指導について、あなたの学校で特に時間をかけていることがあったら」については、全体の $\frac{1}{2}$ 程度の記入が見られた。そのうちの目立ったものを記すとだいたい次のような事項である。

- ・3年生だけ1週1時間の特設時間を設け、3年間の文法的事項のまとめをしている。
- ・正教科書にでてきた時に指導し、通しのまとめを学年末に行なっている。
- ・正教科書以外に系統的な文法指導を実施している。
- ・教科書の文法的事項を1学期に1回5時間ずつとってまとめて教えている。
- ・全員に文法のワークブックを買わせて特別に時間をさいて指導している。

質問Ⅴ 漢字・表記法等の学習指導（あなたの学校の大体の傾向を書いてください）

- (1) 漢字の書き取り テストに 1. 出題する (100 99.7) 2. 出題しない (0. 0.3)
 (2) かなづかい、送りがな // 1. 出題する (93.2 95.0) 2. 出題しない (6.8 5.0)
 (3) ノートの検査 1. する (97.3 97.6) 2. しない (2.7 2.4)
 (4) 以上のほか、漢字・表記法の学習指導について、あなたの学校で特に試みていることがあったら、下にお書きください。

漢字の書き取りをテストに出題しない学校はほとんどない。また、かなづかい、送りがなについては、95%という高い出題率が認められたが、これは、現行の

表記法を正しく身につけることが、中学生にとってそれほどたやすくないことを物語っていると思われる。ノートの検査については、その回数はわからないが、一応どこでも行なわれているとみてよい。

質問Ⅵ 語句の学習指導および辞書指導（あなたの学校の大体の傾向を書いてください）

(1) 教科書に出ている語句の読みや、理解や使用

1. 新出語句、難語句等はノートに書き出させる (95.9 91.8)
2. 別に書き出させない (4.1 8.3)

(2) 教科書に出ている語句の拡充

1. 関連する語句を教える (91.8 84.8)
2. あまり教えない (8.2 15.2)

(3) 国語辞典、漢和辞典等の使用

1. 学校で何かをきめて買わせている (24.7 46.0)
2. 教室に 冊備えてある 28.4冊 28.6冊
3. 生徒が自分で持ってきている (60.3 69.8)
その全員に対する割合 (52.6 53.0ぐらい)
4. 学習指導の途中で使わせる (46.6 48.4)
5. 生徒が自由に使っている (45.2 50.7)
6. 辞書はほとんど使わない (1.4 1.2)
7. 辞書は教室に持ってこさせない (1.4 0.3)

(4) 以上のほか、語句の学習指導について、あなたの学校で特に試みていることがあったら下にお書きください。

語句指導に関して、新出語句をノートに書き出させ、また、教科書に提出されている語句の拡充のために関連語句を教えるという指導法は一般的であるとみてよいだろう。国語辞典、漢和辞典等については、半数に近い学校が何かを指定して買わせている。また、各教室に平均して2人に1冊の割で、備えつけられている。生徒が自分で持ってくる割合が2人に1人強であるから、教室で辞書を使おうとすれば、とにかく全員が1冊ずつ使えるだけの部数はそうことになる。しかし、生徒が実際にどの程度利用しているかはこの結果からだけではわからない。

(4)の語句指導についての特別の試みとしては、短文づくりによる指導が最も多いが、そのほか、さまざまな試みがなされている。おもなものをつぎにあげておく。

短文づくりによって語句の用法を指導する。

きめられた語句を使って短文づくりの競争をさせ、表現力をつけている。

熟語づくりのドリル的指導を行なっている。

反対語、類義語などを同時に覚えるようにしむけている。

極力、辞典の活用をはかっている。

図書室に学級人員分の国語・漢和辞典を用意し、ときどき利用させる。

辞書を使って、クラス全員で一斉に調べさせる。

難解新出語句をプリントして生徒に渡しておき、自分で調べさせる。

家庭学習として宿題にする。

小テスト（5分間テスト）の実施

語句帳を作り、教科書の難語句を抽出ノートさせ、共同学習、質問などで解釈させる。

質問Ⅶ 発音および話すことの学習指導（必要によって、1. 自分の場合 2. ほかの先生の場合 3. 学校としてのどれであるかをお書き加えてください）

(1) 教科書の音読（あなた自身の場合）

1. どんな教材でも必ず音読させている (38.0 44.7)
2. 音読に適した教材は音読させている (57.8 54.4)
3. あまり音読させない (4.2 0.9)

(2) 演 劇

1. 文化祭やクラブ活動で劇をやらせている (65.6 63.1)
2. しない (34.4 36.9)
3. 国語科教材を教室で上演する (60.0 34.5)
4. しない (40.0 65.5)

(3) 国語科学習の場合の生徒の質問・応答等のことばづかい

1. 大いに指導している (31.5 35.9)
2. 気がついた時指導する (68.5 62.6)
3. あまり指導しない (0. 1.5)

(4) 生徒会その他の話し合い・会議

1. 国語科教育の立場で指導している (58.0 52.5)
2. 指導していない (42.0 47.5)

(5) 社会科・理科その他の発表・説明・報告

1. 国語科で協力して指導 (31.4 32.6)
2. 国語科とほとんど関連がない (68.6 67.4)

(6) 学校として特に敬語の指導を

1. している (46.6 52.5)
2. していない (53.4 47.5)

(7) // 方言の指導を 1. している (10.0 33.1) 2. していない (90.0 66.9)

(8) 以上のほか、発音や話すことの学習指導について、あなた自身、ほかの先生、およびあなたの学校で実施していることがあったら、下にお書きください。

(8)では、

マイクを通して放送させることによって、聞き方、話し方の指導を行なっ

ている。

指導以前の問題として、教師自身のことばに対する反省から「教師のことば」という小冊子を作成、全員に配布している。しかし、生徒への指導まで具体化していない。

テープレコーダーを利用して教師自身の反省資料としている。

語尾まではっきり言うことの指導に重点をおいている。

週間の努力事項として、「ことばづかい」「発音」をときどき取り上げている。などがあげられている。

質問Ⅲ 聞くことの学習指導（あなた自身のことをお書きください）

(1) 教室でのふだんの聞きかた

1. 大いに指導している (63.0 49.4) 2. 気がついた時指導する (37.0 49.7) 3. あまり指導しない (0. 0.9)

(2) 教科書の聞くことの教材の取り扱い

1. その時は教科書を読ませるだけ (17.8 21.0)
2. 実際に聞くことを実施して指導している (82.2 79.0)

(3) 特別の聞くことの学習指導

1. している (35.2 32.2) 2. していない (64.8 67.8)
(している場合は、それについて、内容を下にお書きください。)

聞くことの学習指導は、地方よりも東京・横浜のような中心都市のほうが、傾向としてより多く行なっている。たとえば(1)の1では、東京(2区)・横浜の平均が63.0%であるのに対して、他地域の平均は49.4%で、14.0%の開きが見られる。また(3)の特別の指導でも東京・横浜のほうが多くなっている。これは話すことの指導で見られる傾向とは逆の現象である。

質問Ⅳ 作文の学習指導（あなた自身のことをお書きください。もしやっていないければ、以前の学級についてお書きください）

(1) 年に何回ぐらい書かせるか

1. 5.4 6.1回 2. 最近書かせた題目をお書きください。
()

2. 自由題の場合は、生徒たちが主として取り上げている題目を二つぐらいお書きください。

() ()

(2) 書かせたものの共同批正、評価、処理

国語科の時間内でそれをする事が

1. ある (78.1 83.5) 2. ない (21.9 16.5)

(あるとすれば 1回に 40.8 41.2分ぐらいかける)

- (3) いわゆる記述前の指導 1. する (87.3 90.2) 2. 特別にしない (12.7 9.8)
- (4) 10分間作文, 3 センテンス作文等, 作文基礎力の指導
1. たびたびする (9.6 16.4)
 2. 少ししている (65.8 62.5)
 3. していない (24.7 21.1)

おもにどんなことかお書きください。

- (5) 作文の学習指導のための時間(ことしのことよりも, 前年のことでお書きください)
1. 教科書の作文教材の取り扱い(読みと説明)の時間 年間10.9 12.0時間ぐらい
 2. 教科書の発展として作文を書かせる(その処理をふくむ)
時間 年間8.6 9.9時間ぐらい
 3. 教科書に関係なく作文を書かせる(その処理をふくむ)
時間 年間8.5 7.8時間ぐらい
- (6) あなたは夏休みとか正月とかに, 年賀状や手紙を書くことを
1. 奨励している (64.8 55.7)
 2. 別に奨励していない (35.2 44.3)
- (7) あなたは学校の作文の時間が足りないために
1. 家庭で書かせることが多い (41.4 47.4)
 2. 時々ある (47.1 44.7)
 3. あまりない (11.4 7.9)
- (8) 以上のほか, 作文の学習指導について, あなた自身が特に試みていることがあったら, 下にお書きください。

作文を書かせる回数は平均して年に5～6回程度で, これには地域差はほとんどみられない。そして, 課題作文と自由題による作文との比率はほぼ同率である。課題作文で「最近書かせた題目」としては, 生徒の身近かなところに題材を求めた生活的なものが多い。たとえば, 「わたしの家庭生活」「わたしの生いたち」「わたしの希望」「母に望む」など。

自由題のほうも, 傾向としては課題された場合に似ている。「友人について」「兄弟のこと」「わたしの父母」「〇〇の思い出」「将来の進路」「家庭の問題」などが好んで選ばれる題目になっている。これらのほか, 「交通事故」に関するものが都市部などでは割りに多かった。

作文基礎力の指導は, 「たびたびする」「少ししている」を合わせて, 被調査者の約8割が行なっている。記入された項目のうちおもなものをあげるとつぎのとおりである。

教材の文学作品に対する短評

短文づくり

書き出しのことばを与えて文を作らせる

長文を短くする

読点のうちかた

主述の照応

構想メモ

なお、(1)～(7)以外の指導としては、

詩集の発行などによって書く意欲をそだてるように努めている。

読書感想文・紀行文等の執筆に先立って、範文の分析研究をさせる。

学級全員をグループ編成して、グループごとの生活日記を輪番で全員に書かせる。

依頼作文（防火、納税、貯蓄その他）につとめて出品させる。

読解作業の一部として、作文する立ち場で読むように注意させる。

などがあげられている。

質問 X 読むことの学習指導

- (1) 次の手続きの中で、あなた自身がふだん特に気をつけておやりになっていることについて、五つだけ選んで○をおつけください。そのうち一番力を入れていることを◎にしてください。（◎一つと、○四つになる）

	◎	○
1. 教材の文章がすらすら読めるようにする	(8.3 8.0)	(44.4 40.4)
2. 文章の構造がわかるようにする	(2.8 4.5)	(33.3 50.7)
3. 文章やことばづかいを味わって読むようにする	(2.8 2.4)	(36.1 33.8)
4. 主題ないし主旨を読みとらせる	(45.8 38.3)	(47.2 53.1)
5. 文字・語句をしっかりと身につけさせる	(9.7 5.3)	(58.3 49.6)
6. この文章を読んでよかったと思うようにさせる	(0 0)	(8.3 4.8)
7. 読むことを通じて、批判的・主体的な思考を育てる	(4.2 14.2)	(33.3 39.5)
8. もっと読んでみようという気持ちを育てる	(5.6 1.8)	(20.8 21.4)
9. 作品として、情景や心理を考えて読むようにさせる	(0 1.8)	(43.1 57.3)
10. 文章読み取りの技能・能力を身につけさせる	(13.9 19.0)	(52.8 37.7)
11. その文章を文法的にしっかり読み取らせる	(0 0.9)	(8.3 15.1)

- (2) 上に書き出してあるもののほか、あなたがふだん気をつけていらっしゃることを、下にお書きください。

読むことの学習指導では、総体的に4の「主題ないし主旨を読みとらせる」指導に最も力点がおかれている。そのほか、10、5、9、2、7などが目立っている。また、この表からだけではわからないが、1の「教材の文章をすらすら読めるようにする」では、都会地から地方に行くにつれ、ことに方言的傾向

が強くなるにつれて、その指導が重視されるという現象が見られた。

質問XI 読書指導 (1. あなた自身 2. ほかの先生の場合 3. 学校として をお書き加えてください)

- | | | |
|--|--------------------------|----------------------|
| (1) 読書調査 | 1. 実施したことがある (93.0 95.0) | 2. ない (7.0 5.0) |
| (2) 読書発表会 | 1. したことがある (64.8 67.4) | 2. ない (35.2 32.6) |
| (3) 読書ノート | 1. 書かせている (40.0 50.3) | 2. 書かせない (60.0 49.7) |
| (4) 以上のほか、読書指導について、特に試みていることがあったら、下にお書きください。 | | |

読書調査は、その内容や回数についてはわからないが、とにかく90%以上が行なっている〔() 内の数字は1. 2. 3 の計で示してある〕。読書発表会、読書ノートの作成に関しては、実施しているところとそうでないところと約半半である。(4)の、「以上のほか、読書指導について特に試みていること」については、記入のあったものは全体の約4割であった。記入の内容はかなり多方面にわたっているが、比較的多かった項目を列挙すると次のようになる。

良書の選択と図書館を有効に利用することの指導

読書感想文を書かせ、それを学級回覧にする

読書感想文を募集し、優秀作品を学校新聞、校内放送等で発表する

読書感想文コンクールを催し、入選者を表彰している

図書のクラス別借り出し数を1か月ごとにまとめて発表する

生徒会活動などをおして読書指導を行なっている

必読書名〈50冊ぐらい〉をプリントして配布し、なるべく読むように仕向ける

教科書に取られている作者の他の作品を図書館などで読ませる

補習授業を通じて指導している

質問XII 中学校国語科学習指導の問題点

現在の中学校の国語科で、あなた自身これが一番問題だと思っていられることを一つだけお書きください。

ここで問題点として指摘されたもののうち、比較的多いものを5つだけあげる。

読解力の養成

要旨の把握・要約のしかた

国語科軽視の傾向 (国語科に対する生徒の関心が低い)

個人差による指導の困難（特に高学年）

文法指導をどの程度まとめてすべきか

質問XⅢ 中学校国語科学習指導の各領域に対する時間比重

あなたの学校では、一年を通じての各領域の学習指導に費やされる時間の比率は、どのくらいになっていますか。

	読むこと		作文		書写		聞くこと話すこと	
1年	52.1	53.3%	12.4	11.9%	17.2	18.0%	17.5	16.2%
2年	56.8	59.8%	12.6	12.3%	10.8	10.9%	17.8	16.9%
3年	61.2	63.4%	12.4	11.8%	7.9	8.7%	17.0	16.2%

各領域に対する時間比重は、実際がはかりにくいのでこれはかなりまで頭の中のことと思われるが、比重のかけかたで地域差らしいものは見られない。学年差では、傾向として、読むことが学年が進むにつれて重視されている。作文、聞くこと話すことではほとんど増減がなく、書写は学年が進むにつれて減少の傾向を示している。現行学習指導要領では、書写を第1学年で20%程度、第2学年、第3学年は適宜ということになっている。また、聞くこと話すことは各学年10%以上ということになっている。こうした学習指導要領の規定とくらべて合わせて、聞くこと話すことに費される（と現場で思っている）時間が比較的多いことが、目立った現象である。

付 回答者の氏名・所属（おさしつかえなかったら、ご記入ください）

あなたのお名前

教職経験年数 16.2 14.9年

所属学校名

何かの研究団体に属していच्छゃったら、下にお書きください。

1. 一つ以上に属している (16.4 49.6)

2. 所属していない (83.6 50.4)

この数字から、東京・横浜よりも、地方のほうの研究組織が確立しているとも考えられるし、また、東京（2区）と横浜は全数で、B群のほうは選ばれた人の回答であるから、こうした結果になったとも考えられる。なお、この質問紙への回答者の教職経験年数平均からみて、これはだいたいにおいて、その学校の国語科主任あるいは中堅級の回答であると思われる。（與水、根本）

国語文章の横組みのための印刷条件の研究

A. 研究の経過と報告書の刊行

言語効果研究室では、昭和35・36年度に、国語文章の横組み印刷にはどんな字形が最も適しているかをつきとめるために、いろいろと実験・観察を重ねてきた。これは、文章の読みやすさ・わかりやすさを作り出す条件について、さまざまな角度から研究を進めてきた中の一つとして取り上げられたテーマであって、その研究計画と実施要領については『国立国語研究所年報12』『同13』にあらましを述べた。

37年度中に、最終的な資料の整理ができ、一段落ついたので、平体(横長)、正体(真四角)、長体(縦長)の三種の字形の優劣に関する結果をまとめて、39年3月、『横組みの字形に関する研究』(国立国語研究所報告24) — A 5, 195ページとして刊行した。

B. 研究担当者

報告書は、共同で研究を行なった次の3名の所員が、分担して執筆した。

永 野 賢 高 橋 太 郎 渡 辺 友 左

35年度の当初は、当時の室員として林四郎も研究に加わった。また、研究補助員宮地美保子・屋久茂子が作業を助けた。 (永 野)

言語表現における場面の効果の研究

A. 目 的

言語効果研究室で昭和38年度から実施することとした「伝達の機構に関する研究」の一環として計画したものである。

場面によって言語表現がどのような変容を示すかを、伝達という観点から調べる。あわせて、場面の分析および言語表現の分析を行なう。

B. 内 容

- ① 主語の有無と場面
- ② コソアドと場面
- ③ 敬語と場面
- ④ 人を表わす語と場面

C. 方 法

1. まず、言語を調べて、その変容のあり方をとらえ、それをもたらした原因として、場面を分析する。先に場面分析を行わず、言語の方から接近する。
2. 最初、文章を材料として、文脈を場面として調べる。
3. 次に、話しことばの場面にうつる。

D. 担当者および38年度の仕事

担当者 高橋太郎

38年度は、前記④の「主語の有無と場面」の第1段階である文章を材料として調べる段階にはいるための、カードを2万枚作った。

次の6書（いずれも岩波文庫）の全センテンスを、センテンスごとに1枚のカードにした。カードは、文脈を明らかにするため、必要なセンテンスを含む

半ページを1枚とした。

- ・夏目漱石「それから」　・島崎藤村「桜の実の熟する時」
- ・徳田秋声「あらくれ」　・小林多喜二「蟹工船、一九二八・三・一五」
- ・川端康成「雪国」　・太宰治「富嶽百景・走れメロス 他八篇」

(高 橋)

明治時代語の調査研究

A. 本年度調査した事項と担当者

近代語研究室は、ひきつゞき、郵便報知新聞以下の文献による明治初期語彙調査の整理を行なった。その内容は、つぎのとおりである。

1. 文体と語種との関係についての量的な考察
2. 興味ある語の用例記載
3. ルビの調査

1と2は林四郎が担当し、3は進藤咲子が担当した。中曾根仁と長尾紀子が全部の仕事に参加したほか、数名の臨時補助者が作業をたすけた。

このほか、新しい仕事として、明治の言語生活史資料の一つとして、明治初期生まれの人の談話の録音を始め、今年度は東京と京都とで6名の人について録音した。作業は進藤が担当した。

B. 文体と語種との関係についての量的な考察

年報14の69ページ以下に、調査で得られた語を「両性群」以下の6群に分け、各群内での語種別分布を調べたことがしるしてある。ただし、それは、得られた語全部についての結果ではなく、ア行所属の4928語だけについての結果だった。同じ分析を、郵便報知新聞の物価広告欄所属の語を除く全語彙に施した結果を、つぎにする。

まず、6群に分ける前の、硬軟各文体の文献における出

第1表 明治初期語彙調査の文献と文体
(郵便報知の新聞の物価広告欄を除く)

学術論説 関係文献	郵便報知新聞					小新聞	通俗文献		
	a 公布・公 聞	b 社 説	d 外電・外 国	e 投書・雑 文	c 雑 報	読 売 新 聞	東 京 絵 入 新 聞	安 愚 楽 鍋	交 易 問 答
以下 23 種									
硬 文 体 文 献						27		軟 文 体 文 献	
								5	

第2表 硬軟各文体内での出篇幅の5段階別による語の分布状況，そのまた語種別分布状況

取幅 硬幅	5, 4	3	2	1	0	計
27	109	49	54	65	3	280
1	90 17 — 2 38 10 — 1 34 15 — 5 36 15 — 14 1 2 — — 199 59 — 22					
8	82.5 15.6 — 1.8 77.5 20.4 — 2.0 63.0 27.8 — 9.3 65.4 23.1 — 21.5 33.3 66.7 — — 71.0 21.1 — 7.9					
7	115	154	201	408	154	1,032
1	75 37 — 3 77 70 — 7 70 118 — 13 107 226 — 75 19 107 — 28 348 558 — 126					
4	65.2 32.2 — 2.6 50.0 45.5 — 4.6 34.8 58.7 — 6.5 26.2 55.4 — 18.4 12.3 69.5 — 18.2 33.7 54.1 — 12.2					
3	119	202	378	1,250	2,039	3,988
•	78 39 1 1 79 113 1 9 121 237 1 19 225 793 3 229 149 1449 5 436 652 2631 11 694					
2	65.5 32.8 0.8 0.8 39.1 56.0 0.5 4.5 32.0 62.7 0.3 5.0 18.0 63.4 0.2 18.3 7.3 71.1 0.3 21.4 16.3 66.0 0.3 17.3					
1	141	276	645	2,418	15,726	19,206
	105 30 1 5 162 105 2 7 289 318 4 34 550 1473 11 384 1664 10357 170 3535 2770 12283 188 3965					
	74.5 21.3 0.7 3.5 58.7 38.0 0.7 2.5 44.8 49.3 0.6 5.3 22.7 60.9 0.5 15.9 10.6 66.0 1.1 22.5 14.4 63.9 0.9 20.6					
0	176	527	1,761	15,342		17,806
	129 41 — 6 351 136 3 37 1030 488 6 237 5834 5828 64 6163					
	73.3 23.3 — 3.4 66.5 25.8 0.6 7.0 58.5 27.7 0.3 13.5 38.4 38.4 0.4 23.8					
	660	1,208	3,039	19,483	17,922	42,312
計	477 164 2 17 707 434 6 61 1544 1176 11 308 6752 8335 78 4318 1833 11915 175 3999 11313 22024 272 8703					
	72.3 24.8 0.3 2.6 58.5 35.9 0.5 5.1 50.8 38.7 0.4 10.1 34.7 42.8 0.4 22.1 10.4 66.6 0.9 22.3 26.7 52.0 0.6 20.5					

典幅（出典幅については、年報14の64ページ以下に、区画幅とともに説明してある。）による5段階別の相関表から示す。なお、各文体に属する文献名と文献数は、第1表のとおりであった。第2表は、年報14の70ページ、第9表と対応するもので、硬軟各文体内での出典幅の広いものからせまいものへと配列し、相関表にして24（ $5 \times 5 = 25$ で25箇のます目を作り、そこから両方0のひとますを除いたもの）のます目を作り、各ます目の中を、左から和語、漢語、外来語、混種語の4つに区分したものである。上は実数、下はパーセントである。

第2表の太い線で示したように区画しなおして、6群を作る。各群の性格はつぎのとおりである。

両性群	硬軟両文体にまたがつて幅広く出現した語群	1. 003語
硬性群	硬文体に偏し、その中では幅広く出現した語群	3. 919語
軟性群	軟文体に偏し、その中では幅広く出現した語群	3. 526語
中性群	両文体に同じ程度の中位の幅で出現した語群	2. 796語
硬1群	硬文体の1文献だけに出現した語群	15. 726語
軟1群	軟文体の1文献だけに出現した語群	15. 342語

各群の中での語種別分布を第3表に示す。

第3表 6 群 別 に 見 た 語 種 別 分 布

語種別 \ 群別	両 性 群	硬 性 群	軟 性 群	中 性 群	硬 1 群	軟 1 群	計
和 語	541 (53.9)	537 (13.7)	2.066 (58.6)	671 (24.0)	1.664 (10.6)	5.834 (38.0)	11.313 (26.7)
漢 語	419 (41.7)	2.592 (66.1)	1.118 (31.7)	1.710 (61.2)	10.357 (65.8)	5.828 (38.0)	22.024 (52.0)
外 来 語	2 (0.2)	8 (0.2)	16 (0.5)	12 (0.4)	170 (1.1)	64 (0.4)	272 (0.6)
混 種 語	41 (4.1)	782 (19.9)	326 (9.2)	403 (14.4)	3.535 (22.5)	3.616 (23.5)	8.703 (20.5)
計	1.003 (100)	3.919 (100)	3.526 (100)	2.796 (100)	15.726 (100)	15.342 (100)	42.312 (100)

第3表の比率を比較してみる。

和語の多い順に群を並べると、つぎのようになる。

①軟性群	②両性群	③軟1群	④中性群	⑤硬性群	⑥硬1群
58.6	53.9	38.0	24.0	13.7	10.6

年報14で、ア行の語だけについて見たときは、両性群のほうが軟性群よりも、和語の率が高かったが、全体では軟性群のほうが高くなった。しかし、差はわずかである。その他の順序は同じであった。やはり、和語は軟文体の中でよく使われているわけだが、両性群すなわち基本語的な語群の中でも和語の占める比率が50%を越えていることに注目したい。

つぎに、漢語の多い順に群を並べると、つぎのようになる。

①硬性群	②硬1群	③中性群	④両性群	⑤軟1群	⑥軟性群
66.1	65.8	61.2	41.7	38.0	31.7

硬文体の文献に漢語の種類が多いことが、きわめてはっきりしている。そして硬性群において漢語の占める率は、軟性群において和語が占める率よりも高い。つまり、文体と用語との関連は、軟文体に和語臭が強いことよりも、硬文体に漢語臭が強いことのほうが、よりはっきりした傾向だということである。

つぎに、混種語の多い順に群を並べると、つぎのようになる。

①軟1群	②硬1群	③硬性群	④中性群	⑤軟性群	⑥両性群
23.5	22.5	14.9	14.4	9.2	4.1

混種語とは、そのほとんどが漢語サ変動詞である。ここで目につくことは、1位と2位の軟1、硬1両群の差はほんのわずかで、両群は、この面からは同性質と考えられること。すなわち、漢語サ変動詞は硬にしても、軟にしても、1つの文献にしか出ていなかった語群の中に多く存し、両性群のように、使用の幅の広い語群の中には、ごくわずかしかな存在しないということである。

以上、考察したことを、もういちどまとめておく。

1) 漢語の種類は硬文体の文章の中に多く、和語の種類は軟文体の文章の中に多い。そしてその結びつきは、前者、すなわち漢語と硬文体との結びつきのほうが強い。

2) 全体的に漢語は種類が多いが、基本語的な語彙の中では、和語のほうが

数が多い。

3) 漢語サ変動詞は概して使用の幅がせまく、基本語的な語彙の中には、わずかしかが存在しない。

C. 興味ある語の用例記載

B 6 版の「明治初期語彙用例記載カード」を作成し、用例を記載した。その語の使われた意味が十分わかるように、かなりの分量の文脈を書きしるした。その語を含む文（センテンス）ということを一応の規準にしたが、その文だけでは意味がわからない場合には、さらに前後を書きそえた。また文が非常に長く、必らずしも、文全部を必要としない場合は適当に省略した。

「興味ある」というのは、きわめて主観的な判定であり、一定の規準はないが、だいたいの方は、

- 1) ある程度幅広く使われた語（少くとも出典幅 2 以上）であり、
 - 2) 意味・用法に今日とちがいがありそうな語で、
 - 3) 類義語がいくつかあって、その使われかたに、今日と差異出入がある語。
- といったものである。

約 4 万 3 千の全語彙のうち、出典幅 2 以上の語は約 1 万 1 千語である。これらの語は、区画幅と出典幅とにより、幅の広い順に語彙表にしてあるので、この表を見ながら、用例を記載すべき語を選んだ。

D. 記載用例の中から拾った

いくつかのことがら

約 250 語の用例を記載した。その中には、現代語と比較して、量的または質的に使われかたにちがいがあるものがある。また、文献によって現われかたにいちじるしいかたよりのあるものがある。そういった語のうち、まず目についたものをいくつかとりあげて、つぎにする。これは、問題のほんの一端である。

1. 「人民」と「国民」

「人民」は区画幅 5，出典幅 22 で、調査文献の中ではきわめて出現の幅の広

い語である。それに対し、「人民」の類義語である「国民」は、区画幅3，出典幅6で，人民に比べれば，出現の幅はずっとせまい。

現代語の感覚ではこれは逆だ。わたしたちは一般に「国民」は言い慣れているが，「人民」はやや特殊な場合にしか使わない。書きことば研究室の語彙調査はこれを裏づけており，『総合雑誌の用語』前編（国立国語研究所報告12）と『現代雑誌九十種の用語用字』第一分冊（報告21）（以下この二種の報告書をしばしば引用するので，前者を『総合雑誌』，後者を『雑誌九十種』と略記する。）とで両語の使用率と使用率順位を見ると，次のようになっている。

	総合雑誌		雑誌九十種	
	使用率(%)	順位	使用率	順位
国民	1.484	69	.288	434.5
人民	.286	494.5	.034	3670

総合雑誌と雑誌九十種とでは両語の位置にずいぶんずれがあるが，どちらにしても，国民が人民よりずっと上位にあることは同じである。

「国民」と「人民」とは類義語ではあっても同意語ではないから，以上の比較からすぐに「明治初期には人民という語が多く使われたが，現代ではそれに代って国民という語が使われるようになった」と結論することはできないが，意味の違いはどうあれ，両語の使われる度合に，明治初期と現代とでいちじるしい差異があることは言えるだろう。

明治初期の調査文献の中で，両語がどこでどのくらい，サンプルとして拾われたかを示す。

第4表 人民，国民の出典別分布

		人民		国民	
学 術 論	近世事情	2			
	国体新論	3			
	明治文抄				
	続明治文抄	5	1		
	福沢文集	2			
	開化小史	1			
	暗射地図				
	明治開化史	2			
			學術論說文獻		
			消毒新論		
			弥兒經濟	1	
			娼婦論		
			夫婦衛生論	1	
			学士会院	2	
			英議院政治	1	
			a 公布公聞	7	
			郵 b 社 説	85	5

まず學術論說關係文献から拾われた32例がどんな文脈の中で使われているかを見よう。

- (1) 朝廷已ニ政權ヲ収ムレトモ土地人民ヲ有セザレバ名アリテ実ナシ（近世事情）
- (2) 諸侯モ亦宜ク国ノ

説 文 献	民間経済録	3	便 報 知 物 価 広 告	d 外電外国	43	1	大小ニ從フテ其幾分ノ 一ヲ割テ以テ土地人民 ヲ貢スベシ(近世事情) (3) 君主政府此ノ如キ 擅恣ノ政ヲ施テ人民ヲ 圧制スルハ所謂黔首ヲ 愚ニスル者ニシテ到底 人民ノ精神氣力ヲ衰耗
	時事小言	6		e 投書雜文	5	1	
	学士会院 I			c 雜報	35	3	
	文明東漸史	1					
	雜居之準備			読 売 新 聞	1		
	實地演説	2		東京絵入新聞			
	外国交際			安 愚 楽 鍋	1		
	英氏経済	1		交 易 問 答			
	百科商業	1	1				

セシムルカ故ニ国家ノ精神氣力亦随テ衰耗スルニ至ル(国体新論)

- (4) 是君主政府實ニ人民ヲ害スルノミニアラス亦自ヲ害スルナリ(国体新論)
- (5) 此願ニ於テハ、道之決シテ許可セス、各氏ニ於テモ之ヲ請フハ、抑モ人民政府ニ対スル權義ヲ失セリ、實ニ不条理ノコトニ非スヤ、(統明治文抄、松田道之「論滋賀県士族書」)
- (6) 凡我教育薰陶スル所以ノ道ハ、人民各学フ所アリテ、智ヲ開キ材ヲ伸ヘ……幾多ノ成跡アラント期ス、(統明治文抄、高崎五六「輪生徒書」)
- (7) 上ニ専制ノ政府アリテ、下ニ此人民アリ、(統明治文抄、西周「国民氣風論」)
- (8) 忠諫以テ其事ニ任スル時ハ、専制ノ政府ニ在テハ、極メテ都宜ノ宜キ最上ノ人民ノ氣風ト謂フヘシ、(同上)
- (9) 一国ノ全体ヲ整理スルニハ人民ト政府ト兩立シテ、始テ其成功ヲ得可キ者ナレハ(統明治文抄、福沢諭吉「学者ノ職分ヲ論ス」)
- (10) 抑モ一國ノ政府ニモセヨ、又社会ニモセヨ其処置ニ専制ノ行ハルルハ何ゾヤ必ズシモ一人ノ君主又ハ頭取ガ独リ暴威ヲ逞フシテ悉皆他ノ人民ヲ窘ルガ為ニ非ズ(福沢文集)
- (11) 公共ノ金ヲ費シテ廣ク人民ヲ教ルニ当リ(福沢文集)
- (12) 上古ノ時代には政府も至て質素にて都の内も人民極めて少かりしと思はるゝなり(日本開化小史)
- (13) 人民には野見の宿禰当麻の祓速の如きあり官吏には武内の宿禰の如きあり(同上)
- (14) 幕府ヨリ諸藩ヘ領地ノ証トシテ与ヘタル朱印ト称スル者ヲ廢物トシ之ト共ニ土地人民ヲ朝廷ニ奉還セシメンコトヲ謀リ(明治開化史)
- (15) 六万三千余円ハ不正ニ出ルヲ以テ県庁ヲシテ人民ニ償還セシメ(明治開化史)
- (16) 兎ニ角ニ人民一般ノ見ル所ニテ此レナレバ安心ト認ル政体ヲ定メタル上ハ國事ノ大

ナルモノハ之ヲ人民個々ノ私ニ委ルヨリモ政府ノ公ニ握ル方、經濟ノ為ニ便利ナルモノ少ナカラズ譬ヘバ鐵道電信瓦斯水道等ノ如ク人民一般ノ為ニ設ケテ（民間經濟錄）

(17) 主治者モ亦約束ニ由テ人民ニ促ス所アル可シ（時事小言）

(18) 其新陳交代ノ實際ハ兎モ角モ唯其門ヲ開クノミノ一挙ニシテ人民全体ノ所觀ハ所謂我方ヨリ案内シタル客ノ入来ナレバ人情以テ安ク、不平以テ除ク可シ（同上）

(19) 日本ノ政府ハ維新有功ノ元素ヲ以テ立ツモノナリト云フモ人民ノ社会ハ其功業ノ実情ヲ知ルコト深切ナラズ（同上）

(20) 政府ハ此騒乱ヲ驅除センガ為ニ幾万ノ兵ヲ出シテ日ニ幾十万ノ彈藥ヲ放發シ全国人民東走西馳ノ混雜ハ……凡ソ九箇月ニシテ始メテ鎮定シタリ（同上）

(21) 明治十年ハ日本ノ人民ヲ全国臨時ノ大祭礼ヲ催フシテ九箇月ノ間、毎日大火花ヲ打揚ケタルモノト云フ可シ（同上）

(22) 此島ハ小ナリト雖トモ土地温暖ニシテ多ク物ヲ産ス人民自ラ奮起シテ開拓ヲ志スニ當リテ（文明東漸史）

(23) 外国ト事端ヲ生スルノ場合ニ至テハ其人民ガ愛国心ノ熾盛ナルニ因リ却テ種々ノ妨害ヲ國家ニ及ホスニ至ル（實地演説）

(24) 支那ノ如キモ亦然リ既ニ連戦シテ敗ヲ取ルニモ拘ラス其ノ人民ハ仏國ヲシテ自ラ屈シテ和ヲ請フニ至ラシム可シト想像スルモノノ如シ（實地演説）

(25) 蓋シ ^{ムラゲウ} 閩村ノ人民専ラ年々生殖ノ品物ヲ産スルヨリ一部ノ人民ハ専ラ有用ノ器械^{ボウダ}ヲ製スルカタ却テ所産^{シヤグ}多キナリ（英氏經濟論）

(26) 大ニ其効驗ヲ具フルトキノ為替座ノ主務ハ錢票ノ発ナリト古代或國ノ人民焦思セントナリ（百科全書商業編）

(27) 其五年毎、人口表ヲ閱見スルニ人民ニ比シテハ出産増殖ノ割合少数ナルモ耕作及ヒ職業ノ生殖ニ至テハ漸々ニ増進ヲ加ヘタリ（弥兒經濟論）

(28) 羅馬人が殊に初代に際して其略取せる人民に国土權を附與するを惜まざりしは猶ほ歴史に照々たるが如くにして（夫婦衛生論）

(29) 王ハ他人ノ王權ヲ侵犯スルヲ患ヘサルニ非ス英國人民ノ名譽尊重モ亦他邦ノ之ヲ汚辱侵犯センコトヲ患ヘタリ（英議院政治論）

これが、學術論説關係文献のサンプル・ページから拾われた「人民」用例のすべてである。これらの文脈の中で「人民」に伴って現われる語には、おのずから共通性があり、朝廷、諸侯、君主、主治者、政府、官吏、土地、国などの語が

多い。なかんずく政府との対で使われていることが多い。治者たる政府に対して被治者を人民と呼ぶ気持が強く感じられる。

郵便報知新聞の用例は多いのでいちいち引用することはしないが、まず第4表の数のうえで特徴的なのは、社説で人民が非常に多く使われていることである。郵便報知の記事を a から e までに層分けしたうち、各層からサンプルとして取られた語の数は第5表のとおりであった。いちばん多いのは c 層で半分以

第5表 郵便報知新聞の サンプルサイズ			上を占めるのに対し、b層社説は14.2%を占めるに すぎない。ところが「人民」は、郵便報知の中のサ ンプル175語のうち、ほぼ半数の85語が社説の中に ある。
延べ語数	%		
a 9.307	(9.4)		郵便報知社説での「人民」の使われかたは、大体 において次のようなものである。 (1) 余輩ハ常ニ事 ^{子-シヨシ} 国 ^{ガブルメント} ノ甚タ重シテ政府ノ甚タ輕キ ヲ思フカ故ニ念々人民ヲ富マスノ急務タルヲ忘ルルコト 能ハスシテ却テ或ハ政府一時ノ財政ヲ不問ニ附スルコト 無キニアラス其ノ以テ然ル所ノ者ハ財ヲ人民ニ儲フルノ先ニ是可クシテ財ヲ政府ニ儲フル ノ後ニ是可キヲ思ヘハナリ (明11. 1. 10)
b 14.147	(14.2)		
c 52.806	(53.1)		
d 5.732	(5.8)		
e 17.392	(17.5)		
計 99.384	(100)		

『明治初期の新聞の用語』

319ページより

- (2) 故ニ人民参政ハ邦国ニ於テ応有ノ事タリ人民ニ在テ応為ノ事タリ (明11. 4. 6)
- (3) 若シ脅迫ノ手段ヲ以テ政府ハ人民ノ献納ヲ促シ人民ハ忠誠ノ心得ニテ強テ此等ノ財
錢ヲ納メハ内国債ノ功用ハ変シテ有害ノ者トナラン (明11. 5. 4)
- (4) 然レトモ時アリテ政府此等ノ便利ヲ私シ人智ノ増進ヲ妨クルコトアラバ人民ニ在リ
テハ之レヲ禍害ヲ生ムノ母ト見做サ、ルヲ得ズ (明11. 6. 19)
- (5) 若シ夫レ政府人民ノ感情ヲ傷害スルノ所置ヲナシテ人民ノ政府ニ対スル幾ント路人
ノ如ク利害緩急相呼応セサルニ至ラハ国民ノ勢力ハ強大ナルモ政府ノ外邦ニ対スル勢力
ハ衰弱ヲ免レザルナリ (明11. 7. 13)
- (6) 然ラハ則政府ハ何等ノ手段ヲ施シテ信ヲ民ニ得ントスル乎鉄道ヲ設ケテ以テ之ヲ得
ント欲スルカ良シヤ千万里程ノ線路ヲ施テ全国ヲ経緯スルモ汽車ハ全国人民ノ信ヲ載セ
テ政府ニ達センムル能ハサルナリ (明11. 8. 29)

やはり、政府対人民というとらえかたである。そしてその態度は、社説の特性
によるものだろうが、人民の代表者として、人民の権利を犯させぬように政府

に対抗し、政府を監視する立場に立っている。

投書欄における「人民」の現われかたも社説におけると大体同じで、下から上に対抗する姿勢の中にある。

(1) 政府ハ人民ヲ保護スルノ理アリ人民ハ權利ヲ保テ自由ヲ得ルノ理アリ……ナド、恰モ奴隸ノ主人ニ於ケルカ如キ議論ヲ為ス等ノコトアラバ国家人民ハ如何ノ景況ニ至ルト思ヘル乎一國ノ人民ニシテ斯ノ如キコトアラシメハ各人ノ不利不幸ハ勿論博キ社会ノ上ニ於テモ必ス退歩減却ヲ醸シテ或ハ分離法ナク或ハ混乱度ナキニ至リ決シテ之ヲ維持保続スルコト能ハサルニ及フベシ(明11. 2. 5)

(2) 蓋シ政府斯ノ如キ事業ニ恣々着手スルハ素ヨリ人民ノ頑愚造船工作農業ノ何物タルヲ知ラズシテ因循旧ヲ守リ更ニ勇敢進歩スル能ハザルヲ以テ此事業ヲ挙ケ人民方向ノ標針トナランノ厚意ナルヲ以テ欣々然トシテ悦ハサルヲ得ザレトモ奈何セン範圍ノ過大ナルトキハ却テ此結果ヲ生ス世話焼過キテ有カタ迷惑ト云ハシムルニ至ラン(明11. 3. 15)

a層から拾われたサンプルは7例なので、全部を引用する。

(1) 該毒再萌ノ予防精々注意可致其他ノ地方モ予テ管下人民ニ告諭シ(明11. 1. 14内務省録事)

(2) 甲県下ノ人民ニシテ乙県下ニ於テ本律ヲ犯シ捕縛セラレ尋テ甲県へ関涉ノ事有之(明11. 5. 8司法省録事)

(3) 地租金ノ内田方ニ限り当分人民ノ情願ニ任セ(明10. 11. 24公布)

(4) 許可ヲ得ヘキ成規アル製造品ノ外ハ總テ人民ノ自由營業ニ任セ官許ヲ願出ルニ及ハサル儀ト可相心得(明11. 4. 16内務省録事)

(5) 官ヨリ人民ヘ下附ス可キ公金及ヒ人民ヨリ徴収スル処ノ諸税金(明10. 12. 7司法省録事)

(6) 人民ヨリ院省使府県ニ対スル訴訟ハ各上等裁判所ニ於テ受理スル御成規ニ有之候処(明10. 12. 21司法省録事)

(7) 地租改正付本県ノ義ハ一昨明治八年ヨリ新租施行ノ見込ヲ以テ精密調査ヲ遂ケ近傍類地ノ比準ヲ取リ之ヲ人民ヘ指示スルニ(明10. 12. 25司法省録事)

ここでは、政府自身が国民を「人民」と呼んでいる。いかにも、明治の新政府がお上(かみ)の威光をもつて人民に臨んでいる様子が感じられる。

c層から拾われた「人民」は43語で郵便報知全体175語の24.6%に当たる。43語といえば相当な数であるが、24.6%(4分の1弱)は、郵便報知全体の53

.1%を占めるc層としては小さい比率である。c層は府下雑報、諸県報知が大部分で、記者が自分の目や耳でとらえた世の雑事を報道する欄である。今日のニュースとは違つて、どこそこの村で男と女がくっついたとか離れたとかいうような下らない事件を、講談、落語の調子で興味本意にこまごまと語るものが多い。したがつて、政府の人民のということは、あまり話題にならない。それにしては43例は多いように感じられるが、そのうち15例は横浜瓦斯局訴訟事件という裁判事件の傍聴記事に出て来るものである。これは、横浜である企業家が敷いた瓦斯燈施設が公営に移管されたのだが、その形式がはっきりしないために権利が当局にあるか人民にあるかで争いを生じた事件である。原告が横浜市民某で、被告が神奈川県のある区長某である。こういう原告と被告のやりとりだから、まさに政府对人民になるのは当然だ。この事件とそれを扱った記事の大きさについては、『明治初期の新聞の用語』307ページ以下に示してある。

横浜瓦斯訴訟事件のような特別な法廷傍聴記事を除いて、一般に世間の雑事に関する記事の中には、「人民」が現われる回数は多くない。その使われかたは次のようなぐあいである。

(1) 鹿児島全く鎮静去月六日鎮台兵も帰營し山崎鎮兵場に於て凱陣式終り城内にて御酒肴を賜ひ且同日よりロ々哨兵も解き辻々東京巡査の出張所も引払人民も安堵通行も自由になり従て氣候も宜く自ら心気清爽各自業を勉めるの勢に赴く(明10. 11. 10諸県報知、熊本近況)

(2) 警察官吏の勉強は実に旅客の目を刮はしむる程にて石炭酸の予防を胸壁と頼み三尺の官棒を降魔の利剣と信し毒煙惡氣の中を奔走し毫も恐怕の気色なく十分に人民保護に力を尽されしは天晴れ愛國の中情外に露れ彼の鹿児島の一隅に日本第一の兇賊を斃したる三軍の死士にもヲサへ劣ぬ様に思はれたり(明10. 11. 16府下雑報、長崎県の景況として、コレラ流行の様を叙す。)

(3) 真宗浄土宗にハ西南戦争の□養と号け屢説をなすに聴衆群集なし又土地の人民は何故□か西郷さまは未だ死せずと喋々唱々へ居るよし且つ人民の前県令を慕ふ事父母の如しと(明10. 12. 29諸県報知石見浜田景況 □の部分は、紙面破損のため不明)

(4) 豊前国西南隅にある英彦山(彦山とも云)には去月十六日より雪降り初めしが丈余も積りて近旁添田駅は廿一日迄往来の止りたる程なれば人民は例の通り当年も豊作ならんと喜び居るよし(明11. 1. 4 府下雑報)

(5) 県庁にて取調へられしに崇神天皇の田子関東都督上野毛の主豊城入彦命の陵と云ふ事にて土地の人民悦ぶこと大方ならず県庁よりも此趣を其筋へ上申に相成りしとぞ
(明11. 4. 20府下雜報)

こういう調子で、同じ人民でも、社説や投書の場合とは、ずいぶん語感が違っている。ここでは、政府・官吏と人民とが対立的にとらえられず、長屋の大家と店子のようなぐあい、上下ではあるが上下和合、君民一体的雰囲気ととらえられている。卑屈な感じさえするくらいである。

同じ新聞の同じ紙面の中で、官庁の録事欄では、官から見下した意味で「人民」が使われ、社説では「人民」の語によって政府への対抗意識をむき出しにし、雑報欄では卑屈なまでに官民融和の姿で人民を描いている。今日の新聞では考えられないことで、歴史として見ると、おもしろい。

国民ということばは、明治初期の人々には、人民よりもずっとなじみがうすかったらしく、今回のサンプルには12例しか拾われていない。全部を示す。

(1) 一国ノ全体ヲ整理スルニハ、人民ト政府ト兩立シテ、始テ其成功ヲ得可キ者ナレハ、我輩ハ国民タルノ分限ヲ尽シ、政府ハ政府タルノ分限ヲ尽シ、互ニ相助ケ以テ分限獨立ヲ維持セサル可ラス (続明治文抄、福沢諭吉「学者の職分ヲ論ス」)

(2) 良善ニシテ偏頗ナキ法律ヲ立テ国民ノ為メ身体 資産^{シンダイ}ノ権ヲ保護スルハ政府ノ職ナリ (英氏経済論第三編)

(3) 若シ此器具ヲ使用スルモノモ精神ヲシテ国民ノ実益ヲ主トスルノ意志ヲ棄擲スルカ將タ之ヲ棄擲セズ偏ニ国民ノ実益ヲ拡張スルニ急ナルモ若シ其着眼ヲ誤リ各人ヲ抑圧シテ社会ノ平和ヲ来タシ以テ公益ヲ保全シタリトスルガ如キアラハ此等懼ルベキ勢威アル器具ハ人民ノ意志毫モ伸ルヲ得ズ (郵便報知 明11. 6. 19社説 器具とは文明の器具のこと。)

(4) 政府若シ国民ノ満足ヲ来タスコト能ハズンハ是レ政府自ラ国民ノ反射タル道ヲ失シタルニヨレリ (郵便報知 明11. 7. 13 社説)

(5) 是レ余輩ガ昨年ノ禍亂ハ實ニ慘毒ヲ國民ニ加フルノ甚シキヲ信スルモ猶本年意外ノ兇變ニヨリテ知者ノ心意ヲ煩ハスノ大且深ニ如カザルヲ知ル所以ナリ (郵便報知 明11. 8. 1 社説 昨年ノ禍亂は西南戦役のこと、本年意外の兇變とは大久保利通暗殺事件、高知の大獄事件等をさす。)

(6) 嘗テ國民ニ貸サ、ルガ如キ寛大ノ約ヲ為サ、ルヲ得ス (郵便報知 明11. 10. 12 社

説)

(7) 資本欠乏セル国ニ於テ大ニ外財ヲ入レ専ヲ外人ヲ財主トナサバ国民ハ奴隸トナルノ外ナキナリ (郵便報知 明11. 10. 24社説)

(8) 去る五月中大統領と下議員との間政治の趣意合せざるより解散したるは大なる不筋にて元来国民の情に任せ国民の裁判に托し少しも瞬味なる挙動なく国民の素意に随て行政の権理を定るは民権政治の当然なり (郵便報知 明11. 2. 14仏国近況)

(9) 其条凡ソ四アリ今又之ヲ約言スレバ蓋第一条ハ国民ノ心情ヲ離乖シテ国ノ分崩離析ヲ来シ第二条ハ…… (郵便報知 明11. 3. 22 投書 富の不平均が人々に与える影響を四箇条あげる。)

(10) 是レ我國民ノ外人ニ対セシ挙動ノ大概ナリ (郵便報知 明11. 8. 15 投書)

(11) 是レ今日我國民ノ熱心以テ国ニ酬ユルノ精神ヲ虧ク所以ナリ (同上)

(12) 夫れ維新の前に在つては各藩其治を異にすと雖も又各能く力を邦産蕃殖の途に尽し特り政刑の大権を握つて其國民を撫御するのみにあらず (郵便報知 明11. 1. 18 府下雑報)

国民と人民と意味のうえでどう違うか、これらの用例を見ても、必ずしもはっきりしない。(1)から(5)までの例などでは、国民を人民と置きかえても文意は変わらないように思える。しかし、文字どおり、国民は「国の民」であるから、人民に比べて国家意識が強いことはいえそうだ。(7)(9)(10)(11)などには特にそれが感じられる。

「人民」は、郵便報知の中で、a層(官庁録事)、b層(社説)、c層(雑報)の間に、使われる度合や使いかたにやや違いがあった。「国民」のほうは、全体に語数が少ないから、層別に数のかたよりを問題にすることはできないが、社説の5例に対して雑報に1例しかないことは、雑報記事の中で、国民が人民よりさらに一段と縁がうすいことを物語っている。そして、その1例では、語の意味やニュアンスを他と比較するにも耐えないが、まあ格別の差異はなさそうだ。

国民には人民のような語感のひろがりがなく、いつも文字通りの意味で使われるので融通がきかず、それだけ一般の用語としてはなじみがうすかったというわけだろうか。

なお「人民」がこれほど広く使われたことについては、今日の「県民」「都民」「市民」「区民」「町民」「村民」などの語と対比して考えてみることも大切だろう。

2 政府に対する敬語表現

「人民」との対でいちばんよく使われたことばが、「政府」であり、政府と人民との関係のとらえかたに、郵便報知新聞の雑報欄とそれ以外の文献との間で違いがあることを見た。これと密接に関連することとして、今度は「政府」に注目し、政府のことを叙述する際に用語のうえでどんな扱いがなされているかを見よう。「扱い」といっても、その解釈をひろげると見かたがむずかしくなるので、敬語乃至敬語的表現の有無に限定して観察する。

以下にサンプルとして拾われた「政府」の全用例を示すが、数が多いので、これまでのような長い文脈はしるさず、政府の行為や政府に対する他者の行為を叙述した語がわかる範囲内で、ごく短い文脈をしるすにとどめる。敬語と認められる語には2本の下線を引き、敬語ではないが、なにがしか政府を持ち上げた態度が表われている語には1本の下線を引いて示す。

明治文抄（8例）

- (1) 政府理財ノ道ニ於テハ（陸奥「田租改正ノ建議」）
- (2) 政府ノ措置何如ニ在リテ（井上、渋沢「財務上ノ儀ニ付建言」）
- (3) 政府ノ少シク回顧スル所アラント望ム耳（同上）
- (4) 此名代ヲ名ケテ政府ト云フ（福沢「親族故友ニ諭示スルノ書」）
- (5) 政府ノ下ニ居テ政事ノ恩沢ヲ蒙ル者ハ（同上）
- (6) 政府ノ法正シケレバ（同上）
- (7) 我政府新聞紙発行ノ許可アリテヨリ（津田「新聞紙論」）
- (8) 上政府ノ布告ヨリシテ（同上）

続明治文抄（10例）

- (9) 抑モ人民政府ニ対スル権義ヲ失セリ（松田「論滋賀県士族書」）
- (10) 上ニ専制ノ政府アリテ、下ニ此人民アリ（西「国民気風論」）

<注> この「上」「下」は位置関係を相対的にとらえただけで、論者が政府を上にあるものと認定しているのではない。(5)(8)とは態度が違う。

- (11) 専制ノ政府ニ在テハ（同上）

- (12) 人間ノ事務ニハ、政府ノ関ル可カラザルモ亦多シ（福沢「学者ノ職分ヲ論ス」）
- (13) 人民ト政府ト両立シテ始テ其成功ヲ得可キ者ナレハ（同上）
- (14) 政府ハ政府タルノ分限ヲ尽シ（同上）
- (15) 政府ノ忌諱ニ触ルル事ハ、絶テ載セザルノミナラス（同上）
- (16) 妄ニ政府ヲ尊崇スルコト鬼神ノ如ク（同上）
- (17) 政府ニ建白スル者ハ、概皆世ノ洋学者流ニテ（同上）

福沢文集（5例）

- (18) 一国ノ政府ニモセヨ、又社会ニモセヨ
- (19) 衆庶ノ力ヲ集メテ之ヲ政府ト為シ
- (20) 此公務ヲ取扱フ人ヲ名ケテ政府ノ官員又ハ会社ノ役員ト云ヒ
- (21) 此勢力ヲ以テ行フ所ノ事ヲ名ケテ政府ノ事務又ハ会社ノ事務ト云フ
- (22) 此勢力ヲ名ケテ政府ノ御威光又ハ会社ノ力ト云ヒ

日本開化小史（4例）

- (23) 其時分の政府と云へるのは大なる庄屋の如きものにて
- (24) 政府ノ御入費多からんには
 - <注> これは上古の政府のことをいつている。
- (25) 上古の時代には政府も至て質素にて
- (26) 是れ実に……地方武夫をして敢て政府に向ひ兵を取るものなからしめし所以なり

明治開化史（2例）

- (27) 諸藩ノ封土ヲ政府ニ収ムルノ密議アリシニ
- (28) 時ニ政府ハ元老院ノ章程ヲ改メ

民間経済録（2例）

- (29) 政府如何ナレバ之ニ国事ノ大ナルモノヲ任ズ可キヤ
- (30) 国事ノ大ナルモノハ之ヲ人民個々ノ私ニ委ルヨリモ政府ノ公ニ握ル方、経済ノ為ニ
 時便利ナルモノ少ナカラズ

事小言（13例）

- (31) 吾輩ハ政府ヲ立テテ法律ヲ設ケ……ヲ説ク者ナリ
- (32) 既ニ政府ヲ立テテ主治者ノ地位ト被治者ノ地位ト直接ニ相対スルトキハ
- (33) 政府ニ求ル所アル可シ
- (34) ……仕組ニシテ政府ニテ云ヘバ即チ政体ノ部ナリ

- 35) 政府ニスレバ即チ政務ニ属スル部分ナリ
- 36) 今ノ政府ノ政務上ニ在ル歟政体上ニ在ル歟
- 37) 今政府ノ要地ニ立ツ者ハ時トシテ威福ヲ行フ事モアラン
- 38) 日本ノ政府ハ維新有功ノ元素ヲ以テ立ツモノナリト云フモ
- 39) 政府ノ当局者ニ於テモ必ス然ラン
- 40) 況ヤ当局ノ政府ニ於テヲヤ
- 41) 政府ハ此騒乱ヲ驅除センガ為ニ幾万ノ兵ヲ出シテ
- 42) 定リタル利子ノ金ヲ渡スガ故ニ政府ノ利ナリ
- 43) 爾後万一モ凶年ナラバ政府ノ利ナリ

外国交際公法（4例）

- 44) 公使ハ其在留国ノ政府ヘ委任状ヲ渡シ、彼政府ヨリ公使ノ礼ヲ以テ接待セラレシ後ニ非レハ
- 45) 公使ノ威權ト政府ノ殊典ハ、其在留国ニ而已限ルベキ事ニテ
- 46) 其政府ノ望ニ任セテ遵守スル時ハ

英氏經濟論（7例）

- 47) コノ法ヤ英国政府ノ屢施行スル所ニシテ
- 48) 政府ハ民ノ努力ヲ勸メ生財ノ数量ヲ増益スルガ為メ力ヲ致ス可キモノニ非ヤト
- 49) 政府固ヨリ大ニ勉ム可キノ事業アリ
- 50) 良善ニシテ偏頗ナキ法律ヲ立テ国民ノ為メ身体資産ノ權ヲ保護スルハ政府ノ職ナリ
- 51) 教育ノ道ヲ立テ知見ヲ^{ヒロムル}拡充スルハ政府ノ職ナリ
- 52) 文壇ヲ眷顧シテ文学ノ上達宣揚ヲ助クルハ政府ノ職ナリ
- 53) 費用多クシテ一人ノ力ニ及ヒ難キ知見ヲ広ムルモ政府ノ職ナリ

百科全書商業編（2例）

- 54) 此会社ノ政府ニ緊要ナルヲ以テ其免状ヲ改令スルコト数回
- 55) 政府此為替座ヨリ負債スルコト千百零一万五千「ポンド」之ヲ錢票發行局ニ負債スト公告シ

弥兒經濟論（3例）

- 56) 多少ノ有余ハ或ハ政府ノ為メニ収メラレ
- 57) 政府ハ其收入セン所ヲ以テ必シモ勞夫ヲ雇フコトニ費サスト決定スルモノニアラス
- 58) 宜シク佣金ヲ与ヘテ尽ク之ヲ政府ニ収奪スヘシ

英議院政治論（4例）

- (60) 下院ヲシテ政府万般ノ措置ヲ管視セシム
- (61) 政府ノ政策ハ變動極リナキ下院ノ多数代議士ノ意見ニ左右セラレ
- (62) 政府ノ措置ハ道理ト謹厚トニ因テ支配セラレ
- (63) 「スチュアート」朝ノ政府

郵便報知新聞 a 層（1例）

- (64) 政府ノ条例ヲ遵奉シテ発行シタル銀行並諸会社ノ株券等（明11. 5. 8 公布）

郵便報知新聞 b 層（42例）

- (64) 我政府及ヒ人民ニ就テ英人并ニ西洋諸邦ノ一般人民ガ持シタルノ意想ハ（明10. 12. 11）
- (65) 政府保護ヲ勉ムルノ誠意ニ出テタルヲ知ル可キ也（明10. 12. 25）
- (66) 政府固ヨリ之ヲ□ム可キニアラス（明11. 1. 4 □の字不明）
- (67) 若シ幸ニ政府此布令ヲ発スルノ主旨ト其美拳タルヲ害セサルノ証ヲ拳ケテ論者ノ疑ヲ解キ并セテ我輩ニ及ホスアラハ（明11. 2. 6）
- (68) 世人ヲシテ政府改良ノ語ハ幾ント……ト同意ナルノ思アラシムルニ及ヘリ（明11. 12）
- (69) 府県民会ハ唯政府施政ノ壮嚴ヲ添ルニ過キサルナリ（明11. 4. 22）
- (70) 政府果シテ其供給ニ苦シマズ（明11. 6. 3）
- (71) 政府人民ノ感情ヲ傷害スルノ所置ヲナシテ（明11. 7. 13）
- (72) 況ンヤ政府直チニ強迫ノ方ヲ施シタルノ例証ヲ見ザルオヤ（明11. 7. 26）
- (73) 政府税權ヲ復スルニ当リ（明11. 7. 31）
- (74) 政府虐政ヲ施ストキハ（明11. 8. 8）
- (75) 是レ我が政府ノ敢テ此律ヲ設ケザル所以ナリト（明10. 11. 26）
- (76) 吾人ガ之ヲ輿論ニ訴エ敢テ政府ニ向テ冀図セル所ノ金米併納ノ方法ハ（明10. 11. 28）
- (77) 人民既ニ政府ヲ建立シ吏員ヲ置キ（明10. 12. 14）
- (78) 無理不法ノ圧制ヲ加ヘ低價ニテ政府ニ其ノ地面ヲ買上ヘキ權利アラシヤ（明10. 12. 27）
- (79) 我政府カ内地旅行及ヒ内地雜居ニ外人ヲ許サ、ルカ如キハ（明11. 1. 23）
- (80) 我輩ハ政府ノ速カニ之ヲ決行センコトヲ請求スルナリ（明11. 1. 25）

- ⑧① 一般人民ハ此ノ始末ヲ政府カ充分ニ取調ヘ暴人ヲ糺弾センコトヲ主張シテ止マス
(明11. 3. 1)
- ⑧② 幸ニシテ今日ノ政府ハ其権力ヲ妄用スルナシト雖トモ (明11. 3. 2)
- ⑧③ 政府ノ人民ニ於ケルハ恰カモ (明11. 3. 4)
- ⑧④ 人民ハ……政府ノ随意ニ之ヲ指揮スルヲ待チ (同上)
- ⑧⑤ 政府ノ恩典扶助ヲ受ケタル人々ハ (明11. 3. 15)
- ⑧⑥ 其金ヲ政府ニ受クルノ事情 (同上)
- ⑧⑦ 政府ハ……人ニ私スルカ如キ手段ヲ去リ公然日報社ヲ命シテ御用新聞トナン世間ニ
明示セバ (明11. 4. 15)
- ⑧⑧ 政府ハ……場合アルヲ洞察シ……人民ノ肩上一層ノ苛税ヲ担ハシメサルヲ顧慮セ
サル可ラス (明11. 4. 29)
- ⑧⑨ 政府ノ応サニ注意ス可キハ (同上)
- ⑧⑩ 之ヲ借受セン政府ニシテ不急不利ノ事業ニ消費シ五朱ノ利ヲモ収入セルコト能ハス
ンハ (明11. 5. 4)
- ⑧⑪ 余輩ハ政府ニ向テ切ニ此等ノ過擧ナカラシムコトヲ望ム (同上)
- ⑧⑫ 此時ニ在リテハ政府ハ他ニ由ルベキノ途ナシ (明11. 5. 10)
- ⑧⑬ 政府ニ金ヲ貸シテ興産ノ資本ニ充テ (明11. 5. 14)
- ⑧⑭ 政府ノ意匠ハ教育ヲ勸奨スルニアリ (明11. 5. 30)
- ⑧⑮ 人民之ヲ政府ニ上納シ (明11. 6. 8)
- ⑧⑯ 英本国ノ政府モ亦タ……スルノ意ナシ (明11. 6. 10)
- ⑧⑰ 其改革ヲ行フハ徳川政府ヲ維持セント欲スルノ誠意ニ出テタリ (明11. 6. 22)
- ⑧⑱ ……ノ如キハ暫ク政府ノ商売ニ販スルモ妨ケスト雖モ (明11. 7. 17)
- ⑧⑲ 政府ノ商売ニ依頼シ其御蔭ヲ蒙リテ無為ニ此世ヲ過クルノ計全ク成レリトシテ自カ
ラ喜フ人民ハ凡ソ全国人民ノ半ニ過キン (同上)
- (100) 政府ノ首人民ノ頭何ソ強弱ヲ較フルヲ待タン (同上)
- (101) 政府ニ於テ勸業ヲ務ムルト商売ニ従事スルトハ遂ニ并行スルヲ得ス (同上)
- (102) 別ニ一種ノ政府ト謂フヘキノミ (明11. 8. 31)
- 103) 政府ココニ注意セサル可ラス (明11. 9. 9)
- (104) 其更換ハ之ヲ政府ニ求ムルヲ得ス (明11. 9. 26)
- (105) 無智ノ小民ニ至ルマテ威ナ政府ヲ怨望セサルハナク (明11. 10. 31)

郵便報知新聞 d 層 (13例)

- (106) 従来墨国政府革命の姿に際して該国人民の其現設政府を認可するの状あり (明11. 1. 23 米国新報)
- (107) カアナルボン氏ハ其ノ辭職ヲ乞ヒ政府之ヲ聽許セリ (明11. 1. 29 外国新報 上の線は原文の右側傍線)
- (108) 其政府の下に於て如何なる施政の 成跡^{しせい せいせき}を顕せしかは (明11. 2. 21 仏国近況)
- (109) 大統領に於ては……に決意し以て政府を組立てり (明11. 3. 2 仏国近況)
- (110) 文意疑問の廉政府より答弁あるへくと (明11. 3. 4 仏国近況)
- (111) 政府ガ敢然洋銀ヲ擯斥セント企テタル政策モ幾ント画餅ニ帰シ (明11. 6. 3)
- (112) 埃国政府ヨリ之ヲ監護スルカ或ハ (明11. 6. 18 外国新報)
- (113) 結果ハ政府ヨリ下院ニ通知スルコトナシ (明11. 6. 26 外国新報)
- (114) 国会ニ於テハ常ニ政府ヲ補助セサル可ラスト明言シ (明11. 8. 8 外国新報)
- (115) 「ビルオブライツ」に政府の悖りたること無き証拠は (明11. 8. 15 欧州近況)
- (116) 政府ハ大ニ尽カシテ窮民ヲ蘇生セシメント種々ノ方法ヲ用ヒタリ (明11. 9. 12 外国新報)
- (117) 是其法政府学官□……十数人ヲ簡派シ (明11. 10. 2 支那近況 □は文字不明)
- (118) オーストラリアン諸政府ノ一ニ附スルカヲ決ス可シ (明11. 10. 17 外国新報)

郵便報知新聞 e層 (23例)

- (191) 政府自ラ代テ姑ク之ニ任セサルヲ得ス (明10. 11. 6 投書)
- (120) 斯ル政府ヲ匡正シ (同上)
- (121) 政府ノ田園ヲ売却スルニ (明10. 11. 13 論説)
- (122) 尽トク政府ニ委託セス (明10. 11. 28 楽善会慈恵方法)
- (123) 政府ヲシテ私利ヲ営ムノ人物ヨリ成立チシモノタラシメハ (明10. 12. 12 投書)
- (124) 可ソ所有権ノ政府ニアルト否トニ関センヤ (同上)
- (125) ……ヲ其株主ヨリ政府ニ年貢トシテ上納シ (明10. 12. 28 論説)
- (126) 新政府ノ創業者タル前大統領「チエール」公ハ (明10. 12. 29 論説)
- (127) 輿論ノ減価ヲ政府ニ期望スルハ (同上)
- (128) 其身ガ旧政府ノ下ニ立チシ時ニ (明11. 2. 7 投書)
- (129) 方今ノ政府ニ対シ人民私有ノ権ヲ奉還シタルコトアリヤ (明11. 2. 8 投書)
- (130) 政府斯ノ如キ事業ニ恋々着手スルハ (明11. 3. 15 投書)

- (131) ……の如きは政府の立入るへからさるものなり(明11. 4. 24 地方官会議傍聴記事)
- (132) 財産の事は政府の法律にては申さぬ所なり(同上)
- (133) 府県は政府立置く一大行政区画なり(明11. 5. 2 地方官会議傍聴記事)
- (134) 我カ政府ノ発令セル代言規則ハ(明11. 5. 10 投書)
- (135) 子弟ヲシテ普通教育ヲ受ケシメザル父兄ハ政府之ヲ罰スルモ敢テ不可ナルコト莫ルベシト雖モ(明11. 5. 16 投書)
- (136) 第五条ノ如キハ只政府カ人民ヲ勸助スルノミニシテ(明11. 5. 21 投書)
- (137) 頭官ガ上位ヲ占ムルノ政府ヲシテ遂ニ人民ノ愛顧ヲ失ハ使ルノ勢ナリ(明11. 6. 6 投書)
- (138) 遂ニ政府ヲシテ広衆ノ愛顧ヲ失却セシムルニ至ルハ(同上)
- (139) 教学ハ……必シモ政府ノ責任ニ非ザレバ也(明11. 6. 11 投書)
- (140) 其後政府米國との条約詔を頒たれしかは(明11. 7. 5 小言)
- (141) 公使の任を蒙りし者各自政府の命令違犯に近き詔に随ひ申候(明11. 8. 10 小言)

郵便報知新聞c層(9例)

- (142) 六分通りは旧知事へお渡しになり残り四分は政府へ引揚らると西海新聞に掲ぐ(明10. 11. 24 府下雑報)
- (143) 我政府は兎角旧例を固執し日本婦人の来住を忌み遊歩期程を狭からしめんとするは(明11. 1. 17 府下雑報)
- (144) 現今の日本政府と雖も無政府に優るや判然たり(明11. 3. 18 府下雑報)
- (145) 右は政府への御奉公と存し升が(明11. 5. 7 府下雑報)
- (146) 此頃政府にて支那へ輸出の米貳万石程と買ひ入らるゝ迎(明11. 5. 22 府下雑報)
- (147) 米國陸軍少將アプトン氏ハ一千八百七十五年政府の命令を奉して……を巡視し(明11. 6. 20 府下雑報)
- (148) 政府にても官費を以て右記念碑を近々の内お取立に相成る由(明11. 10. 3 府下雑報)
- (149) 人民が出金して為し遂げたる事業は何等の際に臨むも政府之れを自由に処置する能はざる(明11. 10. 22 府下雑報)
- (150) 借金のかたに公債証書を押さゆるは政府の固く禁ぜらるゝに(明11. 10. 30 大阪新報)

読売新聞(1例)

- (151) ^{とるこ}土耳其の^{せいふ}政府へ^{せま}迫って^{べるりん}伯林の^{ていやく}締約を^{じつかう}実行させやうといふ^{ぜるまん}日耳曼の^だ申し出し
は(明11. 9. 20)

東京絵入新聞(1例)

- (152) 英国政府と交際ある諸国へ補助をこふにより(明11. 9. 21)

安愚楽鍋(2例)

- (153) ^{じりう}自立の^{けん}権だの^{じゆう}自由の理だのと一ト口^{くち}に^と解いて^{むがく}きか^{もんもうやばん}せると^と無学文盲野蕃の徒はそ
んならその^ミ身の^{かつて}勝手なことを^{ぜんあく}さしても^{せいふ}善惡とも^{せいふ}政府で^{おとがめ}おとがめはないものだとおもふ
やからがあるからこまるヨ(三編下)

- (154) ^{せいふ}こんなものを^{しゆつて}政府え出訴におよんだら町用が^{をちど}まりまでの^{をちど}落度になる(三編下)

以上のうち、はっきり敬語と認定したものは次の11例である。

1. 政府ノ御威光(24)一福沢文集
2. 政府ノ御入費(24)一日本開化小史
3. (政府ノ)御蔭ヲ蒙リ(99)一郵便報知社説
4. ～ノ權ヲ奉還シタルコト(129)一郵便報知投書
5. 条約訳を頒たれしかは(140)一郵便報知投書
6. お渡しになり……政府へ引揚らる(142)一郵便報知府下雑報
7. 政府への御奉公(145)一郵便報知府下雑報
8. 政府にて……買ひ入らるゝ(146)一郵便報知府下雑報
9. 政府にても……お取立に相成る(148)一郵便報知府下雑報
10. 政府の固く禁ぜらるゝに(150)一郵便報知大阪新報
11. 政府で^{せいふ}おとがめはない(153)一安愚楽鍋

また、敬語に準ずる持ち上げた表現と認めたものは、次の6例である。

1. 政府ノ下ニ居テ政事の恩沢ヲ蒙ル(5)一明治文抄、井上・渋沢
2. 上政府ノ布告ヨリシテ(8)一明治文抄、津田
3. 政府ノ恩典扶助(89)一郵便報知社説
4. 政府ニ上納シ(95)一郵便報知社説
5. 政府ニ年貢トシテ上納シ1(25)一郵便報知論説
6. 政府ノ命令を奉して(147)一郵便報知府下雑報

以上、サンプルに現われた「政府」の用例数と、敬語表現及び敬語に準ずる表現の数とを一括して表にすると、つぎのようになる。

第6表 政府の用例数と政府に対する
敬語表現の数

文 献	用例数	敬語数	準敬語数
明 治 文 抄	8		2
続 明 治 文 抄	10		
福 沢 文 集	5	1	
日本開化小史	4	1	
明 治 開 化 史	2		
民 間 経 済 録	2		
時 事 小 言	13		
外 国 交 際 法	4		
英 氏 経 済 論	7		
百科全書商業編	2		
弥 児 経 済 論	3		
英議院政治論	4		
(學術論説文獻小計)	(64)	(2)	(2)
郵 便 報 知 a	1		
〃 b	42	1	2
〃 d	13		
〃 e	23	2	1
〃 c	9	5	1
(郵便報知小計)	(88)	(8)	(4)
読 売 新 聞	1		
東 京 絵 入 新 聞	1		
安 愚 楽 鍋	2	1	
(以 上 小 計)	(4)	(1)	(0)

郵便報知新聞の中に問題が端的にあらわれているので、そこに注目する。「政府」は、「人民」よりもいっそう、庶民の生活には縁の遠いことばだったと見えて、社説から42例拾われた「政府」が、雑報欄では9例しか拾われていない。そしてその9例のうち5例までが、政府に対する敬語を含んでおり、ほかに1例、準敬語表現がある。社説のほうは、42例のうち敬語を伴うものは1例だけであり、準敬語表現2例を含めても3例に過ぎない。

「人民」をめぐる、記者の態度が社説の場合と雑報の場合とで違っていた。それと同じ現象が、政府に対して敬語を使う使わないに現われているとみることができよう。

読売新聞と東京絵入新聞に「政府」の用例がきわめて少ないのには、これら小新聞では「政府」に「おかみ」のルビがついているため、「おかみ」という語として採集されたからである。そして「政府」^{おかみ}に対しては、もちろん敬語が用いられている。これらについては、進藤^{*}が別の所で書いている。

3. 「文明」と「文化」, 「開化」と「開明」

文明開化ということばは、明治初期の世相や時代思潮を代表するもののよう

※ 進藤咲子「新聞の文章」〈講座現代語『現代語の成立』〈明治書院〉所収論文。その197ページに当該記述がある。)

に思われる一方、第二次大戦後の日本が戦争を放棄した国家として再出発したとき、「平和国家」または「文化国家」ということばが生まれ、「文化」は戦後日本の象徴ともいえるくらいになった。

「文明」「文化」およびこれらと密接に関連する「開化」「開明」の4語をとり、その使われた度合を現代と比較してみる。

『総合雑誌』と『雑誌九十種』とにおける使用率および順位をしるし、明治初期調査における区画幅・出典幅と比べてみよう。

	明治 初期		『総合雑誌』		『雑誌九十種』	
	区画幅	出典幅	使用率(%)	順位	使用率(%)	順位
文明	5	10	.091	1536.5	.023	5158.5
文化	2	3	.417	321.5	.253	501.5
開化	4	7	—	—	—	—
開明	3	6	—	—	—	—

「開化」「開明」は『総合雑誌』にも『雑誌九十種』にも、語彙表には出ていない。両語とも1語ずつ採集されてはいるが、開明は「開明楼」という固有名詞としてであり、普通名詞はない。

以上4語の明治初期調査における用例のすべてを次にしるす。

【文明】

時事小言(1例)

(1) 所謂聖人ナラバ或ハ此私心ヲ抱カザル者モアル可シト雖トモ迨モ文明ノ今日ニ在テ聖人ノ出ルヲ望ム可ラズ(第二編、政權之事)

文明東漸史(1例)

(2) 文明東漸史内篇(標題)

文明実施演説(1例)

(3)……内に実力を余して心思を百方に馳せ苟くも判断の明を失ふ勿れ即ち是れ我同学文明の大主義として忘る可らざるものなり(福沢)

英氏経済論

(4) 火器起テ以来蛮夷ノ兵ト文明ノ兵ト其強弱大ニ懸隔シ共ニ衡ヲ争フ能ハズ(天然力ノ使用ヲ論ス)

郵便報知新聞(11例)

(5) 正理ニ由リテ公論ヲ発言シ謹シテ文明ノ罪人トナルコトナカランコトヲ希望スル也

(明11. 7. 15 社説)

- (6) 嗚呼此等ノ暴徒ハ管ニ国ノ罪人ノミナラズ又文明ノ罪人ナリ (明11. 9. 25 社説)
- (7) 今巴里府中ニテ公売ノ有様ナルモ實地経験上ノコトニテ失張文明ノ一部ト申スヘキカ (明11. 8. 5 仏国近況)
- (8) 元來政府タルモノハ株式法制ヲ採用シテ國家一巴ニ商工ノ二道ヲ実行スルガ若キハ素ヨリ文明ノ美制ト云フベカラズ (明10. 12. 29 論説)
- (9) 今四海文明五洲和親内外親疎ノ差有ル無ク互ニ往來通商シテ以テ所謂ル四海皆兄弟タルノ情況ヲ厚フス (明11. 3. 27 投書)
- (10) 夫レ歐米各國ガ今日ノ如キ文明ノ隆盛ヲ致センハ其由テ來ル所固ヨリ一朝一夕ノ事ニ非ズ (明11. 5. 22 投書)
- (11) 蓋シ我ガ國今日ノ文明ハ只歐米各國ノ現況ヲ移センノミニシテ其根源ノ如キハ則チ未タ曾テ輸入セザルナリ (同上)
- (12) 若シ之ガ鍊磨ヲ得ルトキハ則猶王良造父ガ騏驎ニ鞭テ熟路ヲ馳スルガ如ク國家ノ文明ハ駸々乎トシテ日ニ進歩セン (明11. 6. 21 投書)
- (13) 近年邦人が衆力ヲ團結セサレバ事業ヲ成ス能ハサルノ理ヲ悟リ事ニ会社従フ者陸続止マズ是レ實ニ文明進歩ノ徵候ニシテ吾人ノ尤モ悦ブ所ナレトモ (明11. 9. 4 投書)
- (14) 文化開明ノ聖代ニ遭ヘシ豁潤僻陋ノ地ニ至ル迄普ク學校ヲ設ケ有ラサルナキヲ以テ蒙昧頑陋ノ蠹民ト雖モ文明ノ疆域ニ進入スルコト雲霧ヲ披ヒテ白日ヲ見ルカ如キ景況アリ (明11. 3. 14 諸県報知)
- (15) 豊後國は依然旧習に安じ文明の美は師範學校と勸業場の粉壁^{ふんぺき}に在る如く (明11. 8. 1 諸県報知)

読売新聞 (1例)

- (16) 流石に文明開化公明正大の御代は格別なもので (明11. 7. 24)

安愚楽鍋 (3例)

- (17) ……と。文明開化開店の。告条めかして演述になん (初編)
- (18) 文明開化のざんぎりあたま。王政復古乃惣髮頭。因循姑息の半髮額。

(二編上)

- (19) 追こ我國も文明開化と号ってひらけてき申したから (初編)

【文化】

国体新論

- (1) 英米二國ノ如キハ文化各國ニ冠タル者ニシテ隨テ憲法モ良正ナルカ故ニ自由權ヲ許

スコトモ亦甚々大ナリ（第六章，人民自由ノ権利及ヒ自由ノ精神）

明治文抄

(2)是洵ニ人ノ智見ヲ弘闡シ，文化開明ノ裨益ヲ為スコト浅少ナラズ（津田新聞紙論）

郵便報知新聞

(3) 人ノ智力ヲ開達シ文化開明ノ菓ヲ結ヒ以テ社会ノ幸福ヲ増スモ亦タ是レ競争頓頓ノ刺衝ニ因テ然ルノミ（明10.12.25 投書）

【開 化】

日本開化小史（1例）

(1) 我国開化ノ斯く進歩せる際に於て徳川政府の為めに不利なる一元素の発達し来るものあり

明治開化史（2例）

(2) 李 試ニ亜細亞洲開化ノ度ヲ歐洲ニ比スレハ如何

(3) 森 今公正ノ論者ヲシテ亞細亞ノ現状ヲ判断センメバ頗ル開化ノ度ニ達シタリト云ハン（(2)(3)は李鴻章と森有礼との問答）

英氏經濟論（1例）

(4) 蓋シ善徳ト節儉ト権ヲ犯ササルノ心ト此三ツノモノ備ハルトキハ縦ヒ其国養ハザルモ自カラ財貨ノ藪沢トナリ開化ノ道亦與ルナリ

百科全書商業編（1例）

(5) 之ガ為メ游遠蒙昧ノ地ニ要用ナル物体人体ノ美麗ノ具及ヒ隆盛ナル開化ノ論說文学伎芸ノ誘導ヲ拡充シ比類ナキ当今ノ形勢ニ至レリ

郵便報知新聞（4例）

(6) 事業ノ大ナルヲ以外形開化ヲ好ム貴位ノ心胆ニ媚ヒ上威ヲ借り圧制ヲ助ケテ市民ニ脅迫スルハ自家ノタメ万戸幸福ノ一部ヲ滅殺スルモノト云フベシ（明11.2.8 投書）

(7) 我が国ノ文明ハ無根ノ文明ナリ我国ノ開化ハ無源ノ開化ナリ（明11.5.22 投書）

(8) 古昔英島ハ羅馬ノ文明ニ化セラレ今ノ印度ハ英国ノ酷虐ニ苦ム希臘ノ開化ハ埃及ヲ交テヨリ進ミメキシコノ衰微ハ白人ニ接シテヨリ生ズ（明11.5.31 投書）

読売新聞（1例）

(9) 「文明」の(16)に同じ。

安愚楽鍋（10例）

- (10) }
 (11) } 「文明」の(17)(18)(19)に同じ。
 (12) }

- (13) 此 ^{ぎゅうにく}牛肉 ^{もの}チフ物 ^{かうみきは}は高味極まるのミならず ^{かいくわ}開化 ^{じやう}滋養 ^{しょくれう}の食料 ^ででござるテ (初編)
- (14) 方今 ^{ホウコン}開化 ^{ウイグハヨウヤ}捎 ^{スス}ク進 ^{シセイ}ミ市井 ^{サイミン}ノ細民 ^{イヘド}ト雖 ^{ギウトウ}モ牛痘 ^{ニク}牛肉 ^ヨノ世 ^{コウ}ニ功 ^ジアルヲ知 ^ルルモノカ
- (15) ^{シタガ}ラ ^{ホデ}随 ^{マツタ}ツテ医 ^{オクジ}治 ^セヲ全 ^{フン}フン億 ^{ジユ}児 ^{ゾン}百 ^ソ歳 ^ンノ寿 ^ンヲ存 ^ンシ (三編上)
- (16) どくにもならねど可もなく不可もなき ^{かいくわ}開化 ^{ふよう}不用 ^ニの人物 (三編上)
- (17) ^{かいくわ}開化 ^よとやらの世 ^{なか}の中 ^{じやア}じやア ^{にんげん}にんげんは ^{もちろん}もちろん ^{とりけ}とりけ ^{もの}もの ^{でも}でも ^{すべ}すべて ^{せう}せう ^{ある}ある ^{もの}もの
- (18) ^{ごほうこう}はそれへ御奉公 ^{せんせい}せに ^ヤヤ ^{なら}なら ^ねね ^とと ^{ある}ある ^{先生}先生 ^がが ^{おつ}おつ ^しし ^やや ^{つた}つた ^のの ^をを (三編上)
- (19) ^{けへくハ}ハテ人 ^{じんぶつ}は ^{大きな}大きな ^{こと}ことを ^のの ^ぞぞ ^まま ^ねね ^へへ ^{けり}けり ^ヤヤ ^アア ^{開化}開化 ^のの ^{人物}人物 ^{じやア}じやア ^ねね ^へへ ^ヨヨ (三編上)
- (18) ^{なに}ハテサ ^何何 ^{にな}にな ^らら ^子子 ^とと ^もも ^おお ^ほほ ^へへ ^ささ ^せせ ^てて ^をを ^きき ^ヤヤ ^{商人}商人 ^はは ^{商人}商人 ^{工人}工人 ^はは ^{工人}工人 ^{だけ}だけ ^{の開}開 ^化化 ^だだ ^はは ^子子 (三編下)
- (19) つれとた人うしなべのひやざけでうぬひとり ^{かい}化 ^のの人物 ^{とい}とい ^ふふ ^つつ ^らら ^をを ^しし ^てて ^つつ ^れれ ^のの ^{もの}もの ^はは ^{ほん}ほん ^のの ^どど ^{だい}だい ^{その}その ^じじ ^つつ ^はは ^{あり}あり ^にに ^ゐゐ ^るる ^きき ^{やく}やく ^にに ^おお ^のの ^れれ ^がが ^はは ^くく ^がが ^くく ^をを ^ふふ ^いい ^ちち ^やや ^うう ^すす ^るる ^{なり}なり (三編下)

【開 明】

明治文抄 (2例)

- (1) 是素ヨリ理ノ然ラザルヲ得ザルニ出テ、其用亦必ズ欠ク可ラザル者ナリト雖トモ、
 霽朗開明ナルハ其常ナルカ如シ (西「愛敵論」)
- (2) 是洵ニ人ノ智見ヲ弘闡シ、文化開明ノ裨益ヲ為スコト浅少ナラス (津田「新聞紙論」)

続明治文抄 (1例)

- (3) 浮華空譚ハ従前ノ学徒モ尚指彈シテ容サマル所、況ンヤ開明ノ今日ニ於テヲヤ (高
 崎「論生徒書」)

明治開化史 (4例)

- (4) 是ニ於テカ挙措当ヲ失ハスシテ国家以テ開明ノ真治ヲ致スヲ得ン其レ開明ノ言タル
 其称ハ一ナリト雖モ推シテ其帰スル所ヲ論スレハ判然岐ツテ二ツト為サ、ルヲ得ス開明
 ノ政理上ヲ主トスルハ形ヲ以テスルモノニシテ開明ノ民力上ヲ重ンスルハ実ヲ以テスル
 モノナリ (第五章 経済)

郵便報知新聞 (18例)

- (5) 試ニ英仏二国ガ暗濁ノ時世ヲ出テ、漸ク文明ノ曙光ヲ逐ヒ終ニ今日ノ開明ニ達シタル
 有様ヲ見ヨ (明11. 2. 2 社説)

- (6) 夫レ斯クノ如ク上ヨリ下ヲ制スルノ法律已ニ備ハリテ而リ下ヨリ上ヲ打格スルノ律法ヲ欠キ開明ノ器具ヲ備エテ而シテ暴制ヲナスコトアラハ (明11. 3. 12 社説)
- (7) 西字新聞ニ於テ「日本ノ開化」ナル標題ヲ掲ケ来リテ基督教ノ効能ヲ書キ立テ日本ノ開明ハ新入ノ宗教ニ源セルヲ帰シ (明11. 3. 19 社説)
- (8) 開明ノ進度 (明11. 5. 29 社説の標題)
- (9) 是ニ由テ之ヲ觀レハ開明ノ氣運ハ薩土二藩ニ遅クシテ加賀尾張等ノ諸藩ニ速カナリシヤ明白ナリ (明11. 5. 29 社説)
- (10) 是ニ於テカ前キノ暗濁ナル者漸ク将ニ一變シテ其ノ足歩ヲ開明ノ地ニ進メントシ (同上)
- (11) 仮令何等ノ情意ニ発スルモ其行挙ノ惡ム可キモ与ニ開明ノ光輝ヲ滅殺スルモノナリ (明11. 6. 7 社説)
- (12) 今若シ蜜習ノ著シキ時代ニ遡ラズシテ開明ノ靈光熾ンナル千八百四十八年ヨリ今日ニ至ル迄凡ソ三十年間……実例ヲ挙ケンニ (明11. 8. 3 社説)
- (13) 已ニ此石ノ開明ト進歩ヲ同フスルノ理由ヲ知ラハ (明10. 12. 18 投書)
- (14) 他ノ雜稅ハ甚些細ノモノナレハ旧幕府時代ニ於テ概ネ之レヲ取立テサリキ然ルニ近來諸般開明ニ及ニ因リ誠ニ瑣々タルモノタリトモ其幾分か稅納セサルハナシ (明11. 2. 6 投書)
- (15) ……の者の願書は 俚語 を其儘に書記したるものにて当時の民俗と漸次方今に至れる開明とを見るに足れり (明11. 3. 12 小言)
- (16) 吾輩ハ故ラニ秃筆ヲ振ヒ意見ヲ陳シ或人ノ說ヲ駁シ旧封建ノ余習ヲ絶滅シ共ニ俱ニ開明ノ域ニ進登セントスルナリ (明11. 5. 8 投書「士民優劣論」)
- (17) 蓋シ海陸ノ運輸タルヤ邦国開明ノ先導者ニシテ實ニ至要ノ元素ナリト云フベシ (明11. 5. 11 投書「北海道産物産輸出論」)
- (18) 其便利ト效用トヲ知ルハ即チ開明ニ進ムノ階梯ニシテ (明11. 7. 26 投書「西洋品ノ内地ニ行ハルル原由ヲ論ス」)
- (19) 現今と雖も日既に没して此道路を通行するもの一人もなしと嗚呼開明の今日亦斯の如き咄々怪事なるかな (明10. 12. 11 諸県報知)
- (20) 四海波靜カニシテ熙々ノ璃ヲ呈シ衆庶夢穩カニシテ昇平ノ年ヲ迎ヘ駭々然將サニ開明ノ域ニ進マントス (明11. 1. 14 府下雜報)
- (21) 景範熟ル考ふるに抑人智の開明に従ひ警察の道も亦改良ならざる可らず (明11. 1. 26 諸県報知)

② 追々開明に進む風潮に誘はれ水飲百姓までか少し宛民権の有ることを知るに従ひ
(明11.10.31 府下雜報)

以上の諸例から「文明」「文化」「開化」「開明」4語の意味の違いを明らかにすることはむずかしいので、文例を列記したにとどまるが、「開明」という語には、意味内容として用言的な働きが感じられる。「開明す」という動詞は一つも見えないけれども、⑤の「漸次方今に至れる開明」や②の「人智の開明に従ひ」のような用法は、いわゆる無活用動詞に近いものと思われる。到達した状態を静止的にさすのではなく、文化が進歩していく動きを「開明」といっているようである。

4 「余輩」「我輩」「吾人」「我々」「我等」

「人民」も「政府」も、郵便報知新聞の社説に多く現われる語であったが、同じ方向の片寄りがいっそうはなはだしいものに「余輩」「我輩」の2語がある。「吾人」も、全体の数は少ないが、傾向としては同じである。

また、これら3語の類義語として、現代語の感覚ですぐ思い当たるのは「われわれ」や「われら」なので、それらの現われかたを、「余輩」以下3語と比較してみたい。「わたしたち」という語は、調査文献のサンプルの中には、1語も現われなかった。

以上五つの語の分布状況を一括して表示する。

第7表 余輩、我輩、吾人、我々、我等、の分布

	近国抄統福開暗明民時学文雜突外英百消弥娼夫学院					a b d e c 物	読絵安易
余輩	3	レ				56 10 2	
我輩	1	4		レ	1	33 1 14 5	3
吾人				1	1	10 1 2	
我々		レ	1			2 1 7	レ 2
我等	1	2				4	

<注> レじるしは「主観法」と呼ばれる方法で補充採集したもの。

「余輩」「我輩」は、郵便報知新聞のb層すなわち社説に集中しており、e層すなわち投書欄にもかなりの数が見出される。投書も内容は論説や主張であるから、文章の性格としては、b層とe層をいっしょにして議論文と考えてよ

い。これらの数量的傾向から、「余輩」「我輩」が議論文にほとんど不可欠のことばであること、「吾人」は、不可欠というほど積極的に使われたわけではないが、議論文以外では、あまり用のないことばであったことがわかる。

これら3語の使われた文脈は、どれもよく似たものであるから、ここでは多くの例を引用する必要を認めない。議論文の代表としては郵便報知新聞の社説から各1例ずつを引用するにとどめ、用例の少ないc層のものだけ、全部示すことにする。

郵便報知新聞社説からの各1例

【余輩】 若シ此巷説ヲンテ果シテ信拠スルニ足ル者タラシメハ余輩ハ警鐘警柝ヲ響鳴シテ拳国人民ヲ喚起シ大ニ其ノ注意思考ヲ促サル可ラス（明10.11.24「日本ノ一大事」）

【我輩】 鹿児島県方今ノ形勢頗ル千六百年代財産転移ノ状ニ類スル者アリ是レ我輩カ平民社会ニ向テ士族ノ压制ヲ脱シ土地所有ノ幸福ヲ得且ツ教法ノ自由ヲ得ルヲ賀スル所以ナリ（明11.9.16「西南戦争ノ影響」）

【吾人】 然レトモ是決シテ怪ムニ足ラス吾人能ク照魔鏡ヲ執リテ望マハ滔々タル天下唯賄賂賦苞苴郷アルヲ見シ（明11.2.4「苞苴論」）

郵便報知新聞c層からの例全部

【余輩】 (1) 彼ノ都人ノ常ニ喋々スル両国ノ烟火ノ如キモ之ニ比スレハ兒戯ニ異ナラス玉屋鍵屋亦顔色ナシ蓋シ火術ニ慣レサル余輩ノ目ヲ以テ評スレハ此二発ヲ以テ当夜ノ第一等ニ位セシメサルヲ得ス（明10.11.30 府下雑報「烟火目録之序」）

(2) 稀ニ西洋形ニ類似スル商船ナキニ非ザレトモ其製作正シク造船ノ学問ニ基キシモノト云ヒ難クシテ余輩ニ於テモ遺憾少シトセズ（明11.1.10 府下雑報 わが国の造船工業の現状を批評した文）

【我輩】 (1) 未タ数星霜ヲ経シテ忽焉トシテ館舎ヲ捐ソ我輩ノ望ヲ将来ニ属セン者漠然トシテ適スル所ヲ知ラス（10.11.13 府下雑報 朗読された祭文の文章）

(2) 此ノ法固ヨリ人命ヲ孤注ト為スニ係ル業ナレハ我輩コレヲ願ハス只我輩此ニハ常ニ汚穢物中終始病芽ノ混交スルアル所以ヲ説テ該水ノ害否ヲ明解スルノミ（明10.12.21

「東京府下用水試験説」）

(3) 醍醐寺永統の資本金を浪費する等の件に付、旁以て我輩職務上に於て捨置き難きゆえ府庁へ具状せしなり（明11.7.26 西京新報）

(4) 又も一昨三日何か三ヶ条認めし一書を捧げ新聞記者などに迂濶な論説のみを掲

げ共に語るに足る者なし我輩の捧げし書面の如き事々 着々 なれば必ず御採用になる
筈なりとて強て預け置き立ち去りしと（明11. 8. 6 府下雜報）

【吾人】（1） 今度新たに文壇に旗幟を建てし東京真事新聞の隆盛に殆んど吾人の目を驚
かす斗りなるが（明11. 6. 17 府下雜報）

（2） 況や其国費の足らざるを補ふにあらずして殊に起業の長策を以て吾人の為めに将来
の福利を希図せらるゝ者に於ては（明11. 6. 28 府下雜報）

郵便報知新聞の雜報欄といつても、必ずしも市井俗事の話ばかりではなく、記
者の評論文もある。そういうものは、文体も俗文体でなく、社説と同様に漢文
直訳体である。余輩以下3語は、やはりそういう文の中に見出された。これら
の語が議論用の語であることには変りがないといわなければならぬ。

では、「我々」や「我等」はどうだろう。

まず、数の上で目立つことは、全体として例数が少ないが、その中では、郵
便報知新聞のc層に片寄っていることだ。両語の郵便報知における用例を引用
しよう。

【我々】（1） 將タ我令君ガ我々人民ノ利害ニ就テ開陳スルアルハ應サニ此會議ニアル可
シ（明11. 2. 28 社説）

（2） 実ニ我々ノ意見モ之ニ同シキノミ（明11. 3. 22 社説）

（3） 商社に於て今より弥物品を給せされは我々も砂糖を拒みて出さすと云張りたるに付
（明11. 2. 22 隅薩巡島記）

（4） 官兵の打 扮 はイザ知らず我々が味方の画余り立派過ぎたるは実地の模様を知らぬ
故ならん（明10. 12. 29 府下雜報）

（5） 此程十五銀行で株主連へ一応の照会もなく支配人の思付許りて掛り役を殖したと
か何とかを不公平とし無沙汰に我々が取り物を 減却 する訳だと一昨十二日に気力のあ
る若手か岩倉公へ出掛られしとか出掛られるとか申す評判がありました（明11. 1. 15
府下雜報）

（6） 我々とて港に着かは金錢の貯 なくして一日片時も止むべからず（明11. 3. 8
府下雜報）

（7） 常に衆人に語りて云ふ我々 誤 て国憲に触たるも朝廷至仁なるを以て幸ひに身首
所を異にせず（明11. 3. 30 府下雜報）

（8） 海賊は何れも段平閃めかし中にも魁と覚しきが真先に立 蹴 りヤイ舟人ども我々こ
はたか

そは西郷党の余類にて万人塗炭の若しみを救はん為に（明11. 9. 14 諸県報知）

(9) 於此我々か最も喜ぶは此尤文の士を得て彼の事を託したる渋沢、益田、岩崎、笠間、四氏其外幾多の施財主も嚆満足に有られべく（明11. 9. 21 府下雜報）

(10) 鼻薬りとてかわれし金を其儘に返すも魯な仕方なり我々さへに口走らずは諸方の丸く治ることと旨く呑み込み帰りが（明11. 9. 26 府下雜報）

【我等】 (1) 我等は野津少将が家従なるが売家の間取り雜作等一見致し度旨を請たるに（明11. 3. 22 府下雜報）

(2) 何卒周旋をと頼みたれば左らは加入金五円と我等が東京迄出頭の路費十八円を出すべしと（明11. 5. 13 諸県報知）

(3) 先年より我等親子が永き間牢屋にありての糾明も村の者の打寄りて我れをば嫌ひ厄病神と同様に其筋のお役場へ送りつけたるによつてのこと（明11. 9. 13 府下雜報）

(4) 手に段平を閃かし抑々我等は近衛砲兵にて広島県の者なるが（明11. 10. 19 府下雜報）

雜報欄の文章は、一般にそれからそれとつながっていくものが多く、短かく切って文脈を示すのがむずかしい。以上の引用では前後の状況を知るのに不十分ではあるが、ともあれ「我々」や「我等」が「余輩」などと違って、議論のために用いられず、ことがらを叙述するために用いられていることは、わかるであろう。だが、社説の「我々」2例は、やはり社説だけあって、議論の主体を示しているから、「我々」も余輩や我輩と同様に使われることがなかったわけではない。また、議論が叙事かということのほか、語感として、「我々」「我等」が余輩以下の漢語よりも、ずっと下世話に砕けた感じであることは言うまでもない。

5. 「景況」と「状態」

『明治初期の新聞の用語』288ページ以下に、硬軟各文体のどちらかに特徴的な語について、考察が施してある。その中に「有様」「状」「様子」3語の比較があり（296ペ）、「有様」「状」を硬文体に特徴的とし、「様子」を軟文体に特徴的としてある。

いまここでは、類義語の範囲をもうすこしひろげ、かつ、明治初期文献内での硬軟両文体の比較からそとに出て、明治初期と現代とを比較してみよう。

郵便報告新聞には、かなりしばしば「景況」という語が現われる。「和歌山県下の景況」（明11. 3. 20 諸県報告）、「……は左ながら祭礼の景況にて」（明11. 6. 1 西坂京報）、「西陣織物会所の景況」（明11. 8. 21 西京新報）、「今日ノ景況ヨリシテ後日ノ成跡ヲ推測スレハ」（明11. 8. 12 社説）のような使われかたである。調査した紙面の中からは、30例のサンプルが拾われ、うち1例には、つぎのとおり「ありさま」のルビがついている。

- (1) 各島旱魃にて作物及び草木迄も既に枯れ果^かつへき^は 景況^{ありさま}なりしに（明11. 6. 28 府下雑報）

郵便報知新聞以外の文献からは、3例拾われており、うち1例には、つぎのとおり「サマ」のルビがついている。

- (2) 我邦内ニテ此税アルガ為メ弊害ノ及フ所尚ホ前文所序ノ景況^{サマ}ニ止マラス（英氏経済論）

また、郵便報知新聞の30例の中には、つぎのように「形況」と書かれたものが4例含まれている。

- (3) 物品ト通貨トノ釣合ハ依然トシテ旧来ノ形況ニ異ナラザル可シ（明11. 10. 30 社説）
(4) 諸子ハ却テ燈台本暗クシテ自カラ其行為カ何等ノ形況ヲ生セン乎恐ラクハ未タ其真影ヲ捕捉シ能フマジ（明11. 1. 24 投書）
(5) 誠ニ商業ノ形況ヲ言ヘハ商法会議所アリテ四方ノ商況ヲ探知シ商法学校アリテ其生徒ヲ養成シ（明11. 9. 7 投書）
(6) 書記官の上京に際し該場に臨んで本業の形況^{たんもん}を探問し（明11. 4. 11 府下雑報）

「景況」と「形況」は別語と見るべきかもしれないが、意味には格別の違いはなさそうである。しいていえば、「景況」がやや「形勢」に近く、比較的大づかみにいうのに対して、「形況」の(4)例などは、もうすこし限定された「かたち」をさしているようだが、取り立てていうほどのことではない。同語としておく。

「景況」を「有様」の類義語とし、ほかに、「景状」「状況」「状態」「状」「様」「様子」「ザマ」とともに、各文献における出現状況を見わたし、それと、現代語（『総合雑誌』と『雑誌九十種』）における使用率・順位とを比較してみる。

第8表 景況以下各語の出典別分布

	近国抄続福開暗明民時学文雑実外英百消弥娼夫学院					a b d e c 物	読絵安易
景況	1			1		3 2 2 6 17	
景状				1		1	
状況			レ			1	
状態		1		1		1	
状		レ		1		2 8 3 2 3	
様						3 2	
有様	1	2 5			2	20 5 4 15	
様子				1	1	1 1 3 8	
ザマ							レ 1

		『総合雑誌』		『雑誌九十種』	
		使用率(%)	順位	使用率(%)	順位
景	況	—	—	—	—
景	状	—	—	—	—
状	況	.078	1750	.075	1799.5
状	態	.221	649	.228	567
	状	.048	2722	.023	5158.5
	様	.417	321.5	.701	158
有	様	.061	2211	.055	2419
様	子	.122	1170	.132	1020
ザ	マ	—	—	—	—

現代語で「様」が群を抜いて使用度が高いが、これは、敬称の「様」である。有様の意味の「様」は『雑誌九十種』で6語採集されているだけなので、報告書の語彙表にはのっていない。このほか使用度が高いのは「状態」と「様子」である。「様子」は明治初期調査でも多いほうだが、郵便報知新聞のc層に集中している。「状態」は、学術論説関係の文献に3例あるが、郵便報知新聞には1例しかない。「景況」「景状」（「形状」を含む）「ザマ」は現代語の2報告書には、現われていない（「景況」「景状」「形状」ともに用例1語もなく、「ザマ」は5例採集されている。）

これらの語を通じていえることは、明治初期にはかなり多く用いられた「景況」が、現代ではほぼ消滅し、明治初期には少なかった「状態」が現代では非

常に多く使われていることである。

6 「上等」「中等」「下等」

ものを上中下と三階級に区分する場合、今日は、「上等」「中等」「下等」とは、ほとんどいわない。「上等」は、はっきり区分していうよりも、一般に優秀であること、結構な状態をさしているのがふつうである。「中等」は、「中等程度」「中等学校」などとはいうが、「上等」との対ではなくて「高等」との対になっている。「下等」ですぐ思い浮かぶのは「下等動物」ぐらいで、人間のことを「下等」と呼べば、非常に卑しめた意味になるので、滅多に使わない。明治初期調査の文献の中では、「上等」「中等」「下等」はつぎのように拾われた。(括弧内は語数、レは主観法による採集)

上等 郵b(1) 郵a(2) 郵e(1) 郵c(3) 読レ

中等 学士会(1) 郵cレ 読レ

下等 実地演説レ 学士会(1) 郵d(1) 郵c(2)

用例によって使われかたを示す。

【上等】 明治初期でも、

(1) 鮭ハ米國産ヨリ上等ナレトモ只油ノ悪シキト水分ノ多キトテ十分ノ佳味ヲ失ヘリ

(明11. 9. 14 仏國博覧会場略報)

(2) 鼈甲「サボン」ト日本ニテ唱フル薄クシテ透明ナル種類ハ格別ニ多カラスコレハ上等ノ品ニハ非サル由 (明11. 10. 10 同上)

(3) 当春より試ミに製したるは在来の半紙よりも丁度倍の大きさあり品も上等なるが価は二千枚に付三円四十銭位なれば追々注文する者多きゆゑ (明11. 6. 25 諸県報知)

などは、現代と同じく一般的な優秀さを表わしているが、つぎの諸例では、階級的に限定された意味で使われている。

(4) 我国今日富有ノ割合ヲ以テセハ地租十円以上ヲ納ルモノハ之ヲ上等ノ身元ナリト云ハザルヲ得ズ (明11. 5. 1 社説)

(5) 此衛生所生徒は優等第三期生一人第四期生四人第一期生上等六人あり (明11. 9. 7 御巡幸日誌)

(6) 又常食は唐芋からいも (即ち薩摩芋) にて米を食とするは極上等の者に限る (明10. 12.

82 府下雜報)

(7) 各国に比すれば日本の出品物は売捌け宜し然れども他国の品物に比較しては上等の位地に至り難く最も能く捌けるは漆器と陶器の粗品にて(明11. 7. 17 府下雜報 「仏国博覧会々場の景況」)

【中等】 拾われた3例は、つぎのとおりである。

(1) 午後一時ヨリ三時マテノ間ニ行フ早時ノ大餐ハ多ク中等及下等ノ社会ニ於テ通用スル所ナリ(学生会院雑誌)

(2) 中等以下の社会にては只々去年に比すれば今年痛く劣りしなどゝ咳くもの多し(郵便報知新聞 明10. 12. 29 府下雜報)

(3) 客に無理やりに飲食を強ふるのが中等以下の風で(読売新聞明 12. 5. 20)

(1)(2)では「中等の社会」と使われ、(3)も意味のうえから同様の用法と思える。

【下等】 採集された5例は、つぎのとおりである。

(1) 今相撲の番附の下等に位し身体矮小虚弱なる者を見て此男が稽古を怠らざれば大関の位に達す可しと云ふも(文明実地演説、福沢)

(2) 中等及下等ノ社会(「中等」の(1)と同じ)

(3) 該船ハ長サ三百四十六尺、広四十三尺噸数四千百有餘上等百三十名下等客數千人ヲ載スベシ(郵便報知新聞、明11. 2. 5 伊国紀行)

(4)海面の眺望は佳なれとも妓種は下等に属す(郵便報知新聞 明11. 4. 27 諸県報知)

(5) 御巡幸に付供奉官員賄表中に中等判任の次ぎ下士官及び下等外の次ぎへ兵卒を加へ同等中の騎兵下士卒削除せらるゝ旨を夫々お達しになりしよし(郵便報知新聞 明11. 8. 20 府下雜報)

5例いづれも、はっきりと階級的意味で使われている。

7. 「到底」

「到底」ということばは、今日は「到底できそうもない」というように、打ち消しのことばに先行する陳述副詞と考えられ、その用法にはずれたものは、誤用とされるだろう。しかし、明治初期の文献によると、この語の用法は必ずしもそのようではない。拾われた数は15例であったが、これを、否定語に先行したものと、そうでないものとに分けて示す。

【否定語に先行した例】 (10例とも郵便報知新聞 否定語に下線を引いた。)

(1) 去リトテ其儘取仕舞置候テハ到底該件落着ノ場ニ不到ニ付百万説諭致来候得共(明

11. 1.16 司法省録事)

- (2) 官資ニ因テ存立スル事業ナルカ故ニ到底共潰レノ災難ニ遭ハザルヲ得ズ (明10. 11. 7 社説)
- (3) 他ノ政策ニ至テハ各相背馳スル者ナレハ到底其ノ全勝ヲ得ルコトハ至難ナルヘシ。(明11. 1. 21 社説)
- (4) 然ラスンハ則日本ノ商業ハ到底日本人ノ手ニ落ルノ時ナカラントス (明11. 8. 10 社説)
- (5) 到底上等士族ハ保守進取両ナカラン難ク (明11. 9. 20 社説)
- (6) 到底紙幣ハ増加シテ幾億万ニ至ルトモ国ノ窮乏ハ依然タル窮乏ニシテ此ガ為メ一厘一毛ノ富ヲ増サ、リシノ理ヲ醒覚スル日アル可シ (明11. 10. 19 社説)
- (7) 土力ヲ尽クシ物産ヲ増殖スルハ我邦ノ経済家カ從來主張スル所ノ一大要領ナリト雖モ到底製造ノ術進歩ヲ為シ貿易ノ道疏通シテ之カ聯合ヲナスニ非サルヨリハ農業一途ノ興廃ヲ得ヘカラサルノ道理ヲ解セサルノ錯見ニ出タルノミ (明11. 5. 21 投書 この部分は朝野新聞からの引用)
- (8) 到底永続スベキ事ニ非ルナリ (明11. 7. 9 論説)
- (9) 妓楼割席店ハ到底不景氣の冠辭を蒙らざるを得ず (明11. 8. 22 諸県報知)
- (10) 到底決定シ難キコトナレバ弥益疑團ハ小山茂ノ一身ニ集ルコトナリ (明11. 9. 19 府下雜報)

【否定語を伴わない例】 (5 例, (11)以外はすべて郵便報知新聞)

- (11) 君主政府此ノ如キ擅恣ノ政ヲ施テ人民ヲ压制スルハ所謂黔首ヲ愚ニスル者ニテ到底人民ノ精神氣力ヲ衰耗セシムルカ故ニ国家ノ精神氣力亦隨テ衰耗スルニ至ル (国体新論)
- (12) 其意ノ在ル所ヲ尋レハ唯我レハ白色綠眼ノ人種ナリ我智識ハ東方黃色ノ人種ニ優レリト謂フカ如キニ過キズ到底鬼面ヲ被リテ小兒ヲ恐嚇スルノ手段耳 (明11. 7. 15社説)
- (13) 蓋シ日本ハ農業国ニアラスシテ到底銀行国トナル可キカ (明11. 2. 6 投書)
- (14) 鹿児島私学校党ノ勢盛ニシテ到底国ノ為メ妨害ヲ為スヘシト見込ム処ヨリ同志期セスシテ相会シ (明11. 1. 14 府下雜報)
- (15) 到底本訴は区戸長の取扱ひ不条理に出てたれば一万三千五百円を取戻す旨趣にして高島へ旧約せし書類を只今一見したし (明11. 2. 18 府下雜報)

例(3)の「到底……至難ナルヘシ」のようなのは、「至難」が否定的意味の語だ

から、否定語に先行する例のほうへ入れたが、意味上の否定と、打ち消しの態度とは、性質の違うものであり、読み流した際のかかり受けの感じも、他の例とは多少違っている。例(6)の「到底」は「増サヽリシ」と呼応するものとしてここに入れたが、この解釈には疑問がある。あるいは、「依然タル窮乏ニシテ」と呼応するのかもしれない。そうだとすれば、否定語に先行しないことになる。いずれにしても、呼応があいまいである。(7)も同様で、「農業一途、興廢ヲ得ヘカラサル」と呼応するものと解したが、明確ではない。

⑩以下の5例が否定語と関係がないことは、疑いの余地がない。単に「ついに」とか「結局」とかの意味で使われている。

8. 「一般」

次に、「一般」という語は、今日は「特別」「特殊」などとの反対語で、無限定に全体をさす語として使われるが、明治時代には、「区別なし」「同様」「一様」という意味でもよく使われた。漱石の小説などにも、この意味の「一般」はよく出て来る。われわれの調査文献からは、「一般」が全部で63例拾われているが、その中に「同様」の意味で使われているものが6例ある。つぎのとおりである。(1)以外はいずれも郵便報知新聞)

- (1) 農業上ニ於テ大小生殖方ノ得失ハ他ノ職業ニ就テ論スルノ条理ト一般ナラサルノ事情アリ (弥兎経済論初篇)
- (2) 斬罪ノ宣告ヲ受クルニ及ンテ顔色変シテ土ノ如ク恰カモ死者ト一般ナリシハ以テ其余喘ヲ万一ニ僥倖シタルヲ見ルニ足レリ (明11. 9. 25 社説)
- (3) 其ノ衆庶ヲ駕御スルニ恰カモ牧夫ノ羊児ニ於ルカ如ク將帥ノ万率ニ於ルト一般一令ノ下衆民ヲ左右スルカ如キハ (明10. 12. 15 投書)
- (4) 官令シテ帶刀ヲ禁センハ實ニ明治九年三月廿八日ニシテ爾來甲冑ト一般道具屋ニ陳列スル恰モ内国勸業博覧会ノ売品ニ非ル陳列品ノ看ヲナセリ (明10. 12. 22 投書)
- (5) 船賃ヲ引上ルト一般ニシテ到底永続スベキ事ニ非ルナリ (明11. 7. 9 論説)
- (6) 上品中に上中下を区分せしものにて言はば皆上品位の価格にして上の上中下と云ふも一般なり (明11. 4. 1 西京新報)

以上の例で見ると、「同様」の意味で使われるときは、「～と一般なり」のように「と」を伴うのが通例である。

E. ルビ（ふりがな）の調査

今年度は、昨年度に続いて、ルビについての調査を行なった。たとえば「親類」「^{るひ}附合」「^{つきあひ}写真好」のように音や訓を示しているもの、あるいは「^{しん}田舎」「^{あふない}浮雲」「^{てほん}亀鑑」のように熟字訓や宛字のよみを示すものや意味を示すものなどを調査対象として取り上げ、ルビの働きを分析して、ルビとルビのふられた語、および文脈との関係、あるいは、文献の質との関係、書き手や読者層の質との関係など、種々の面から考察を行なった。

一方、ルビを調査項目として取り上げた場合、ルビをふられた語のかなづかいが見られるわけである。そして、また、漢字の読みを確定するために添えられた送りがな（当時は一般に^{ソエ}副仮名）とルビとのかわり合いの有無も見られるわけである。それで、この面における調査も行なった。

なお、ここでは、「ふりがな」と「ルビ」とを同義とする。「ルビ」といえば活版印刷の形態を思い浮かべる。われわれの扱ったものの中には、木版文献もあるので、それを含めれば、その両方を覆う語としては、「ふりがな」の方がよいように思う。しかし、ここでは、簡便に従い「ルビ」を用いることとした。

担当者としては、上記の調査から、当時の人々の表記意識といったものの一端が推測されるのではなかろうかという期待を持ちながら、つぎのような事柄について調査分析を行なった。

1. 音ルビ、訓ルビ、宛字ルビ等の各文献内の使用状況
2. 使用度数の高い語にふられたルビの傾向
3. 一部分ルビのふられた文字の傾向
4. 宛字ルビ、意味ルビの用法
5. ルビと送りがなとの関係
6. ルビに見られるかなづかいの誤りについて

以上の調査は、近代語研究室において、今までに採集したカード、および集計カードのほか、若干のカード（小幡篤次郎訳「英氏経済論」1—3、明4刊）を補充し、これらを用いて行なった。

対象とした文献は、郵便報知新聞、読売新聞、東京絵入新聞、安愚楽鍋、交易問答、英氏経済論である。

この調査の全容は、次年度から行なう用字および漢語の調査の終了をまって、報告する予定である。

ここには、この調査の一部である、使用度数の高い語にふられたルビの傾向について報告する。

〔使用度数の高い語にふられたルビの傾向について〕

使用度数の高い語のうちのいくつかのものは、調査の対象となった資料ばかりでなく、その時代の基本的な用語として捉えられるものがあるだろう。また、いつの時代の語彙調査においても、常に使用度数の高い語として捉えられるものがあるだろう。そういった語はどのようなものであり、どのような書きあらわし方をされたものであろうか。郵便報知新聞の語彙調査の結果は、明治初期の書きことば語彙体系をどの程度に反映させているか、まだ十分明らかにされていないから、使用度数の高い語を調査対象としても、これをもって他を推すわけにはいかない。しかし、それにも拘わらず、使用度数の高い語について、あらゆる角度から分析を行なうことは必要であろうと思う。そのような立場からこの調査は行なわれた。

ところで、語を書きあらわすのには、漢字か、かな、あるいはその両方を用いて表記することが普通であるが、漢字にルビをふる「語」の書きあらわし方も存在する。そのルビは、明治初期においては、種々の働きがある。たとえば、文字を読みやすくするため、意味をあらわすため、原語を示すため、あるいは文脈でとくにその箇所を強調するためなどである。文献の質によっては、ルビ側がその文の文脈である場合もある。郵便報知新聞の文章は何人かの書き手によって書かれており、文体も文表記も統一されていないが（記事の性格によって統一されている）ルビの性格はパラルビであって、大部分の文脈は、本文の側にあると考えられる。

さて、ここに使用度数100までの語を取り上げて、つぎのことを調べようと

注 1. 書き手が文章中の漢字を選んでふりがなをつけるもの。

した。

1. よく使われる語を表記する漢字に、ルビがふられたかどうか。
2. ルビをふるとすれば、どんな漢字にふられたであろうか。
3. 1. 2の調査から、書き手の読み手に対する配慮とか、表記意識といったものの一端がうかがわれはしないか。

郵便報知新聞で、とくにルビの多くふられているのは、雑報記事（今日の社会面に相当する）である。この雑報記事の文体は軟かい文体（主として俗文体）である。漢文書き下し文体でも、ルビのふられることはあるが、きわめて少ない。パラルビであるために、そこに、書き手が、どんな語、ないしどんな文字にルビをふるかといった書き手の意識といったものが汲み取られるのではなからうかと考えられる。

この調査では、まず、使用度数 100 までの語にどのような表記がなされているかを見ることにした。それで、調査は、使用度数 100 までの語全体の表記の実態から始められた。

郵便報知新聞で使用度数 100 以上の語は 74 ある（国研報告 15、『明治初期新聞の用語』P61 参照）。その 74 語が、どのような語であるか、使用度数はどのぐらいか、どんな漢字が用いられているか、かな書きの語はどのぐらいあるか、ルビはどんな漢字にどのぐらい用いられているか、ということについて、以下の一覧表によって示そう。

表 1 使用度数 100 以上の語の表記一覧表

語	使用 度数	漢字（ <small>ルビつ きを含 む</small> ）	用 字	かな 数	ル ビ
有リ _リ	1783	389	有 ₁₃₈ 非 ₉₈ 在 ₁₅₀ 否 ₁	1394	<small>あらど</small> 非 ₁ _リ <small>あら</small> 非 ₁ _ズ
或イハ 副・接	217	217	或	0	
云イ _ッ	515	421	云 ₃₇₃ 謂 ₂₃ 言 ₁₃ 白 ₁₀ 識 ₁	94	<small>いは</small> 言 ₁ _ズ
至リ _ル	380	380	至 ₃₃₈ 到 ₃₁ 臻 ₂ 抵 ₁	0	<small>いは</small> 到 ₁ _リ <small>いた</small> 至 ₂ _リ <small>いた</small> 詣 ₁ _リ
今	127	127	今	0	
イマ 未 _ダ	115	112	未	3	<small>いま</small> 未 ₁ _だ
曰ク	233	233	曰 ₂₃₂ 云 ₁	0	
得	339	339	得 ₃₃₄ 獲 ₃	0	<small>え</small> 得 ₂

ウエ 上	134	133	上	1	
内	159	149	内118中29裡1	10	うち 中 ₁
大イニ	117	117	大	0	
多シ	162	162	多159衆2' 鱧1	0	
思イ、ッ	122	120	思96惟8' 想7' 願4' 憶1' 念1'	2	おも 思ひ ₃
及ビ 接	237	237	及	0	
及ビ、ッ	138	137	及136迨1	1	およ 迨び ₁
凡ソ	107	107	凡	0	
該	112	112	該	0	この 該 ₁
且ツ	140	140	且	0	
カン 間	136	136	間	0	
儀	186	186	儀	0	
聞ク	125	124	聞112聴8	1	き 聞き ₄
キン 金	226	226	金	0	
此ノ	727	714	此688是19之1該2	13	こ(の) 此(の) ₄
午後	110	110	午後	0	
心	103	102	心	1	
事	1166	601	事	565	こと 事 ₂
之レ	1007	978	之788是170此18	29	こ 是れ ₂
是レ 副	127	122	是109此6' 之3' 維3	5	こ 是れ ₁
昨日	117	117	昨日	0	
更ニ	116	116	更	0	さら 更に ₁
去ル	143	143	去	0	
然リ、ル	105	105	然96否6	0	しか 然り ₃
知ル	194	193	知189識1	1	し 知り ₃
而シテ	124	124	而120然4	0	
十一年	104	104	十一年	0	
人民	175	175	人民	0	
ス 為	602	6	為	596	
既ニ	175	175	既120已52業已1	0	すで 業に ₁ すでに ₁
則チ	163	163	則87即54乃22	0	

其ノ	1707	1694	其1679夫10厥1	13	そ 其の ₄
他 ^タ	142	142	他140佗2	0	
唯	127	127	唯75只43惟1 啻5	0	ただ ただ 唯 ₁ 只 ₂
但シ	104	104	但	0	
為 ^{タメ}	190	182	為	8	た 為 ₁ め ₁
地	160	160	地	0	ち 地 ₁
遂ニ	143	143	遂73終55竟5	0	つい 遂に ₃ 終に ₇
付キ.ク	381	378	付293附9就59着4	3	つ 就き ₈ 着き ₃ 付き ₂
同 名・連	463	463	同421全42	0	
通り	151	151	通	0	
時	247	165	時162秋2	82	とき 際 ₁
所 ^{トコロ}	388	386	所323処62	2	ところ 処 ₁
無シ	680	129	無114亡2 莫3 勿3 徴2	551	な な 無し ₂ 亡し ₃
猶	127	126	猶66 尚59	1	なを 猶 ₁
為シ.ス	310	125	為113成7 作2	185	な おこ 為し ₂ 作し ₁
成リ.ル	399	63	成55為7	336	な 成り ₁
並ビニ	123	122	竝112並9 (竝ト同字) 并1	1	
日	116	116	日	0	
人	219	219	人	0	
左 ^サ	117	117	左	0	
一 ^{ヒトツ}	117	117	一	0	
外 ^{ホカ}	158	158	外151他7	0	
又 接	294	286	又276亦10	8	
亦 副	289	285	亦173又92復17麻太1	4	また ま 又 ₁ 再た ₁
見ル	227	226	見176観17視13看9	1	み み み み 見 ₅ 観 ₃ 看 ₂ 視 ₁
右	198	198	右	0	
旨	184	184	旨	0	むね 旨 ₂
明治	221	221	明治	0	
以テ	148	148	以	0	

者・物	1118	692	者 ⁶⁵¹ 物 ³⁸	426	者 ^{もつ} ₂ 物 ^{もの}
故	224	92	故	132	故 ^{ゆゑ} ₂
故ニ	106	106	故	0	
依リ ^ル	281	202	依 ⁹⁴ 由 ³⁷ 拠 ¹⁵ 因 ⁴⁰ 寄 ¹	79	拠 ^よ り ⁶ 依 ^よ り ⁴ 憑 ^よ り ¹
			憑 ^よ り ¹ 仍 ¹		寄 ^よ り ¹ 仍 ¹
由	258	175	由	83	由 ^{よし} ₂
我が	189	189	我 ¹⁷⁵ 吾 ¹⁴	0	

この表に見られる74語を品詞別、語種別に見るとつぎのようである。

表 2 使用度数100以上の語の品詞別・語種別分布ならびにルビの使用状況

品 詞	総異語数	総延語数	和 語 異 延	漢 語 異 延	ル 異 (漢)	ビ 延 (漢)
名 詞 ^{注1}	31	8421	19 6264	12 2157	10 (1)	17 (1)
動 詞	15	5901	15 5901		14	68
形 容 詞	2	842	2 842		1	5
副 詞 ^{注2}	14	2204	12 2204		8	22
接 続 詞	7	1128	9 1128		0	0
連 体 詞	5	2878	4 2766	1 112	3 (1)	10 (2)
計	74	21374	61 19105	13 2269	36 (2)	122 (3)

注 1 名・連1を含む 注 2 副・接1を含む

ルビの多くふられている品詞は、異なり語数に注目すれば、動詞、名詞、副詞の順である。動詞は「為」を除き、他の語にはすべてふられていた。延語数に注目すれば、動詞は断然多くなる。ルビの半数以上が動詞にふられている。ただし、なぜ動詞にふられやすいかということは、今回の調査では明らかにしなかった。つぎに語種別にみると、漢語にふられたのは、該、地だけで、延語数も1語ずつできわめて少ない。結果として、和語動詞に多くふられることになる。では、和語動詞のうちで、どんな語にふられていたかということ、イタル(到・至・詣)8、ツク(就・附・着)13、ミル(見・観・看・視)11、ヨル(拠・依・仍・寄・憑)13などである。名詞では、とくにルビの多い語はなく副詞では、ツイニ(終・遂)10、連体詞では、コノ(此)4で、このほか、該に集計された(文脈から読みを「ガイ」と推定した)該^こ2(この場合「この」は意味を示すと見なされる)がある。これら、ルビの多くふられている語の共通点は二通り以上の漢字表記を持っていることである。しかし、それにしても

延べ語数の大きさを見れば、いかに、ルビの果たす役割が微々たるものであったかが、明らかであろう(0.6%弱)。もう少し詳しく述べると、郵便報知新聞に見られるルビの総数は6808語であり、その数は総延べ語数の約7%に当たる。

さて、今見てきた74語、延べ語数21,374語について、漢字表記、かな表記、ルビつき表記に分けて考察すると、つぎのようになる。

漢字表記			かな表記			ルビつき		
異	延	異字数	異	延	異	延	異字数	
74	16745	129	32	4631	36	122	49	

この表によれば、ルビつきの語は、漢字表記の語の約0.7%に見られることになる。それでは、ルビをふって漢字を読ませるものと、漢字によらず、かなで書きあらわす表記のものとは、どのくらい語数に開きがあるだろうか。

かなで書きあらわすということは、そのこと自体、漢字のあらわす意味を無視することになるのだから、漢字の読みをあらわす補助手段のかな(すなわちルビ)の働きとは全然働きが異なる。しかし語を書きあらわす手段としては、

1. 漢字だけで書きあらわす
2. 1に、それを読むためのルビをふる
3. かなだけで書く
4. 漢字とかなを用いて書く(使用度数100までの語には送りがなを別にすれば、まぜ書きの語はなかった。)

の四つが見られるわけであるから、この要素を平面的に並べて、使用度数の高い語の表記を見ておこうと思う。4は除外する。

さて、かなで書きあらわした語は、異なり語数32、延べ語数4631であり、延べ語数で見ると、漢字表記の語に対して、約28%を占めている。このことは、使用度数の高い語では、かな書きの語数の多いということの意味する。そのことは、すでに、年報9に、使用度数10以上の語のかな書き語を一覧表にして報告してあるので、ここには触れない。かな書きが、漢字書きより多いのは、有り(漢字389、かな1393) 為^ス〈サ変〉(漢字6、かな596) 無^シ(漢字129、かな551) 為^スス(漢字125、かな185) 成^ル(漢字63、かな336) 故^ニ(漢字92、かな132)である。そのほか、漢字書きより、かな書きが少ないにしても、言う

(94) 事⁵⁶⁵ 時⁽⁸²⁾ 物・者⁽⁴²⁶⁾ 依ル⁽⁷⁹⁾ 由⁽⁸³⁾などは、多いといふことができよう。現代では、さらに多くの語に、たとえば連体詞の、此ノとか其ノなどを始めとして、副詞などにかな書きの語は多かろうし、また、数の点でも、全般的にふえているであろうことは、容易に想像される。しかし、この中で、事や時は、かなの合字さえ、古い時代から生じていたわけである。このように、書き手が文章を書き記していく場合、かなで書きあらわす意識の働く語（これは、ほとんど和語といってよかろう）の中には、しばしば用いられるために、あるいは、語そのものが、形式化して、そのためかなで書きあらわすといったものもあるわけである。このような語には、書き手の方は、漢字を書いて、それにルビまでふるような意識は、あまり働かないであろうと思われる。それであるから、非^{あら}ず、際^{とき}、亡^なしとか、抛^よる、仍^よる、憑^よる、依^よる、寄^{おこ}る、作すのように、むずかしい読みのものに、ふられる場合が多いように思われる。この場合は、ルビをつけてまでも漢字を書き分けすることによって意味を明確にしようとする意識が働いているのではなかろうかと思われる。

ところで、先にも述べたように、郵便報知新聞のルビは、パラルビという性格を持っているので、一面的な考え方ではあるが、読み手に対する書き手の配慮——それは多分に恣意的ではあるけれども——がうかがいとれるのではないか、つまり、ある語表記にはルビをふるし、あるものにはふらないといった意識がうかがいとれるのではないかと思うのである。それを見るためには、

1. 漢字で書きあらわす部分が、一定しているのはどんな語であり、どんな語表記にルビがふられていたか
 2. 漢字で書きあらわす部分が、二通り以上の表記のしかたを持っているのはどんな語であり、また、どんな語表記にルビがふられていたか
- ということを調査した。

以下、1・2を具体的に示そう。

1.

- (1) 或[○](イ)ハ、今^マ、上^{○ヱ}、大イニ、及^ビ、凡^ソ、且^ツ、心[○]、去ル^{○ス}、為[○]、但^シ、通^リ、日、人、左^サ、一^ツ、右、以テ、故ニ — 以上和語 —

カン
間、儀、金、午後、昨日、十一年、人民、明治

— 以上漢語 —

以上はルビつきがなかった。°印は、かな書きもあった語。

- (2) *未^カダ、事^カ、更^カニ、為^カ(メ)、旨^カ、故^カ、由^カ
*該^カ、地^カ

— 以上和語 —

— 以上漢語 —

以上はルビつきもあった語。なお、該は、先にも記したように、よみを示しているものではない。*印はルビつき、°印はかな書きを含む語である。()内は送りがない場合を示した。

2.

- (1) 曰・云(ク)、多・衆・饒(シ)、而・然(シテ)、則・即・乃(チ)、
他・佗、同・仝、並・并、外^カ・他、我・吾(ガ)

以上はルビつきがなかった。

- (2) °有^カ・非・在(リ)、°云^カ・言・謂・曰・識(ウ)、°至^カ・到・臻・抵・詣(ル)、
得^カ・獲、°内^カ・中・裡、°思^カ・惟・想・願・憶・念(ウ)、及^カ・迨(ブ)
°聞^カ・聴(ク)、°此^カ・是・之・該(ノ)、°之^カ・是・此(レ)名詞、°是^カ、
此^カ・之・維(レ)副詞、°然^カ・否(リ)、°知^カ・識(ル)、°既^カ・已^カ・業已^カ、
°其^カ・夫・厥、°唯^カ・只・惟・叕、°遂^カ・終・竟(ニ)、°付^カ・附^カ・就^カ・着(ク)、
°時^カ・秋・際、°所^カ・處、°無^カ・亡・莫・勿・微(シ)、°猶^カ・尚^カ、為^カ・
成^カ・作(ス)、°成^カ・為(ル)、°又^カ・亦(接)、°亦^カ・又^カ・復^カ・再(タ)・麻太(副)、
°見^カ・觀^カ・視^カ・看(ル)、°者^カ・物、°依^カ・由^カ・拠^カ・因^カ・寄^カ・憑^カ・仍(ル)

以上、29語には、ルビつきの語が含まれている。*印はルビつき、°印はかな書きを含む語である。

ところでこのように分析して調査したものの、ルビがどのような語にふられやすいかといった傾向は、見られなかった。さきにも述べたように、郵便報知新聞は、大ざっぱに言って、漢文書き下し体と俗文体とがあり、俗文体にルビが多くふられている。それであるから、俗文体の語のどのような文字にふられやすいかということは、さらに分析しなければ分からない。文字の難易だけにかかわることなく、強調といった働きも考えられる。ある種の語には集中的にルビがふられるといったこともあるかも知れない。しかし、上記の1に見られる文字および2の(1)の表記数の多い文字(表1参照)は、読み手が漢字だけ

で読むことができるというように、書き手の側で考えた文字ではなかろうかと考える。2の(2)には、かなりむずかしい漢字が見られ、それにはルビが硬い文体（ルビが少ない）に用いられたものが多いであろうと推測される。

なお、「赤坂喰違より皇居に詣^{いた}られんと紀尾井町へ差掛られたるに～11.5.17雑報」のように、とくに文字を選んでルビをつけたことがはっきりする場合と「此の道理を聞^と訳^{どうり}け玉^{きぎわ たま}へと事を分^{こと}けての男^わが異^を見^{とこ} ～ 11.7.12雑報」のように総ルビ的なものとは、かなり条件が違ってこよう。

しかし先にも述べたように、使用度数の高い語にふられるルビはきわめて少ない。それは、使用度数の高い語に用いられる文字は、しばしば用いられる文字が大多数を占めるから、それを読ませる為の補助手段としてルビを用いようという意識はあまり働かないだろうし、一方、使用度数の高い語は、かな書きされるものがある、そういった語には、ルビの必要性は、さらに少ないということになるのであろう。

（林四，進藤）

『色葉字類抄』の用語索引の作成

昨年度に完成した用語の五十音順索引を補なうものとして、本年度は、いわゆる「逆引き」の索引を作った。

用語を語末から五十音順に排列しなおしたものである。

たとえば、つぎのように排列されることになる。

ク	サ	(種)	カノニエクサ (人 蔘)
ク	サ	(草)	ミナシコクサ (紫 蔘)
ヤ	イ	クサ (艾)	エヌコクサ (狗尾草)
ツ	キ	クサ (鴨頭草)	チ ク サ (千 種)
ク	サ	クサ (種 種)	タチマチクサ (牛 扁)

すなわち、2つ以上の部分ででき上っている語の、後の部分を検索することができるわけである。しかし、これも、2つの部分に分けることができる語だけについて言えることであって、3つ以上のものの中の部分の検索の為には、もう一つ別の作業が必要である。前記の例について言えば、〈草〉〈種〉が最後の部分になっている語は見事に並んでいる、しかし、中の部分になっている〈ナシ〉〈コ〉などは、この排列とは無関係である。まして、多く使われているであろうと思われる、〈ツ〉〈ト〉〈ニ〉〈ノ〉〈ヲ〉などには、まったく無力である。

さて、その中間の部分として抜き出すとしても、一体どの程度までを考えたらいいかという問題にぶつかる。一般に辞書の見出しとして採られているものについては当然である。ところが、逆引きの為の第一次作業では、辞書の見出しとして登録はされていないが、やはり何かの意味を持つと考えられる。たとえば、〈ヤカ〉(ハレヤカ)とか、〈ク〉(ソヨク・イハク)なども、たくまずして排列されている。だから、体裁の上からもこの類については、抜き出すようにした。

さらに、漢語については、これもまた、

採擇 採擢 弊宅 夢澤 下宅 囑託 支度 請宅 洗濯 遷謫 撰擇

のように排列されている。こうなると、やはり、漢語の造語要素としての働きにも注目する必要があると考えたくなる。しかし、これはいわば漢字の音引き索引を作るとするような結果になる。用字索引については、まだその仕事に取りかかっていないが、当然作らなければなるまい。しかし、その為には、どうしても新しい索引法の開発をしなくては、あの複雑な運筆のあとを整理できそうにもない。今後に残された大きな課題である。

古 辞 書 の 複 製

本年度、写真によって複製した資料は、つぎの3本である。

1. 三寶類字集 天理図書館蔵

先年『国語・国文』別刊として刊行された、伴信友筆写本の底本(或人本)である。「高山寺」「寶玲文庫」の蔵書印がある。

零本ではあるが、完本である為に多く利用されている観智院本と比べて、仮名遣、仮名字体・声点などでの資料価値は高い。

2. 明応本節用集 国立国会図書館蔵(亀田文庫)

「明応五年五月三日」の識語があることから、この名がある。いわゆる伊勢本である。

古本節用集の中では、年代のはっきりしているものとしては古い。しかも伊勢本であること、さらに、伊勢本としては珍しく完本であることに資料としての価値を認めたい。

3. 雑字類書 国立国会図書館蔵(旧上野図書館)

箱書きは上記の書名ではあるが、内容から見て、節用集の一本である。成立は、本文・付録の記事を勘案して、明応3年と考えてよいであろう。

漢音は朱書し、熟語についてはそのよみは右に、その単字のよみを左に、かならずといってよいほど付けてある。まことによく整理され、誤写と思われるものも少ない。その上、語の数も抜群に多い。節用集原本の成立や性格を考える為のすぐれた資料というべきであろう。(山田・広浜)

類義語の調査研究

A. 研究の目的・経過

第一資料研究室は前年度に引き続き類義語の調査研究を行なっている。本年度は最終年度として調査結果のまとめとその記述にあてた。この研究は、国語には類義語がなぜたくさんあるか、それが必要とされる理由は何か、を考え、もし、将来国語の語彙をより能率的にするために、ある程度の整理を加える必要があるとしたならば、その可能性は類義語に関してはどういう条件の場合に考えられるかを考察するものである。

われわれは類義語を主として意味と語感の両面から観察した。

意味に関しては、次のような点を主眼として調査した。

(1) 一つのセットの類義語において、その意味がどういう面で、どのように違っているかという点をアンケート調査によってしらべた。これは類義語の意味の異同については必ずしも社会一般の意識が安定していない場合が多いのではないかと考えたからである。そこで、まず、いくつかのセットの類義語について、両者のどういう面が違い、どういう面が同じだと思いかをたずねた。

以上は意味の違いに関する意識調査である。

(2) この意識調査の結果に基づいて、アンケートの回答者が意味の違いがあると認めたところが、はたして、多数の人々も同様にその違いを認める場所であるかどうかをテストによって調べた。これは、類義語の使い分けの実態調査である。ことに、同音類義語の使い分けについてはあいまいなものがあり、今日、社会的にも、表現・理解上の困難な点として問題にされているので、この種の調査にかなりの比重をかけた。

語感とは、語の意味の中核をなす知的な側面に対し、語の意味の情意的側面をさすものと考えたが、特にある程度社会的な通念として一定の情意性が認められるものに限定した。したがって調査は、そのような語感につき、つぎの諸点から調べた。

- (1) あるセットの類義語にどのような語感的な差異が認められるか
- (2) あるセットの類義語のどちらを好み、使用する際にはどちらを選ぶか
- (3) 使用者がなぜ一方の語を選択したか

さらに、語感の違いが年齢・教養等によってどのような違いを見せるかを追求し、類義語の一つの側面の解明につとめた。

また、近年、外来語が歓迎され、それが在来語と類義語をなすものが多い。国語の能率化という点からも問題視されつつあるところであるが、このような事態がなぜ起こるか、外来語がなぜはいりやすいか等についても追求してみた。

さらに語彙整理の一つの方法として、現在「言いかえ」が行なわれているが、それが類義語と関連をもつ面を事例的に収集して、考察し、問題点の発見につとめた。

以上がわれわれの行なった調査である。この調査にともなって高校生・大学生・老人ホーム入寮者・コピーライター講習会の受講者等にいくつかの小規模のテストを繰り返し実施した（昭和37年度年報86～87ページ参照）。

本年度は、以上の調査結果を整理し記述したのであるが、詳細は近く「類義語の研究」（仮称）として報告する予定であるから、これに譲ることにする。

B. 担 当 者

この調査は松尾拾・西尾寅弥・田中章夫が担当し、研究補助員露峰裕子・河東はるみはその作業を助けた。

（松尾）

現代語における漢字ならびに 用字法に関する調査研究

A. 研究の目的と経過

第三資料研究室は、国語の文字表記に関する諸問題を研究調査することを目的としている。

昭和37年度は、書きことば研究室で行なった「現代雑誌の用語・用字の概観調査」で得られた資料に基づいて調査を進め、その報告書として、国研報告22『現代雑誌九十種の用語用字』（第二分冊 漢字表）を刊行した。引き続き、その結果に基づいて、漢字の音訓使用の実態ならびに表記のゆれに関する分析を進める予定であったが、38年度は、室員の斎賀・松本の両名が別掲の「国民各層の言語生活の実態調査(B)」(→ 144 ページ)に委員として参加し、時間の大半をその仕事に費やしたため、多くはできなかった。

B. 研究担当者

担当者は、

斎賀秀夫 松本 昭

の両名であり、研究補助員宇野瑠美子が作業に従事した。

C. 作業の概要

1. 漢字の音訓に関する分析

現代雑誌九十種の漢字調査の標本には、当用漢字1850字のうち1835字が現われた。また、当用漢字補正案で新たに加えられる候補になった漢字28字および同案で「燈」の字体改正として示された「灯」の字は、いずれもこの標本に現われている。そこで、この1835字に29字を加えた合計1864字の一字の音訓について、それが当用漢字音訓表および当用漢字補正案に示された音訓の範囲内にあるかどうかを調査した。その結果のうち、標本にあまり現われなかった表内

音訓の例、および標本に多く現われた表外音訓の例については、前年度の年報14に報告した。その後、上記の1864字全体についての音訓使用状況の集計結果がまとまったので、以下に報告する。

以下の表で示した見出しは、それぞれ次のような事柄を表わす。

表内音訓……当用漢字音訓表に掲げられた音訓、および同表で許容される範囲の音訓。

表外音訓……当用漢字音訓表では認められない音訓。

表外(並)……漢字一字ごとに与えられた、普通の音訓。

表外(特)……「田舎(いなか)」「百合(ゆり)」などのように、漢字二字三字の結合に与えられた、特殊のまたは臨時のよみ方。

人 地 外……人名・地名以外に使われた漢字の音訓。

人 地……人名または地名に使われた漢字の音訓。

第1表 音訓の延べ使用度数

	総延べ 使用 度数	表 内 音 訓				表 外 音 訓					
					計	表 外 (並)			表 外 (特)		
		人地外	人 地	計		人地外	人 地	計	人地外	人 地	計
当用漢字 1835字	267570 (100.0)	232711 (87.0)	21574 (8.1)	254485 (95.1)	6052 (2.3)	3636 (1.4)	9688 (3.6)	2944 (1.1)	453 (0.2)	3397 (1.3)	13085 (4.9)
補正漢字 29字	796 (100.0)	587 (73.7)	152 (19.1)	739 (92.8)	36 (4.5)	17 (2.1)	53 (6.6)	4 (0.5)	—	4 (0.5)	57 (7.2)

第2表 音訓の異なり使用度数

	総異なり 使用度数	表 内 音 訓				表 外 音 訓							
						表 外 (並)				表 外 (特)			
		人地 外	人地	計		人地 外	人地	計		人地 外	人地	計	
当用漢字 1835字	5184 (100.0)	3298 —	1041 —	4339 —	*(3318) (64.0)	954 —	429 —	1383 —	*(1289) (24.9)	487 —	113 —	600 —	*(577) (11.1)
補正漢字 29字	56 (100.0)	37 —	9 —	46 —	(37) (66.0)	12 —	7 —	19 —	(17) (30.4)	2 —	—	2 —	(2) (3.6)

(注) *印のついた()内の数字は、「人地外」と「人地」との間にダブっている音訓を除いたもの。

第1表の上欄を見ればわかるように、標本に現われた当用漢字1835字の音訓使用状況は、全体の約95パーセントまでが、当用漢字音訓表の範囲でまかなわれている。音訓表で認められない音訓は、全体の約5パーセントであるが、その約三分の一は、人名・地名に使われたものである。なお、ここに細かくは示さないが、この1835字を使用度数の順位に従って配列し、それを随所に区切って一群とし、各群に含まれる漢字の音訓の使用状況を比較すると、使用度数の多い漢字の群ほど、使用全音訓に対する表内音訓の比率が高いという結果が出ている。（使用度数順に並べた最初の200字の場合、使用全音訓に対する表内音訓の比率は約97パーセント、最後の200字の場合は、約87パーセント。）

第2表は、標本に現われた音訓の異なり使用度数について調べたものである。当用漢字音訓表に掲げられた音訓は、全部で3122（音2006、訓1116）種類であるが、このほかに許容される音訓がかなりあるため、標本では、当用漢字1835字に限っても、3318という種類が現われたわけである。

2. 表記のゆれについての分析

38年度は、標本に現われた語のうち、送りがなのつけ方がゆれている語、およびゆれる可能性のある語をすべてカード化し、内閣告示の「送りがなのつけ方」の通則番号に合わせてそれを分類し、「送りがな一覧表」を作成した。

（斎賀）

国民各層の言語生活の実態調査 (A)

国民各層の言語生活の実態調査は、昭和37年度にはじまり、長岡市を中心とする言語調査と、ことばに関する大学生の意見調査とのふたつを実施した。このうち、ことばに関する大学生の意見調査については、『年報14』にその成果を報告したが長岡市を中心とする言語調査については、その実施概要を報告しただけであった。また、長岡市を中心とする言語調査の中心的部分については、さらに継続して補充調査をしたいものが残っていた。

今年度の国民各層の言語生活の実態調査としては、長岡市とはちがった土地で、長岡市では行わなかった方面を主として研究調査することになったので、その調査(松江市における言語調査)を、「国民各層の言語調査(B)」と呼び長岡市における言語調査の継続・補充の調査を、「国民各層の言語調査(A)」と呼ぶことにした。

A. 長岡市を中心とする言語調査の結果報告

1. 資 料

長岡市を中心とする言語調査について、昭和38年10月2日、長岡市厚生会館で研究報告会を開いた。以下に掲げるのは、その時に資料として作成したものである。

1.1 昭和37年度国民各層の言語生活の実態調査のあらまし(永野)

○目 的

いろいろの年齢層・職業層・学歴層および男女を含む国民一般が、日常どのような言語生活を営んでいるか、ことばや文字に対してどのような問題を持ち、どのような意識を持っているか、それはどうしてか、の実態を明らかにする。

○計 画

- A. 特定地点の調査……長岡調査
- B. 大学生の調査

○組 織

この調査は、国立国語研究所全体の仕事として委員会組織で進められたものであるが第2 研究部言語効果研究室が幹事研究室として、企画の中心となり、主たる事務処理にあたった。

調査が書きことばの面を主とする建て前から、関係の各部室から委員が出た。委員は次の通りである。

委員長 岩淵悦太郎

副委員長 興 水 実

委 員 永野 賢，高橋太郎，渡辺友左（以上，幹事研究室員）

林 大，山田 巖，松尾 拾，見坊豪紀，柴田 武，芦沢 節，齋賀
秀夫，出牛清二郎（会計）

補 助 員 宮地美保子，菅原茂子，根本今朝男，川又瑠璃子

なお，面接調査には，調査員として，次の8 名も参加した。

飯豊毅一，林 四郎，水谷静夫，西尾寅弥，南不二男，松本 昭，石綿敏雄，吉沢典男
また，生徒調査には，村石昭三・吉沢典男が出張した。

○長岡における調査事項

- (1) 各個人の読み書き生活の実態と，ことばや文字についての意識
- (2) 国語政策・国語問題への関心・態度・知識・意見
- (3) 国語政策の普及の経路・条件
- (4) 言語環境の地域的特性

○地点の選定

調べやすさ 被調査者の層 都市の性格 経済圏 言語的背景 文化度

○実施要領

① 面接調査

- ① 各個人の読み書き生活の実態
 - ② 国語国字への関心・態度・意見および知識や情報を得る経路
 - ③ 各個人の言語感覚——方言・類義語・外来語など
- (a) 基礎抽出調査……住民調査票から，15才～69才の市民2012人を選んで質問紙を
届け，1663人回収（9月13日～19日）
- (b) 面接調査……基礎調査票に基づき，男女・年齢・学歴によって310人を選び，
11人の所員によって，面接（10月25日～30日）

② 母親調査

① 各個人の漢字・かなづかい・送りがなの使用の実態

② 自分の習った用字法と、子どもの習っている用字法とのちがいについての問題意識とその処理のしかた

- ・長岡市立千手小学校、長岡市立東中学校、新潟大学長岡分校付属小・中学校のPTAの母親 243 名について調査（10月23日～30日）

③ 会社員調査

① 漢字使用の実態

② 類義語についての理解度・語感・使いわけ

- ・津上製作所および、北越製紙工場198名について調査（10月31日・11月1日）

④ 生徒調査

① 教育漢字・当用漢字・表外漢字の読み書き

○被調査者：生年・年齢・国語政策施行時学年対照一覧表

調 査 別 年 齢 層						国語政策との関係	
母 親 調 査	会 社 員 調 査	面 接 調 査	出 生 年	調 年 査 時 齢	現 在 年 齢	当用漢字 現代かなづ かい制定時 (21年)	当用漢字 字体表時 (24年)
	1	1	昭22 } 昭15	15才 } 22才	16才 } 23才	当 学 時 学 齡 前	当 学 時 学 齡 前
	2	2	昭14 } 昭 9	23 } 28	24 } 29	当 小 学 時 小 学 生	当 小 学 時 学 生
		3	昭 8 } 昭 4	29 } 33	30 } 34	当 旧 中 生 旧 女 生	当 新 中 生 新 高 生
2	3	4	昭 3 } 大 8	34 } 43	35 } 44		
3	4	5	大 7 } 明42	44 } 53	45 } 54		
		6	明41 } 明26	54 } 69	55 } 70		

（注：「現在年齢」とは昭和38年10月における年齢）

○被 調 査 者

① 基礎調査：学歴・年令・性別集計

	年 齢	学 歴	1 (義 務 教 育)			2 (旧制中女, 新制高)			3 (大学 計
			計	男	女	計	男	女	
市 部	1 (昭22 ~ 昭15)		81	44	37	180	69	111	11
	2 (昭14 ~ // 9)		103	39	64	73	31	42	8
	3 (昭 8 ~ // 4)		101	49	52	96	38	58	20
	4 (昭 3 ~ 大 8)		212	110	102	138	53	85	44
	5 (大 7 ~ 明42)		173	94	79	86	39	47	17
	6 (明41 ~ //26)		160	89	71	43	28	15	17
	小	計	830	425	405	616	258	358	117
	不明・条件不備		3	1	2				
	計		833	426	407	616	258	358	117
栖 吉 地 区	1 (昭22 ~ 昭15)		4	1	3	3	2	1	
	2 (昭14 ~ // 9)		9	2	7	1	1	0	
	3 (昭 8 ~ // 4)		5	3	2				
	4 (昭 3 ~ 大 8)		10	4	6	1	0	1	
	5 (大 7 ~ 明42)		5	3	2	1	0	1	
	6 (明41 ~ //26)		6	3	3				
	計		39	16	23	6	3	3	
市 部, 栖 吉 計			872	442	430	622	261	361	117

② 漢字習得の地域的要因・経路・方法

- ・長岡市立東中学校, 新潟大学長岡分校付属中学校, 県立長岡高校, 同第二高校, 同工業高校の各 2 年生, 計 370 名について調査 (11月19日~22日)

⑤ 言語環境の調査

- ① 街頭における文字の観察 (10月 1 日 ~ 2 日)
- ② 市民の消費する筆記用具 (10月 3 日)
- ③ 家庭にはいる文字の記録 (10月23日~29日)
- ④ 長岡市の交通・通信量・読み書き関連産業などの資料収集 (12月 4 日 ~ 6 日)

・高専以上)		小 計			小学校中退以下・未記入			計		
男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
6	5	272	119	153	3	1	2	275	120	155
7	1	184	77	107	2	0	2	186	77	109
16	4	217	103	114	2	1	1	219	104	115
36	8	394	199	195	14	7	7	408	206	202
13	4	276	146	130	12	6	6	288	152	136
13	4	220	130	90	16	7	9	236	137	99
91	26	1563	774	789	49	22	27	1612	796	816
		3	1	1				3	1	2
91	26	1566	775	791	49	22	27	1615	797	818
		7	3	4				7	3	4
		10	3	7				10	3	7
		5	3	2	1	1	0	6	4	2
		11	4	7				11	4	7
		6	3	3	1	1	0	7	4	3
		6	3	3	1	1	0	7	4	3
		45	19	26	3	3	0	48	22	26
91	26	1611	794	817	36	16	20	1663	819	844

② 面接調査：学歴・年齢・性別集計

(学歴欄・年齢欄の数字は①基礎調査の表に準ずる。以下同じ。)

(市 部)

学歴 年齢	1			2			3			計		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
1	8	4	4	34	13	21	9	5	4	51	22	29
2	10	4	6	14	6	8	7	6	1	31	16	15
3	10	5	5	18	7	11	16	13	3	44	25	19
4	20	10	10	27	10	17	35	28	7	82	48	34
5	16	9	7	17	8	9	13	11	2	46	28	18
6	16	9	7	8	5	3	12	10	2	36	24	12
計	80	41	39	118	49	69	92	73	19	290	163	127

(栖吉地区)

年齢 \ 学歴	1			2			3			計		
	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女
1	2	1	1	/	/	/	/	/	/	2	1	1
2	3	1	2	/	/	/	/	/	/	3	1	2
3	2	1	1	1	0	1	/	/	/	3	1	2
4	4	2	2	1	0	1	/	/	/	5	2	3
5	3	2	1	/	/	/	/	/	/	3	2	1
6	4	2	2	/	/	/	/	/	/	4	2	2
計	18	9	9	2	0	2	/	/	/	20	9	11

③ (長岡) 母親調査：
年齢・学歴別集計

合 計

年齢 \ 学歴	1	2	3	不明	計
1. (昭10~ 昭4)	15	39	0	1	55
2. (昭3~ 大8)	35	102	16	1	154
3. (大7~ 明40)	4	17	9	0	30
不 明	0	3	1	0	4
計	54	161	26	2	243

④ (長岡) 会社員調査：
年齢・学歴別集計

年齢 \ 学歴	1	2	3	計
	1	2	3	計
男				
1. (昭22 ~15)	2	11	1	14
2. (昭14 ~4)	5	21	13	39
3. (昭3 ~大8)	20	22	11	53
4. (大7 ~明35)	38	14	4	56
計	65	68	29	162
女				
1.	3	12	0	15
2.	2	12	1	15
3.	2	4	0	6
4.	0	0	0	0
計	7	28	1	36
子				
1.	5	23	1	29
2.	7	33	14	54
3.	22	26	11	59
4.	38	14	4	56
計	72	96	30	198
全				
1.	5	23	1	29
2.	7	33	14	54
3.	22	26	11	59
4.	38	14	4	56
計	72	96	30	198
体				

⑤ (東京) 母親調査：年齢・
学歴別集計

年齢 \ 学歴	1	2	3	計
1. (昭10 ~昭4)	1	38	6	45
2. (昭3 ~大8)	5	47	11	63
3. (大7 ~明40)	1	5	3	9
計	7	90	20	117

⑥ (東京) 会社員調査：年齢・学歴別集計

工 員

事 務 員

年 齢 \ 学 歴		1	2	3	計
男 子	1. (昭10～昭4)	8	6	0	14
	2. (昭3 ～大8)	13	2	0	15
	3. (大7～明40)	1	0	0	1
	計	22	8	0	30
女 子	1.	17	2	0	19
	2.	1	0	0	1
	3.	0	0	0	0
	計	18	2	0	20
全 体	1.	25	8	0	33
	2.	14	2	0	16
	3.	1	0	0	1
	計	40	10	0	50

年 齢 \ 学 歴		1	2	3	計
1		0	4	22	26
2		0	2	13	15
3		1	3	14	18
計		1	9	49	59
1		0	6	3	9
2		0	9	0	9
3		0	2	1	3
計		0	17	4	21
1		0	10	25	35
2		0	11	13	24
3		1	5	15	21
計		1	26	53	80

1.2 ことばの変容とその過程（高橋）

—— 長岡調査における、いくつかの問題点 ——

1. 長岡におけるク→カの移行過程について

- (1) 問題点 国語調査委員会の方言調査（音韻調査報告書——明治38年3月）以来、現在に至るまで、しばしば報告されているように、新潟県一带に、「ク」和「カ」の区別が存在する。しかし、最近の若い人たちの間では、この区別があまり行なわれていないようであるので、その状況を調べた。（問題提起は柴田武所員）
- (2) 調査方法 面接調査の質問項目に次のような問を入れた。

- A （火事の絵を見せて）これは、何の絵ですか。
 B 「火事」にふりがなをつけるとしたら、「かじ」と「くわじ」と、どちらが正しいと思いますか。
 C （厚生会館の写真を見せて）これは何という建物ですか。

(3) 結果の概要

A 「火事の絵」

(数字は%)

		15才～ 22才	23才～ 28才	29才～ 33才	34才～ 43才	44才～ 53才	54才～ 69才	全 体	栖 吉 地 区
全 体	カ ジ	92	83	48	38	12	21	47	30
	ク ヲ ジ	8	17	52	62	88	79	53	70
男 子	カ ジ	90	79	48	33	10	15	41	56
	ク ヲ ジ	10	21	52	67	90	85	59	44
女 子	カ ジ	93	85	48	42	15	30	53	9
	ク ヲ ジ	7	15	52	58	85	70	47	91

B 「カイカン」と「クワイカン」

		15才～ 22才	23才～ 28才	29才～ 33才	34才～ 43才	44才～ 53才	54才～ 69才	全 体	栖 吉 地 区
全 体	カイカン	90	87	70	55	40	29	60	40
	ク ヲ イ ク ヲ イン	10	10	29	43	60	64	37	35
男 子	カイカン	87	84	63	54	43	27	56	67
	ク ヲ イ ク ヲ イン	14	10	36	45	54	72	42	22
女 子	カイカン	93	90	77	56	28	30	63	18
	ク ヲ イ ク ヲ イン	7	10	23	42	68	53	33	46

- クォカに移行は、かなり進んでいる。
- 年齢の低い人ほど「カ」の音が多い。特に30才前後に断層が見られる。
- 「火事」よりも「会館」のほうが移行がはげしい。
- 一般に、男子は女子より移行がややはげしい。
- 栖吉地区において女子の移行が少なく、男子の移行が大きい。

A 火事の絵

		15才～ 22才	23才～ 28才	29才～ 33才	34才～ 43才	44才～ 53才	54才～ 69才	全 体
義務 教育	カ ジ	75	100	50	25	6	19	37
	ク ヲ ジ	25	0	50	75	94	81	63
旧中 ・新高	カ ジ	100	57	44	48	12	25	57
	ク ヲ ジ	0	43	56	52	88	75	43

大学・ 高専	カ ジ	89	86	56	63	77	33	64
	ク ヲ ジ	11	14	44	37	23	67	36

○ 34才以上のものについては、学歴が高いほど移行がはげしい。

B 「火事」のふりがな（Aで「クヲジ」と答えた人のみ）

		15才～ 22才	23才～ 28才	29才～ 33才	34才～ 43才	44才～ 53才	54才～ 69才	全 体	栖 地 吉 区
全 体	か じ	100	52	52	30	29	23	34	64
	く っ じ	0	32	48	61	71	76	63	36
	わからぬ	0	16	0	4	0	1	2	0
男 子	か じ	100	69	48	27	13	31	30	75
	く っ じ	0	31	52	65	87	68	68	25
	わからぬ	0	0	0	8	0	1	2	0
女 子	か じ	100	33	56	33	50	8	39	60
	く っ じ	0	33	44	58	50	92	57	40
	わからぬ	0	33	0	9	0	0	1	0

義 務 教 育	か じ	100	/	67	20	33	8	28
	く っ じ	0	/	33	67	67	92	68
	わからぬ	0	/	0	8	0	0	2
旧 中 ・ 新 高	か じ	/	50	40	43	20	83	41
	く っ じ	/	33	60	57	80	17	57
	わからぬ	/	17	0	0	0	0	2
大 学 ・ 高 専	か じ	100	100	71	69	33	38	61
	く っ じ	0	0	29	31	67	50	36
	わからぬ	0	0	0	0	0	12	3

- 年齢が高いものほど「くっじ」とふるものが多い。
- 15才～22才までには「くっじ」とふるものがいなかつた。
- 全体として34才～43まで「くっじ」とふるものがふえる。

(4) 考 察

- ・長岡におけるクッの音は、カの音に移行しつつある。
- ・「火事」と「厚生会館」の間には移行の程度に違いがみられる。一般に語による異なりがあると考えられる。
- ・クッ→カの移行は戦後に育ったものにおいて特にいちじるしい。
- ・学歴の高いものほど移行がはげしい。
- ・発音の移行については、23～28才と29～33才の間に断層が見られ、ふりがなのつけかたでは29～33才（中卒までに新かなづかいにふれたもの）と34～43才の間に断層が見られるので、新かなづかいの影響が考えられる。
- ・しかし戦後のいちじるしい移行現象は、「新かなづかい」のような学校教育の影響のみによるものか、それとも、東京―長岡間の社会的距離の短縮がある程度の要因になっているのかは、簡単に結論を出すことができない。
- ・栖吉地区の男子のはげしい移行傾向については、本年10月にさらに調査を行なう。

2. 中学・高校生の長岡関係文字の習得過程

—— 学校外における言語習得過程の地域的要因 ——

- (1) 問題点 中学生や高校生が、国語の学習以外に文字（漢字）を習得する場合、文字習得の要因として、地域社会での文字環境がどの程度影響するかを見る。（研究担当は国語教育研究室）
- (2) 調査法 当用漢字表外の文字（表外字）を含めた漢字の書き取り、表外字や、音訓を認められていない文字を中心とした漢字（語）の読み、学習外の漢字（語）の習得要因の反省をペーパーテスト形式で、中学・高校生に行なった。
- (3) 調査結果

A 新潟県地名表外字の書き取り

		100% ～90%	～80%	～70%	～60%	～50%	～40%	～30%	～20%	～10%	～0%	備考
中 学	長岡 2校	岡崎			柏彦			弥	栃 (栃)	潟		長岡 柏崎 弥彦 栃尾 (栃木) 新潟
	東京 1校	岡崎					彦柏	(栃)	栃		潟弥	
高 校	長岡 3校	岡崎 柏	彦		栃 (栃)	弥			潟			
	東京 1校	岡崎	柏彦			(栃)			栃		潟弥	
	山形 1校	岡崎 柏		彦				潟 (栃)		栃弥		

- ・長岡関係表外字の書き取りは、長岡がよい。
- ・「潟」については問題がある。

B 新潟県以外地名表外字の書き取り

		100% ~90%	~80%	~70%	~60%	~50%	~40%	~30%	~20%	~10%	~0%	備考
中 学	長岡 2校		奈		鎌				(栃)	槍		奈良 鎌倉 槍が岳
	東京 1校			奈	鎌			(栃)	槍			
高 校	長岡 3校	奈鎌			(栃)	槍						(栃木)
	東京 1校	奈鎌				(栃)	槍					
	山形 1校	奈鎌						槍 (栃)				

○ 字によって異なるが、Aのような差は認められない。

C 長岡関係当用漢字の書き取り

		100% ~90%	~80%	~70%	~60%	~50%	~40%	~30%	~20%	~10%	~0%	備考
中 学	長岡 2校	観	俵厚	殿降			互			穀		観光院 町 米百俵 殿町
	東京 1校			観	厚		俵	穀殿 降	互			
高 校	長岡 3校	殿降互 厚観	俵		穀							降雪 互尊文 庫 穀物
	東京 1校	厚観殿 降互				穀	俵					
	山形 1校	厚観降 互殿	穀俵									

- 中学校においては「穀」を除いて、長岡の方がよい。
- 高校において、「穀」「俵」は、東京のできがわるい。

D 一般当用漢字の書き取り

		100% ~90%	~80%	~70%	~60%	~50%	~40%	~30%	~20%	~10%	~0%	備考
中 学	長岡 2校	健	映	康	録	封		勤偉	敵	啓		
	東京 1校		映	健	康録		封	敵偉	勤	啓		

高 校	長岡 3校	健映 偉	康封	敵録 啓	勤						
	東京 1校	健映 封偉	康録	敵	啓	勤					
	山形 1校	健敵封 啓映偉	康	勤録							

- 。中学校においては、長岡の方が多少よいが、Cのような違いはみとめられない。
- 。高校においては、山形が多少よいが、長岡・東京は、ほぼ同じくらいである。

E 長岡関係表外字の読み

		100% ~90%	~80%	~70%	~60%	~50%	~40%	~30%	~20%	~10%	~0%	備考
中 学	長岡 2校	嵐柏 柿醬	笹噌	悠		雁	醸			紺		五十嵐 柏崎 醸造 笹飴 悠久山 雁木
	東京 1校	嵐柿	笹柏	醬	噌			醸雁		紺	悠	
高 校	長岡 3校	嵐柿醬 柏噌笹 悠	雁醸				紺					
	東京 1校	嵐笹柏 柿噌醬		醸	悠紺				雁			
	山形 1校	嵐笹柏 柿噌醬	醸	悠	紺		雁					

- 。中学では、醸造関係および「雁」「悠」において長岡がよい。
- 。高校では、「雁」「悠」において長岡がよい。

F 一般表外字の読み

		100% ~90%	~80%	~70%	~60%	~50%	~40%	~30%	~20%	~10%	~0%	備考
中 学	長岡 2校	靴	霰涯	頁	戾	披箋	挨拶			禱	糰	
	東京 1校	靴	涯	頁霰		披箋戾			挨拶	禱	糰	
高 校	長岡 3校	涯霰頁 箋戾挨 拶靴披		禱					糰			
	東京 1校	靴箋涯 戾披挨 拶霰頁		禱						糰		
	山形 1校	箋頁涯 挨拶霰 靴戾披		禱					糰			

- 。高校生は、表字外が相当読める。
- 。Eのような地域差は認められない。

G 何からおぼえたか（全体の人数に対する％）

			1 学教科 校書で	2 教外 科の本	3 新 聞	4 テ レ ビ	5 映 画	6 ポ ン ス タ 1 板	7 チ ラ ン 告	8 手 紙 な ど	9 品 名	10 地 名	11 人 名	12 会 話 で の	13 そのもの と関 係ある 場所	14 い わ か ら な
柿 (柿の種)	中 学	長岡 2 校	8%	1	1	24	1	9	17	1	33	0	0	1	3	1
		東京 1 校	19	21	4	0	0	0	2	0	19	0	0	10	8	2
	高 校	長岡 3 校	16	5	1	8	1	7	21	0	20	0	0	2	4	2
		東京 1 校	35	12	2	0	2	8	0	0	2	0	0	4	14	12
		山形 1 校	38	20	0	0	4	6	0	0	0	0	0	8	6	4
涯 (生涯)	中 学	長岡 2 校	24	34	2	4	9	1	1	0	1	0	0	3	0	2
		東京 1 校	44	17	2	4	13	0	0	0	0	0	0	2	0	0
	高 校	長岡 3 校	40	26	2	0	7	1	1	0	0	0	0	1	0	2
		東京 1 校	42	44	4	8	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
		山形 1 校	38	44	0	2	2	2	0	0	2	0	0	0	0	0
悠 (悠然)	中 学	長岡 2 校	8	18	1	0	0	3	0	0	0	18	0	3	0	8
		東京 1 校	10	6	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
	高 校	長岡 3 校	20	18	1	0	0	2	1	0	0	21	3	0	0	6
		東京 1 校	44	17	0	0	2	0	0	0	0	0	12	0	0	2
		山形 1 校	48	14	0	0	0	0	0	0	0	0	8	0	0	4

。「柿」「悠」については、中高に共通な長岡の特徴が見られる。

(4) 考 察

- (i) 総体的に地域の文字環境・文字刺戟は、中学生には目立っているが、高校生には目立たない。
- (ii) 一般的読書・知識・教養などから得られる文字は、，中学生でも、地域環境の特殊性が目立たない。
- (iii) 高校生でも、使用度が低く、特殊な文字では、やはり地域性が認められる。
- (iv) 一般的な地域環境とともに、めいめいの興味・関心、生活上の親近性などが習得要因として強く、とくに男女差なども、その一つの現われである。
- (v) 表外字の読みが、相当高いのに比べると、書くほうは低い。また正確に書くということについて、居住地の新潟県の「潟」の字など、正しい字形という観点からは高校生でもあまり書けていない。
- (vi) 教育漢字（かき）・当用漢字（よみかき）でも、使用度が低く親近性の少な

い文字には、地域の影響をうけているものがある。

——以上 (i) ～(vi)は、国語教育研究室プリント「文字習得要因調査」(38.3 .18)より転写——

3. 「新潟」の「潟」の字の書き方

——通用字体とその習得過程に関して——

(1) 問題点 前節でのべた表外字の書き取りにおいて、「潟」の字の正答が意外に少ないので、これの誤答の分析を行ない、あわせて、基礎調査の住所に書かれた成人の「潟」の書き方を分析した。(分析は国語教育研究室)

(2) 層別に見た「潟」の字の書きかたの大体

注 { 生徒には「潟」がない
成人には「潟」が多いが「潟」として扱った。

			潟	潟	潟	上 × 下 ○	上 ○ 下 ×	上 × 下 ×	「シ」 なし	「形」 の字	判 別 困 難	無 答
学 校 生 徒	中 学	長岡2校	18%	2	13	24	10	31	1	0	0	2
		東京1校	8	0	0	4	2	48	2	4	0	31
	高 校	長岡3校	30	10	5	30	5	20	0	0	0	0
		東京1校	6	0	0	14	19	48	0	0	0	14
		山形1校	30	0	2	10	16	42	0	0	0	0
一 般 成 人	年 令 別	16～23才	21	16	25	19	4	5	0	0	3	8
		24～29才	10	29	18	24	1	3	0	0	5	11
		30～34才	7	34	17	25	0	1	0	0	6	10
		35～44才	7	32	22	22	0	3	0	0	3	11
		45～54才	9	13	30	25	2	1	0	0	4	16
		55～70才	10	24	24	23	1	1	1	0	5	14
	学 歴 別	義務教育	7.9	19.4	22.5	26.6	1.3	3.2	0.4	0	4.7	14.1
		旧中・高	9.9	24.5	19.4	15.1	1.3	1.5	0	0	4.4	8.7
		新大・高専	22.2	29.1	25.6	18.8	0	0	0	0	2.7	5.7
	成人計		10.5	24.7	22.7	22.2	1.2	2.5	0.2	0	3.9	12.0

上×下○の例 潟 潟 潟 潟 潟 潟 潟

上○下×の例 鴻 鴻 鴻

上×下×の例 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯 湯

学校生徒について

- 中学・高校生ともに正しく書ける率は低い。
- 東京の生徒は、中・高生ともに、長岡および山形より低い。無答や「形」の字も目立つ。
- 長岡の場合、高校生は中学生よりも正しく書く率が高い。
- 「上○下×」と「上×下×」の間に線をひくと、長岡の優位が目立つ。

成人について

- 成人の正しく書ける率は、高校生・中学生よりも低い。
- 成人の中の各層の間では、低年層（未成年を含む）、および大学・高専卒の正しく書ける率が高い。しかしこれも高校生より低い。
- 「上×下○」と「上○下×」の間に線をひくと、大多数が線の左にくる。これは学校生徒と異なる点である。（注：成人の無答は、調査票の住所欄に「長岡市」から書き始めたものであり、書き取り検査で書けなかった学校生徒とは質的に異なる）
- 「鴻」と「淳」が多いのが、成人の特徴である。

(3) 考 察

- 学校生徒が「鴻」の字を正しく書けない理由としては、次の二つが考えられる。
 - 表外字であるから、学校で書き方を習わない。
 - ふつう「長岡市」で通用するので、「新潟県」という語をあまり書かない。
- しかし、常に見る文字であるので、大体の形はとれる。そのことが、上にのべた東京の生徒との違いとなって現れている。
- 成人の場合、「鴻」が少なかった理由としては、次の二つが考えられる。
 - 書き取りテストという場面でなく、日常の書く生活の中で書かれたので、略体を用いたのであり、もし、これが書き取り検査ならば「鴻」がもっとふえたのではないか。
 - 当用漢字制定後、当用漢字については、新字体が正体であるので、類推により、略体である「鴻」「淳」を正体のように用いるのではないか。
- 最年少成人を除けば、さして年令差がないのは、以前から「鴻」「淳」が通用体として流布していたのかもしれない。これはさらに調査することが可能である。
- 学校生徒と成人との違いは、通用字体の習得過程を示すものである可能性が強く、今後の研究を要する。

4. 読み書き生活とことばの変容

(1) 問題と方法

一般市民として新聞・雑誌などを読んだり、手紙をやりとりしたり、職業として文字にふれたりすることが、文字づかいとどのように関係しているかを見るために、面接調査、基礎調査、環境調査（林大、齋賀秀夫所員担当）から、必要な事項をぬ

き出してしらべてみた。

(2) 読み書き生活の状況(注:合計100%にならないのは、不明のものがあるから)

A ふだん新聞を読むか

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
読む	83%	94	95	90	92	84	90	90
ときどき読む	13	6	5	5	8	16	9	0
読まない	2	0	0	4	0	0	1	10

B きょう新聞を読んだか

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
読んだ	65%	79	73	68	82	90	75	55
読まなかった	35	21	27	32	18	11	25	35

○BはAより低いが、それでもかなり読んでいる。

○Bは高年令層が高く、最低年令層は、ABともに低い。

C 何分ぐらい読んだか(Bで読んだ人のみ)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
10分以内	56%	41	32	17	38	17	32	46
20分以内	19	27	42	41	29	44	34	18
30分以内	16	14	12	13	18	2	12	27
30分をこえる	9	19	14	30	15	33	21	9

○2/3ぐらいは20分以内である。

○20代までの人は、読む時間が比較的少ない。

D 週刊誌を読むか

		15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉	義務教育	旧中高	大学高専
全	読む	39%	31	43	38	9	12	29	15	24	34	42
	ときどき読む	45	48	24	24	49	29	36	40	34	38	34
	読まない	17	22	33	38	42	59	35	45	42	28	24
男子	読む	27	13	32	52	11	13	27	11	22	28	45
	ときどき読む	54	58	28	19	33	42	36	56	37	38	33
	読まない	19	29	40	29	56	45	37	33	41	35	22

女	読む	48	44	53	25	5	11	31	18	25	38	32
	ときどき読む	38	40	20	30	69	9	35	27	31	39	37
	ほとんど読まない	15	16	28	46	26	80	34	55	44	23	31

- ・若い人はかなり読み、年をとった人はあまり読まない。
- ・この傾向は、男子より女子においていちじるしい。
- ・学歴の高いものほどよく読む。

E 雑誌を読むか

		15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才	計	栖吉	義務 教育	旧中 新高	大学 高専
全	読む	49%	52	58	33	21	20	38	30	24	51	66
	ときどき読む	10	11	8	11	11	5	10	15	7	12	11
	ほとんど読まない	41	37	32	56	68	70	52	55	67	36	23
男	読む	38	34	33	36	23	15	30	0	17	37	69
	ときどき読む	15	0	11	11	16	8	11	22	10	12	12
	ほとんど読まない	48	67	51	53	61	69	57	78	71	49	19
女	読む	57	65	80	30	18	29	45	55	31	61	58
	ときどき読む	6	20	6	10	4	0	8	9	5	12	5
	ほとんど読まない	36	15	14	60	78	71	47	36	64	27	37

- ・週刊誌にくらべて「ときどき読む」と答えた人が少ない。
- ・大学高専卒をのぞけば、女子の方が男子よりよく読む。
- ・男子においては、学歴差が年齢差よりきいている。

F 個人的な用事で手紙が月にどのくらい来るか

		15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才	計	栖吉	義務 教育	旧中 新高	大学 高専
全	0 通	25%	25	21	26	14	17	22	40	26	20	3
	1～5	68	71	73	63	75	52	67	55	67	70	58
	6～	6	4	5	9	11	26	10	5	6	10	38
男	0	40	26	39	14	11	20	23	44	24	29	2
	1～5	55	71	50	77	72	41	62	56	63	63	55
	6～	5	3	11	9	17	38	15	0	12	8	43

女子	0	14	25	5	39	17	13	21	36	28	13	11
	1～5	78	70	95	50	78	69	71	55	69	74	68
	6～	8	5	0	8	5	7	6	9	0	12	21

G 個人的な用事で手紙を月にどのくらい出すか

		15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才	計	栖吉	義務 教育	旧中 新高	大学 高専
全 体	0 通	25%	23	31	29	18	17	24	45	31	19	4
	1～5	62	71	67	65	77	58	66	55	61	74	63
	6～	12	2	2	5	6	21	8	0	5	7	33
男 子	0	36	19	44	19	25	12	25	44	29	27	1
	1～5	49	77	51	75	65	58	63	56	61	67	63
	6～	15	3	5	6	10	30	12	0	10	6	36
女 子	0	17	25	18	40	9	24	24	46	33	13	16
	1～5	72	65	82	55	90	57	69	54	62	78	63
	6	11	0	0	3	1	7	4	0	0	17	21

- 月に1～5通の手紙をやりとりする人が最も多い。
- 男子については、手紙のやりとりは年齢が高くなるほどふえる。
- 女子については、年齢によって、それほど変らない。
- 低い年齢層では女子は男子よりも手紙のやりとりがはげしく、高い年齢層ではその逆である。
- 学歴が高いほど手紙のやりとりが多い。この傾向は男子において特にいちじるしい。
- 20代までの年齢層では、男子の方が多く手紙を出し、女子の方が多く手紙を受けるという傾向が、わずかながらみられる。

H 家庭におくられてきた郵便物の個人別統計（環境調査より）

——東北中91人の生徒の家庭へ1週間（37.10.23～29）におくられてきたと報告されたもの——

あて名	父	母	祖父	祖母	兄	姉	おじ おば	自分	弟妹	その他	計
全体	人数 51人	26	3	3	9	11	2	13	2	2	122
	回数 144通	39	10	5	13	21	2	13	2	2	251
手書き	人数 33人	25	1	3	6	9		9		1	87
	回数 78通	33	1	4	9	16		9		1	151

I 面接調査と基礎調査との関係
 ——手紙を何通出すかについて——

面接	基礎	0 通	1~5通	6 通 ~	計
0	通	29	18	0	47
1 ~ 5 通		22	149	20	191
6 通 ~		1	21	19	41
計		52	188	39	279

(どちらかでも無答のものは
 除く)

{ 完全一致…… 197
 1 段違い…… 81
 2 段違い…… 1

(3) 読み書き生活と国語政策順応程度との関係

J 週刊誌を読む程度と新字体・新かなづかい使用度

	新 字 体 点				合 計	読不 み 方明	新 か な 点			
	36~31	30~25	24~19	18~0			26~24	23~19	18~14	13~0
読 む	41	38	16	5	100	1	70	19	7	4
と き ど き	49	39	21	2	111		62	27	17	5
読 ま ぬ	28	43	15	12	98		46	19	27	6
計	118	120	52	19	309	1	178	65	51	15

。週刊誌を読まない人に新字体・新かなを使わない人が少し多い。

K 雑誌を読む程度と新字体・新かなづかい使用度

	新 字 体 点				合 計	読不 み 方明	新 か な 点			
	36~31	30~25	24~19	18~0			26~24	23~19	18~14	13~0
読 む	63	54	22	7	146	3	97	30	12	7
と き ど き	11	10	9	2	32		19	5	7	1
読 ま ぬ	43	57	21	8	129		60	29	33	7
計	117	121	52	17	307	3	176	64	52	15

。雑誌を読まない人に、新字体・新かなを使わない人が少し多い。

L 手紙を出す程度と新字体・新かなづかい使用度

	新 字 体 点				合 計	出 不 し 方明	新 か な 点			
	36~31	30~25	24~19	18~0			26~24	23~19	18~14	13~0
0 通	18	24	11	7	60		32	14	12	2

1 ～ 5 通	83	84	30	8	205	4	119	42	34	10
6 通 ～	16	11	10	4	41		24	9	5	3
計	117	119	51	19	306	4	175	65	51	15

- 手紙をあまり出さない人に、新字体を使う人がやや少ない。
- 手紙を多く出す人に新字体を使わない人がやや多い。

M 職業と新字体・新かなづかい使用度

	新 字 体 点				合 計	新 か な 点			
	36～31	30～25	24～19	18～0		26～24	23～19	18～14	13～0
企 業 経 営 者 層	1	1	1		3	1	1	1	
専 門 的 職 業 層		13	4		17	11	2	1	3
教 師	21	10	4	1	36	31	4	1	
管 理 的 職 業 層	4	3	5	2	14	2	5	5	2
小 企 業 者 層	2	12	5	1	20	7	5	6	2
専務技術的職業層	27	17	3	4	51	38	9	3	1
熟練労働者層	7	9	4	1	21	11	6	4	
半熟練労働者層	11	9	4	2	26	15	6	5	
非熟練労働者層	3	3	2		8	3	4	1	
農業従事者層	2	6	1		9	4	1	4	
家庭の主婦（商家）	2	9	3	2	16	5	8	2	1
家庭の主婦（農家）	1	5	2	4	12	3	2	6	1
家庭の主婦（一般住宅）	9	18	13	2	42	18	10	11	3
学 生	28				28	28			
無 職		5			5	1	2	1	1
分 類 不 能		1	1		2			1	1
計	118	121	52	19	310	178	65	52	15

- 職業によって種々の異なりがある。
- これらの様相は、純職業的条件・年齢的条件・学歴的条件のからみあいによって生ずるものと考えられる。

N 年齢・性別・学歴と新字体点

	15～22 才	23～28 才	29～33 才	34～43 才	44～53 才	54～69 才	計	栖 吉
全 体	34.8	30.6	27.7	26.5	26.6	26.2	29.6	27.5
男 子	34.8	30.6	29.2	27.1	26.6	25.2	28.6	29.6
女 子	34.7	29.8	26.4	25.9	26.7	27.8	30.6	25.7
義 務 教 育	34.5	29.7	29.7	27.1	26.9	25.9	30.1	27.1
旧中・新高	34.9	31.9	25.1	24.8	25.8	28.1	28.9	31.0
大学・高専	34.6	30.3	29.6	28.9	28.5	25.1	29.1	／

O 年齢・性別・学歴と新かな点

	15～22 才	23～28 才	29～33 才	34～43 才	44～53 才	54～69 才	計	栖 吉
全 体	25.6	25.0	22.8	21.5	19.9	16.6	21.8	19.6
男 子	25.5	24.9	24.0	21.9	20.6	16.4	21.9	19.8
女 子	25.7	25.2	21.7	21.1	19.1	16.9	21.8	19.4
義 務 教 育	26.0	25.1	22.0	21.5	20.2	16.3	21.1	19.8
旧中・新高	25.4	24.9	23.3	21.0	18.7	17.3	22.5	18.0
大学・高専	25.4	25.7	24.3	23.1	23.4	18.3	23.1	／

- 新字体点・新かな点とも年齢が低いところで高い。
- 新字体点は29～69才は大きな動きがない。
- 全体としては、新字体点は15～22才と23～28才の間に、新かな点は23～28才と29～33才の間に断層がみられる。
- この断層は、学歴が高いほど、年齢の高いところへうつっている。

(4) 考 察

- 新字体・新かなづかいは、かなり一般に使われている。
- 新字体・新かなづかいは、一般に、年齢の低い層ほど多く使われている。
- 新字体・新かなづかいは、一般に歴学の高い層ほど多く使われている。
- 新字体・新かなづかいは、週刊誌や雑誌を多く読む層ほど多く使われている。
- 新字体や新かなづかいの使われ方は、職業によってある程度の異なりがある。
- 新字体は、個人的な手紙を全然出さなかったり、またよく出したりする人よりも、月に1～5通程度出す人のほうに多く使われている。このことは注目すべき事実である。
- 婦人にあっては、一定の年齢以上では、年齢の高い人のほうがむしろ多く新字体を使う傾向がある。このことは母親調査との関連で解釈がなりたつ。

1.3 国語政策の影響と普及の経路（永野）

1. 目的と対象

- ① ねらい……当用漢字・現代かなづかい（関連して新しい送りがな）が、個々人の読み書き生活に、どんな影響を、どの程度に与えたか、また、どんな人に、どんな条件で作用したか、を調べる。

② 課 題

- (1) 国語政策について、どれくらいの知識・関心をもっているか。
- (2) 国語政策について、どんな意見をもっているか。
- (3) 国語政策の方向にどれくらい同調しているか。
- (4) 普及の経路・原因・条件はどうか。

③ 国語政策の細目

(1) 当用漢字

- (a) 漢字制限・書きかえ………（例）「頃」「挨拶」は使えない。「颱風」は「台風」と書く。
- (b) 音訓制限………（例）「家」は「うち」と読まない。「今日」「煙草」はかながきにする。
- (c) 新字体………（例）「學」→「学」
- (d) 人名漢字………戸籍法第50条による漢字の制限

(2) 現代かなづかい

(3) 送りがなのつけ方

④ 調査対象

- | | | |
|-------------|-------------------------|-------|
| (1) 面接調査 | 一般市民 | 310名 |
| (2) 母親調査 | 母 親 | 243名 |
| (3) 会社員調査 | 会社員・工場従業員 | 1 98名 |
| (4) 対 照 調 査 | { 母親（東京） 117名 | |
| (1963年度） | { 会社員・工場従業員（東京・岩国） 130名 | |

2. 国語政策についての知識・関心・意見

—面接調査の質問と集計結果—

- (1) 今、新聞や教科書では「学校」とか「三条」とか書いてありますが、昔は「學校」とか「三條」とか書いてありました。このことを、ご存じですか。

・「知っている」と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖 吉
義務教育	100	100	90	90	75	75	86	80
旧中・新高	94	86	100	89	94	63	91	
大学・高専	100	86	88	97	100	100	96	
全 体	96	94	94	90	83	74	89	

- ・ たいいていの人知っている。
- ・ 知らないのは、学歴が低いほうの、年齢の高い層である。

(2) 今は、新聞や教科書では「アイサツ」を「あいさつ」とひらがなで書いています。

昔はこれを「挨拶」という漢字で書いたものです。このように、今は、新聞や教科書などではこの漢字は使うとか、この漢字は使わないとかいうふうに、使う漢字の範囲をきめています、このことをご存じですか。

・ 「知っている」と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖 吉
義務教育	0	40	50	75	50	63	53	30
旧中・新高	65	86	78	59	71	50	68	
大学・高専	100	71	94	94	100	100	95	
全 体	46	59	66	72	60	63	62	

- ・ 全体としては、29～43才の中堅層が、比較的知っている。
 - ・ 学歴の高いほど、一般によく知っている。
 - ・ 最も知らないのは、学歴の低い、若い層（戦後の教育を受けた人たち）である。
- （注）学歴の低い層では、すべての年齢を通じて、女の方が知らない。

(3) その漢字の表を何というか、ご存じですか。(2)の問いに対して「知っている」と答えた人だけにたずねた)

・ 答えの類別(%)

	義務教育	旧中・新高	大学・高専	計	栖 吉	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才
当 用 漢 字	41	73	78	59	67	78	77	78	56	47	26
制 限 漢 字	0	3	8	2	0	5	0	6	0	2	1
新 漢 字	2	3	3	2	0	0	0	4	6	1	1

知 そ	ら の	い 他	57	23	12	37	33	17	24	12	39	50	72
--------	--------	--------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

- 「当用漢字」の名称を半数以上が知っている。
- 学歴が高く、年齢が低いほどよく知っている。

(4) (新かなづかいと旧かなづかいと並べて書いたものを見せて)，こちらは、いまの新聞や教科書で使っているかなの使い方で，こちらは戦争前の使い方ですが，昔と今で，このようにかなの使い方がちがっていることをご存じですか。

- ・ 「知っている」と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖 吉
義 務 教 育	100	90	80	80	69	75	80	55
旧中・新高	94	93	94	78	100	88	91	
大学・高専	100	100	100	94	100	100	98	
全 体	96	92	88	81	81	79	86	

- 大体よく知っている。
- 大学・高専，旧中・新高の学歴層は，ほとんどが知っている。
- 義務教育の学歴層では，年齢の高いほうに知らない人が幾分いる。

(5) 昔のかなづかいを何と言うか，ご存じですか。(4)の問いに対して「知っている」と答えた人だけにたずねた)

- ・ 答えの類別(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
歴史的かなづかい	0	3	9	2	0	6	1	1	2	1	0
旧かな(づかい)	19	39	68	31	0	32	49	40	24	20	33
知 そ ら の い 他	81	59	25	67	100	65	51	60	76	79	67

- 全体として名称はあまり知らない。
- 「歴史的かなづかい」という名称は，ほとんど知らない。
- 「旧かな(づかい)」の名称を知っている人は3分の1以下である。
- 学歴の高い層ほど知っている。
- 年齢差はあまりない。

(6) 今のかなづかいは？(同上)

- ・ 答えの類別(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
現代かなづかい	0	11	15	6	0	16	3	5	3	2	1
新かな(づかい)	38	47	72	44	27	31	74	53	45	34	38
知らない その他	63	42	15	50	73	53	23	42	52	64	62

- 「現代かなづかい」という名称は、ほとんど知っていない。
- 「新かな(づかい)」の名称とあわせて知っている人は半数である。
- どちらの名称も、学歴の高いほうが知っている。
- 年齢差は、目立った傾向が見いだせない。

(7) 戦争前と戦争後と比べて、ことばや文字がずいぶん変わったということが言われますが、昔と今と比べてどちらがいいとお考えですか。

- ・ 答えの類別(%)

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
今がよい	69	75	76	72	85	62	74	74	77	63	82
昔がよい	9	4	4	7	0	2	0	1	13	6	11
どちらともいえない。 わからない	13	10	12	12	0	6	9	20	7	25	5
どちらもよい	10	10	8	10	15	30	17	5	3	6	1

- 「今がよい」が多い。
- 「昔がよい」は少なく、1割に達しない。
- 「今がよい」の意見には、学歴差も年齢差もあまりない。
- 「昔がよい」の意見は、若い層にはほとんどなく、年齢の高いほうに、幾分ある。また、学歴の低い層に少しある。

(8) 戦争後になって、名前に使える漢字の範囲が制限されていることを知っていましたか。

- ・ 「知っていた」と答えた人(%)

	15～22才	23～28才	29～33才	34～43才	44～53才	54～69才	計	栖吉
義務教育	13	40	80	85	56	31	55	55
旧中・新高	29	64	78	85	59	63	60	
大学・高専	78	100	100	94	85	92	92	
全体	26	52	81	86	59	41	60	

- 全体として、学歴の高い層がよく知っているが、他の質問と比べて、年齢による反

応のちがいが特徴的である。

- ・旧中新高、義務教育の学歴層では、（29～43才）の年齢層がよく知っている。
- ・大学・高専の学歴層では、最も若い年齢層に知らない人が幾分いる。
- ・子どもの名づけの必要性にせまられて知った人が多いと考察される。

(9) 名前に使える漢字の範囲が、きまっていることについて、どう思いますか。

・ 答えの類別（％）

	義務 教育	旧中 新高	大学 高専	計	栖吉	15～ 22才	23～ 28才	29～ 33才	34～ 43才	44～ 53才	54～ 69才
きまっているほう がよい	40	50	60	45	45	34	43	52	57	44	37
きまっているのは わるい	14	13	13	13	5	4	11	14	18	17	13
どちらともいえない・ わからない	46	37	27	41	50	63	46	34	25	39	49

- ・「わるい」の意見は少ない。
- ・「よい」と「どちらともいえない・わからない」はほぼ同数である。
- ・（29～43才）の年齢層の人には「どちらともいえない・わからない」が少なく、意見のはっきりしている人が多くなっている。
- ・「わるい」の意見には、学歴差はない。
- ・学歴の高いほど「よい」の意見が多い。
- ・学歴の低いほど「どちらともいえない・わからない」が多い。

3. 国語政策への同調の度合いと性質・経路

(1) 新字体を使うか、旧字体を使うかを、反省により答えてもらった。

方 法

- ・母親調査・会社員調査……………新字体・旧字体を含む語を並べて印刷し、「昔習ったと思うもの」「今使っているもの」にするしをつけてもらった。……………母親・225字、会社員・18字。
- ・面接調査……………上と同じようにして、「ここに並べて書いてあるもののうちで、どちらが読みやすいですか。また、あなたが書くとしたら、ふつう、どちらの書き方をしますか。」と質問し、口頭で答えてもらった。……………18字

○新字体の類型

- 1 点画の方向・長さの変ったもの 半 羽 冬 内 妹 勇
- 2 点画の省略されたもの 都 徳 隠
- 3 画の交差の変ったもの 告 急 負 呉
- 4 画の併合または分離したもの 研 冊 儉 亜 免
- 5 組み立ての変ったもの 黙 勲 （4にもはいる）

- 6 部分の省略されたもの 応 点 虫
 7 部分が簡略化されたもの 広 転 星 真
 8 全体が簡略化されたもの 旧 万 円 欠
 9 簡略俗体（略字・草体等） 取 付
 * 異体の統一されたもの 姉 衛

A 母親調査・類型別集計（調査した全漢字 225 字につき、実数で掲げる。総人数は 237 名。

「古—古」は「古いほうを習い、古いほうを使っている」, 「^古新—新」は「両方習い、新しいほうを使っている」の略。

他も、これに準ずる。「新—古」「^古新—古」その他の組み合わせのものもあるが、ほとんどが少数なので省略した)

1 点画の方向・長さの変わったもの

	古—古	古—新	^古 新—新	新—新
船 頭	112	57	15	30
希 望	107	40	8	45
聖 人	98	56	10	40
包 む	94	25	1	65
録 音	90	66	17	42
新 緑	89	68	11	46
博 士	84	38	8	78
東京港	65	23	4	61
輪 入	35	101	19	61
空 虚	26	101	21	61
述べる	83	94	10	19
被 害	7	21	8	176
憲 法	4	32	10	170
率いる	12	32	5	162
校 内	15	45	14	149
出 納	17	51	19	128
晴 天	12	73	29	102
習 字	41	44	14	102
耕 作	24	75	20	100
教 育	29	49	23	84
日 曜	51	64	14	80

裁 判	45	44	15	79
弱 い	35	65	19	74
羽 根	40	52	25	73

2 点画の省略されたもの

	古—古	古—新	^古 新—新	新—新
突 く	157	37	0	5
謹賀新年	159	25	1	11
歳 暮	154	41	4	3
涙	146	55	6	13
道 徳	130	68	5	18
頼 む	128	50	8	22
漢 字	127	58	5	22
歴 史	119	69	8	13
著 作	117	52	4	21
収 入	115	65	7	10
諸 兄	107	70	8	33
山 脈	103	51	3	51
暑 い	101	69	9	26
食 器	96	68	7	42
種 類	96	72	4	41
新 派	94	40	4	55
拔 く	94	56	2	58
記 者	90	78	7	36

山 奥	89	78	10	42
徴 集	49	102	13	50
穀 物	17	101	11	79
横 顔	5	47	11	148
黄 色	6	61	12	140
盗 む	25	47	7	121

3 画の交差の変わったもの

	古一古	古一新	古一新	新一新
急 行	121	58	7	21
告げる	7	21	3	178
認める	4	29	7	171
清潔	55	38	7	110
呉 服	54	42	10	102
誤 る	71	39	4	86

4 画の併合または分離したもの

	古一古	古一新	古一新	新一新
狭 い	161	42	3	3
従 う	144	50	9	8
帯	134	72	6	3
一 冊 ²⁵	79	79	16	15
毎 日	12	170	28	9
海 岸	21	158	38	9
様	9	158	32	13
危 険	18	157	45	3
毒 物	14	153	26	26
悪 人	5	149	48	20
千 両	25	148	39	11
試 験	30	148	40	3
検 査	25	145	55	1
来 る	41	139	20	16
焼 く	60	115	35	5
乗 る	27	113	25	42
黒 い	31	98	29	62
増 加	3	94	44	84

届ける	46	93	2	59
練 る	63	90	19	31
沈黙・	30	87	26	71
勲章・	35	85	25	65
一 冊 [*]	79	79	16	15
並 木	0	22	15	165
温 度	9	59	22	127
研 究	2	83	17	121
贈り物	7	85	32	92

* 印は重出。

・ 印は類型 5 の字でもある。

6 部分の省略されたもの

	古一古	古一新	古一新	新一新
恵 み	138	71	2	2
射 撃	132	71	7	9
随 筆	132	57	8	9
蔵王町	120	88	11	4
専 門	115	92	8	6
芸 人	1	150	73	5
公 団	4	147	66	5
展 覧	32	147	29	14
医 院	2	145	79	3
処 分	8	144	67	2
応 接	9	142	63	3
価 格	48	140	29	0
圧 力	1	137	70	16
泣き声	2	134	93	1
号 外	0	133	88	5
独 得	4	133	77	9
予 算	1	133	77	18
壘 店	49	129	43	2
余 り	4	128	83	8
式 千	41	121	49	4
点 字	0	118	92	18
聴 取	49	116	17	33
虫 ^い ばし	0	114	107	7

生糸	4	114	100	5
五糸	70	100	29	1

7 部分が簡略化されたもの

	古一古	古一新	古新	新一新
お嬢さん	153	37	1	3
行為	143	56	7	5
一塁手	127	67	6	0
謡曲	123	54	18	8
翻る	111	95	3	0
遊戯	108	66	16	13
寝る	103	65	8	12
織細	102	78	10	8
鶏	100	93	15	14
拝見	99	83	18	9
破壊	96	90	9	16
争う	96	71	12	12
静岡	96	54	17	22
遅刻*	92	92	6	14
掲示	87	84	8	22
覚悟	3	176	51	1
拳手	9	168	44	5
労力	4	167	49	7
栄養	8	163	45	8
営業	4	163	59	3
読む	9	160	53	0
続く	8	159	58	1
経過	5	158	51	9
拡大	3	158	62	4
浅い	4	157	58	5
菜屋	30	156	30	9
自転車	8	155	62	3
名称	16	154	49	4
鳥の巢	38	153	26	3
発明	3	153	73	5
絵筆	1	152	74	3
監視	4	151	56	5
帰る	16	150	52	1
空気	2	150	71	3

中野駅	4	149	69	6
対立	7	149	65	3
変化	2	148	72	5
会社	1	148	75	6
実物	2	147	77	6
東京湾	2	146	61	13
参加	2	146	47	12
児童	22	146	36	9
伝記	12	146	66	1
売る	16	146	58	0
宝物	0	146	77	5
音楽	27	145	42	3
軽い	17	145	49	7
切断	0	145	62	17
解釈	16	144	54	7
鉦山	2	144	77	3
炉ばた	12	143	57	6
金銭	2	143	76	2
小麦	15	142	65	4
淹つば	13	141	65	2
国語	2	139	77	2
済む	2	138	68	19
勧誘	36	138	31	8
乱れる	0	137	68	19
政党	1	137	58	30
囲む	24	137	56	4
残る	3	137	74	16
仮定	37	137	42	5
金歯	16	136	59	9
戦車	50	135	33	1
図工	5	135	74	14
大仏	25	135	54	1
当番	2	132	86	4
桜	15	131	68	2
所属	14	131	52	17
鉄道	0	131	98	3
辞典	0	130	78	16
渋谷	56	130	28	3
碎く	50	129	31	8
浜	5	128	82	4

証明	10	128	62	10
頭脳	43	126	28	13
渡辺	0	126	92	6
欽迎	31	126	42	18
数える	7	126	81	14
満月	44	126	26	16
お札	1	125	87	2
大関	0	125	80	27
権利	36	124	33	20
単語	60	124	37	1
雑誌	56	124	35	1
宅千	24	122	60	3
観客	40	121	37	18
厳重	70	118	19	8
献金	6	115	58	46
湿度	79	103	25	7
総長	59	102	38	8
状態	92	101	10	1
昼間	77	100	34	2
幽霊	91	98	17	4
真夏	82	94	28	6
遅刻 [*]	92	92	6	14
闘牛	53	91	9	43
豊作	0	88	61	75
機牲	0	34	12	174
節分	0	35	12	173
賛成	2	86	21	117

*は重出。

8 全体が簡略化されたもの

	古一古	古一新	古一新	新一新
尽きる	120	75	17	0
弁護士	16	153	47	2
汽車弁	20	151	45	5
写す	6	150	69	2
与える	5	149	70	2
養蚕	7	136	74	9
旧式	2	134	80	9

米寿	32	131	51	7
百万人	0	126	94	2
双方	3	126	63	30
画伯	4	119	88	11
山岳	2	116	84	22
百円	0	111	104	5
ふみ台	0	110	88	29
欠席	1	103	89	33
食塩	0	79	71	78
体操	1	71	102	53

*異体の統一されたもの

	古一古	古一新	古一新	新一新
守衛	9	34	16	158
秘密	17	40	19	132
強い	43	54	19	72

○古い字体が使われている漢字は、概して点画の省略・画の併合・部分の省略・部分の簡略などのうち、主として戦後新しく作られた字体である。

○古いほうを習い、新しい字体を使うとされている漢字は、概して、昔から略字・筆写体として教えられ、通用していたものが多い。また、これらの字は、両方習ったとする人が割合にある。

○以前明朝体と教科書体・筆写体とでちがっていたものは後者を習ったとする人が多い。

B 会社員調査・類型別集計（18字，数値その他，母親と同じ）

類型		古一古	古一新	古一新	新一新
2	頼む収入	120	26	3	31
		81	37	8	43
4	検査温度	15	97	29	44
		5	32	14	124

6	価 格 応 接 専 門	8	100	26	45
		7	97	29	46
		58	60	15	47
7	当 番 実 物 湿 度 参 加 証 明 遅 刻 権 利 掲 示 拝 見	4	102	30	45
		6	100	34	44
		22	93	16	48
		9	88	26	54
		6	80	36	53
		36	77	7	58
		14	77	18	73
		59	63	11	43
8	欠 席	0	83	28	70
*	守 衛	5	20	7	139

○全般的に母親調査と似た反応を示しているが、「専門」「遅刻」「掲示」「拝見」などは、新字体への傾きが大きくなっており、全体として（新一新）の比率がふえている。

C 面接調査・集計（18字，新字体と旧字体でどちらが読みやすいか，また，どちらを使うか。％）

類型		新字体のほう が読みやすい	新字体を使 う
1	青 年	77	82
2	東 京 都	50	68
4	一 郎 様	71	84
6	医 院	88	98
	新 潟 県	79	86
	量	67	76
	三 条 市	45	47
	蔵 王 町	33	39
7	長 岡 駅	91	97
	中村商会	90	96
	新発田市	88	92
	営 業 所	84	91
	学 校	89	90
	自 転 車	80	89
	観光院町	78	83
	真 夏 静 岡	53 45	57 50
8	百 万 人	81	93

○全般として，母親調査と似た傾向を示している。

○「読みやすい」の％よりも，「使う」の％のほうに大きい。

D 母親調査・層別集計 ①「新字体を使うか，・旧字体を使うか」（225字全体について被調査者全員の傾向，％）

		両方使う	新を使う	旧を使う	不 明
27—33才	義務教育	2	65	18	15
	旧女・新高	1	75	21	3
小 計		2	72	20	6
34—43才	義務教育	1	72	21	7
	旧女・新高	2	73	21	4
	大学・高専	1	77	21	1

小 計		1	73	21	4
44—55才	義務教育	0	62	10	28
	旧女・新高	1	75	18	5
	大学・高専	2	81	17	1
小 計		1	73	16	10
義務教育 旧女・新高 大学・高専	義務教育	1	69	19	11
	旧女・新高	2	74	21	4
	大学・高専	1	78	20	1
全 体		1	73	20	5
長子が小学3 年以下の人	義務教育	2	62	20	16
	旧女・新高	2	74	22	3
	大学・高専	1	72	27	0
小 計		2	70	22	7

- 新字体を使う度合いには、年齢差はほとんどない。
- 旧字体を使う度合いは、（44—55才）の年齢層で少なくなっている。
- 学歴の高い層ほど、新字体を使う傾向がある。
- 長子の学年の低い層のほうが、新字体を使う度合いが少なく、旧字体を使う度合いが多くなっている。

E 母親調査・層別集計②「新字体を使うか、旧字体を使うか」

（会社員調査と共通の18字について、％）

		両方使う	新を使う	旧を使う	不 明
27—33才	義務教育	0	66	18	16
	旧女・新高	2	75	21	2
小 計		1	72	20	6
34—43才	義務教育	1	68	25	6
	旧女・新高	2	70	23	5
	大学・高専	1	71	26	2
小 計		2	69	25	5
44—55才	義務教育	0	61	10	29
	旧女・新高	1	69	24	6
	大学・高専	2	75	22	1
小 計		1	70	21	7

義 務 教 育	1	67	22	11
旧 女 ・ 新 高	2	71	23	4
大 学 ・ 高 専	1	72	25	1
全 体	2	70	23	5

○225字と比べると、34才以上で、新字体が幾分減り、旧字体が幾分ふえている。
(文字の種類によると思われる。)

F 会社員調査・層別集計「新字体を使うか、旧字体を使うか」(18字、%)

		両方使う	新を使う	旧を使う	不 明
15 — 22才	義 務 教 育	0	97	2	1
	旧中・新高	2	96	2	0
	大学・高専	0	78	22	0
小 計		2	95	3	0
23 — 33才	義 務 教 育	4	76	20	0
	旧中・新高	4	81	13	3
	大学・高専	3	71	18	8
小 計		4	78	15	4
34 — 43才	義 務 教 育	1	69	26	3
	旧中・新高	2	76	21	2
	大学・高専	13	60	27	1
小 計		3	71	24	2
44 — 60才	義 務 教 育	5	72	13	10
	旧中・新高	6	73	14	8
	大学・高専	10	69	21	0
小 計		5	72	14	9
義 務 教 育		3	73	17	6
旧 中 ・ 新 高		3	82	14	2
大 学 ・ 高 専		7	67	21	4
全 体		4	77	16	4

○新字体を使うのは、年齢の低い層ほど多い。
○(15—22才)の年齢層では、ほとんどが、新字体を使い、旧字体を使う人は、高学
歴層以外ほとんどない。(この年代は、学校時代に新字体への切りかえがあった。)
○母親調査と比べると、同年齢層の間では、新字体を使うものがわずかに多く、旧字
体を使うものが幾分少なく、両方使うものが幾分ふえている。

(2) 母親調査で、聴写による書き取りをした。

ねらい——制限漢字・音訓制限字・字体・かなづかい・送りがなの使用の実態をつかむため、これらに関連のある語を多く含む文を作って出した。

問 題（上が国語政策による新しい書き方、下が古い書き方）

○わたしは、きのうの日曜日におかさんとさかな屋に買い物に行きました。

私 昨日・ふ 曜 母 魚 ひ・買物

○おとうさんのへやには明るい電燈がつき、タバコの煙がいっぱい立ちこめています。

父 部屋 明かるい 煙草 め

○きょう 漢字の読み方の宿題が出ました。先生がうちの人に手伝ってもらわずにひ

今日・けふ漢 讀 方 家 傳 貰 は 一

とりで考えましようと言いました。

人 へ せう ひ

○私は東京都の神田区で生まれましたが、小学校にはいってまもなく、おじいさんと

都 区 生れ 學 入 ち

いっしょに新潟県の三条市に疎開して参りました。それはたしか大東亜戦争が始ま

縣 條 参(まゐ) 亜戦争 始っ

ったばかりのころだったと思います。

た 頃

○暑中お見舞い申し上げます。

暑 ひ申上げ

○明けてましておめでとうございます

た

G 項目別集計①（新しいほうを書く人、古いほうを書く人、％）

制 限 漢 字				字 体				か な づ か い			
語	かな がき	漢字 がき	その 他	語	新	旧	その 他	語	新	旧	その 他
貰わずに	77	21	2	神 田 区	96	3	1	い ま す	82	5	13
頃	5	92	3	学 校	88	10	3	言 い	76	20	4
				大 東 亜	87	9	4	も ら わ ず	70	29	2
音 訓 制 限				新 潟 県	68	29	3	ま し ょ う	69	27	4
				東 京 都	60	40	0	お め で と う	52	6	42
				読 み 方	48	39	14	考 え	48	42	11
た ば こ	32	68	0	参 り	47	18	47	お じ い さ ん	44	31	25
おかあさん	13	85	3	日 曜 日	46	28	26	ま い り	35	2	63
う ち (家)	13	86	1	暑 中	43	53	4	買 い も の	9	4	87
おとうさん	9	90	0	手 伝 っ て	41	46	13	き の う	8	0	92
き の う	7	91	2	戦 争	36	60	4	お 見 舞 い	7	3	91
ひ と り	4	95	1	漢 字	17	60	24	き ょ う	3	0	97

は い っ て	5	95	1	三 条	14	86	4
き ょ う	3	96	1	戦 争	6	91	1
わ た し	4	96	0				
へ や	4	96	0				
さ か な	3	97	0				

送 り が な			
語	入 れ る	入 れ ぬ	そ の 他
明かるい	94	3	3
申し上げ	59	40	1
始まった	58	35	7
読 み 方	54	35	11
生 ま れ	35	65	1
買 い 物	12	78	9

- 制限漢字・送りがなは、字や語によって新古の傾向がちがう。
- 音訓制限には、概して非同調的である。
- かなづかいには新かなへの傾きを示している。
- 字体については、反省調査と書き取りとの一致度は、次のとおりである。（共通している9字について）。

新字体を使うと答え・新字体を書いたもの	旧	旧	63%
新	旧	旧	33
旧	新	新	4

- 著しくちがう漢字は「条・伝・争・読・戦」、比較的一致している漢字は「参・暑・漢」。「曜」はくずし字が多く判別困難。

H 項目別集計②（被調査者ひとりひとりにつき、すべての語を新しいほうで書けば＋10、すべて古いほうで書けば－10、半分新しく半分古く書けば0、のように得点を与え、層別に平均点を求めた）

		制限漢字	音訓制限	字 体	かなづかい	送りがな
27～33才	義務教育	+ 4.6	－ 6.6	－ 1.5	+ 4.4	+ 1.5
	旧女・新高	+ 2.6	－ 7.2	+ 0.8	+ 5.4	+ 1.5
小 計		+ 3.1	－ 6.8	+ 0.2	+ 4.8	+ 1.5
34～43才	義務教育	+ 3.0	－ 7.1	+ 0.3	+ 3.5	+ 0.1
	旧女・新高	+ 1.9	－ 6.7	+ 1.2	+ 5.2	+ 0.9
	大学・高専	+ 1.2	－ 6.3	+ 2.9	+ 7.7	+ 0.8
小 計		+ 2.1	－ 6.8	+ 1.2	+ 5.0	+ 0.7
44～55才	義務教育	+ 5.0	－ 7.2	－ 0.5	－ 0.3	－ 4.5
	旧女・新高	－ 1.0	－ 8.0	+ 1.5	+ 2.2	－ 0.7
	大学・高専	+ 1.1	－ 7.3	+ 5.1	+ 5.7	+ 1.3
小 計		+ 0.4	－ 7.7	+ 2.3	+ 3.0	－ 0.6

義務教育		+ 3.6	- 6.8	- 0.3	+ 3.1	+ 0.1
旧女・新高		+ 1.8	- 6.9	+ 1.1	+ 4.9	+ 0.9
大学・高専		+ 1.2	- 6.6	+ 3.7	+ 7.1	+ 1.0
全 体		+ 2.1	- 6.8	+ 1.1	+ 4.7	+ 0.7
長子が小学3 年以下の人	義務教育	+ 5.5	- 6.1	- 2.1	+ 1.6	+ 1.7
	旧女・新高	+ 1.8	- 7.5	+ 0.3	+ 5.3	+ 1.4
	大学・高専	+ 3.3	- 7.6	+ 1.2	+ 4.5	+ 1.7
小 計		+ 3.0	- 7.1	- 0.4	+ 4.2	+ 1.5

○音訓制限については、年齢差も、学歴差も、ほとんどない。

○年齢の高いほど、表外漢字を残し、新字体を使い、旧かなを使い、古い送りがなを使う。（概して古いほうを使う中で字体だけ新しいほうを使う。）

○学歴の高いほど、表外漢字が残り、新字体を使い、新かなを使い、新しい送りがなを使う。（概して新しいほうを使う中で、表外漢字だけ古い。）

○長子が小学3年以下の母親について、次のことが認められる。

Ⅰ) 表外字を使う人が少ない。（年齢層の傾向と一致する）

Ⅱ) 旧字体を用いる傾向が極端に表われる。（年齢の高いほど新字体を使うことと裏返しの関係。長子の大きいほど、新字体を用いるということは、母親が新字体を使うことに子供の影響が大きいことを考えられる。）

Ⅲ) 旧かなをより多く用いる。（旧かなは高年齢層に多いのに、若い母親が旧かなを用いるというのは、子供の影響がまだ、少ないためと考えられる。）

Ⅳ) 新しい送りがなを使う。（送りがなについては、子供の影響は少ない。）

I 母親自身が学校で覚えた漢字と子どもが学校で習っている漢字とが違っていることを知っているか。（実数）（東京）

		知っているか		(知っているものについて) いつ知ったか			
		知って いる	知らない	入 学 前	入 学 後	わからぬ	そ の 他
全 体	117	114	3	63	48	2	1
～ 3 4 才	45	45	0	32	11	1	1
3 5 ～ 4 4才	63	60	3	30	29	1	0
4 5 才 ～	9	90	0	1	8	0	0
義 務 教 育	7	7	0	1	6	0	0
旧 女 ・ 新 高	90	87	3	47	37	2	1
大 学 ・ 高 専	20	20	0	15	5	0	0
長子小1～3年	51	50	1	39	9	1	1
長子小4～6年	32	32	0	18	13	1	0

長子中1～3年	11	11	0	4	7	0	0
長子中卒以上	23	21	2	2	18	0	1

- 現在では、ほとんどの人が改革後の変化を知っている。
- 年齢の低い層ほど、子どもの入学前に知っていたものが多い。
- 学歴の高い層ほど、子どもの入学前に知っていたものが多い。
- 長子の年齢が低いほど、子どもの入学前に知っていたものが多い。

J 会社員（男子）自身が学校で覚えた漢字と子どもが学校で習っている漢字とが違っていることを知っているか（実数）（東京・岩国）

		知っているか		(知っているものについて) いつ知ったか			
		知っている	知らない	入学前	入学後	わからぬ	その他
全 体	41	38	3	21	14	1	2
～ 3 4 才	3	2	1	2	0	0	0
3 5 ～ 4 4才	23	22	1	14	6	0	2
4 5 才 ～	15	14	1	5	8	1	0
義 務 教 育	12	11	1	8	3	0	0
旧 中 ・ 新 高	7	7	0	3	3	0	1
大 学 ・ 高 専	22	20	2	10	8	1	1

（注：この調査では、学歴の低いものは、年齢の低い層に多い。）

- 年齢が低い層ほど、子どもの入学前に知っていたものが多い。
- 学歴については、母親に見られたような傾向はない。
- 同じ年齢層の母親とくらべると、子どもの入学前に知っていたものの割合がずっと大きい。このことについては、次の2つが考えられる。
 - ・男子は、子どもからより、職場で知る機会の方が多い。
 - ・男子は女子より、年をとってから子どもが学校へ行く。

4 ま と め

- (1) 漢字やかなづかいの改革のことに關しては、比較的知られている。とくに学歴の高い層では年齢にかかわらず概して知っており、学歴が低く年齢の高い層に知らない人がいる。ただし、漢字制限の事実については、戦後教育を受けた年齢層の低学歴層が知らない。
- (2) 「当用漢字」の名称は比較的知られているが、「現代かなづかい」「歴史的かなづかい」の名称はほとんど知られておらず、「新かな」「旧かな」として知られている。
- (3) 名づけ漢字の制限のことは、名づける必要にせまられた年齢層がよく知っており、それについての「よい・わるい」の意見もその層がはっきりしている。
- (4) 学歴の高い層ほど、改革を理解するものが多くなる。
- (5) 新字体は、戦前からの略体・筆写体が多く用いられ、戦後に作られた字体は相対的

に普及度が少ない。

- (6) 会社員のほうが、母親よりも新字体を使う傾向を示す。
- (7) 母親の中では、年齢の高い層ほど概して古い表記に従う中で、字体だけは新しいほうを使う傾向を示す。また、学歴の高い層ほど、表外漢字を多く使うほか、新しい表記に従う傾向を示す。
- (8) 長子が小学校4年以上の母親のほうが新字体を用いる。子どもが大きく、学歴の高い母親ほど、子どもの勉強の影響から、新字体に同調しやすいと考察される。
- (9) 会社員（男子）と母親では、母親のほうが子どもの影響を受けやすく、また、近ごろでは、子どもを通じてでなく、知識が普及しつつあるようである。

2. 実施概況

○主催 国立国語研究所・長岡市教育委員会・長岡市国語教育研究会

○日時 昭和38年10月2日（水）午後1時30分～5時15分

○会場 長岡市厚生会館ホール

○参集者 約300名

- ・新潟県内小中学校教員約250名（うち長岡市内150名）
- ・一般市民、調査対象会社関係者、長岡市役所職員、長岡市教委職員、市内高校教員、新潟大学教育学部学生、長岡商業高校生徒、報道関係者、それぞれ若干名ずつ計50名

○日 程

1. 開会のあいさつ（1.30～1.40）

長岡市教委委員長 小川清一郎

2. 報告

I 長岡市における言語調査の概要（1.40～2.10）

国立国語研究所員 永野 賢

II ことばの変容とその過程（2.10～3.15）

国立国語研究所員 高橋 太郎

III 国語政策の影響と普及の経路（3.15～4.15）

国立国語研究所員 永野 賢

3. 講演 国語科学習指導の科学化（4.15～5.00）

国立国語研究所第2部長 興水 実

4. 謝辞（5.00～5.10）

長岡市教育長 太刀川浩一郎

5. 閉会のあいさつ（5.10～5.15）

長岡市国語教育研究会長
(市立関原中学校長)

山峯 義三

(司会) 長岡市教委指導主事

田中 久直

B. 東京都内での継続調査 (永野)

1. 目的および内容

今年度は「国民各層の言語生活の実態調査」(A)として、国語政策の影響とその経路に関する部分について問題点を広げ、深めた形で、東京都内で調査研究を継続実施することとした。戦前の文字教育を受けた一般市民が、国語政策の実施後、当用漢字や現代かなづかいによって、文字生活の上でどの程度影響をうけているか、あるいはいないか、それはどのような条件によってか、ということが、調査研究の目的である。国語政策のがわからいえば、当用漢字(新字体、音訓制限、漢字制限など)や現代かなづかいや、新送りがななどの中でどんな種類のものが浸透し、どんな種類のものが浸透しないか、また、どういう人に浸透(影響)し、どういう人に浸透(影響)しないか、さらに、どういう条件で浸透するのか、つまり普及の経路はどうか、といったことについて調べようというわけである。

以上のような目的のために、次のように調査を計画した。

1. 書かせた資料による調査

小中学生の母親を集めて、書き取りを行ない、文字使用の実態をさぐる。

2. 文字意識の調査

1と同じ被調査者および、会社・工場の従業員に、新旧字体、制限漢字、制限音訓などを含む調査用紙を配布し、どれを現に使用しているかを反省記入させる。

3. 書かれた資料による調査

1と2とは、われわれの目的のために書記あるいは文字選択の行動をさせて得られる資料によるものであるが、そういう場でなく書かれた種々の資料を集めて、文字使用の実態をさぐる。

以上を次の3種の調査として実施した。(名称は仮称)

- a. 母親調査……………1・2
- b. 会社員調査………2
- c. 既成資料調査…3

2. 実 施 概 要

2. 1 母 親 調 査

- ・昭和38年7月16日(火) 武蔵野市立第1中学校……………86名
- ・ “ “ 19日(金) 渋谷区立神宮前小学校……………32名

2. 2 会 社 員 調 査 (昭和38年7～8月)

- ・ 事務員 { 伊藤忠商事株式会社……………46名
- { 岡三証券株式会社……………34名
- ・ 工 員 帝人株式会社岩国工場……………50名

2. 3 既 成 資 料 調 査

(1) 新聞投書

- ・東京P紙(昭和38年のもの)……………約 170通
- ・地方Q紙(“ ”)……………約 70通

(2) 個人の文書

- ・会社員S氏の手紙(昭和23～36年のもの)……………約 60通
- ・国会議員Y氏の日記および演説草稿
(昭和26～38年のもの)……………46点
- ・青年約20氏の文章(昭和20～21年のもの)

C. 担当者および報告書

言語効果研究室の次の3名の所員が共同で実施した。

永野 賢 高橋太郎 渡辺友左

また、この調査の結果は、37年度の長岡調査の結果と合わせて、報告書を39年度中にまとめる予定である。

国民各層の言語生活の実態調査 (B)

A 調査の目的

この調査は、昨年度に引き続き、国民各層がどのような言語生活を営んでいるか、どのような問題を持ち、どのような意識を持っているかを調べることを目的とするものである。

昨年度は、新潟県の長岡市を選んで、いろいろの年齢、学歴、職業に属する市民を抽出して、その言語生活（とくに文字言語生活）の実態と意識とを調査したが、今年度は、島根県の松江市を選んで、市民の話しことばに主眼をおきその言語生活の問題点と意識とを探ろうとした。

B 調査の計画

1. 研究担当者

この調査は、国立国語研究所全体の仕事として、特別に委員会を組織し、調査の企画・運営にあたった。委員は次のとおりである。

- 委員長 林 大 (第一研究部長)
- 委員 南不二男 (話しことば研究室)
- 〃 石綿敏雄 (書きことば研究室)
- 〃 柴田 武 (地方言語研究室)
- 〃 渡辺友左 (言語効果研究室)
- 〃 林 四郎 (近代語研究室)
- 〃 斎賀秀夫 (第三資料研究室)
- 〃 松本 昭 (第三資料研究室)

このうち、斎賀が委員会の幹事として、主たる事務処理にあたった。また、市民調査(→2・1・2)および24時間調査(→2・2・1)には、臨時に高田正治(第二資料研究室)も参加した。なお、補助者として、研究補助員宇野瑠美子が集計・整理作業に従事した。さらに、現地の調査には、国立島根大学

学生9名を、集計・整理作業には大坪富美子ほか十数名を所外アルバイトとして使った。

2. 地点の選定

地点を選定するにあたっては、前年度、長岡市を選んださいの条件をほぼ踏襲した。すなわち、

- (1) 市域・人口の点で調べやすい広さとまとまりをもっていること。
- (2) いろいろな層の被調査者が得られること。
- (3) 産業構成が日本の平均に近い都市であること。
- (4) 教育施設・PTA活動その他が文化的に一応のレベルに達していること。
- (5) 昼間人口と夜間人口の差が激しくないこと（被調査者がとらえやすい）。
- (6) 進歩的または保守的すぎない土地柄であること。
- (7) 協力が得やすいこと。

などの条件については、長岡市を選んださいの条件と同一である。ただし、長岡市の場合は、以上のほかに、「東京の経済圏外にあって、しかもあまり遠くないこと」と「言語的背景として特殊でないこと」の二条件が考慮されたが、今年度は、話しことばの調査に重点をおいたので、東京の経済圏外にあることはもちろん、言語的にも東京との間に上方をはさんだ中四国地方以西に、調査地点を求めることにした。

この結果、いくつかの中都市を候補地として検討し、最終的には、鳥取市、松江市、山口市、高松市の4都市にしぼって資料を集めた。そして、4月上旬に4都市を実施に検分した結果、松江市を調査地点と決定した。

3. 調査項目の決定

委員会は、前年度末の3月に発足し、5月末までに十数回の会合を開いて、調査事項を審議し、次のように決定した。

I 言語生活の構造に関する調査——年齢・男女・職業・学歴・居住歴などから見た市民各層の言語生活の構造の全貌をつかむ。

- (1) 一般市民が読むものには、新聞、雑誌、単行本などのほかに、どんなものがあるか。
- (2) 一般市民が書くものには、手紙などのほかに、どんなものがあるか。

- (3) 一般市民が話し聞く内容には、どんな用向きの種類があるか。
- (4) 一般市民は、ことばの生活の中で、どんな点に問題を意識しているか。
- (5) 個人が一日にどれだけ話し、聞き、書き、読むことに時間を費やしているか。

II 場面による言語の変容と意識に関する調査——市民のことばづかい（主として話しことば）が、種々の条件（相手・話題・場所など）のもとで、どのように変わるかを調べる。

- (1) 家庭の内部における言語行動が、話し手のちがひ、聞き手のちがひによってどう変わるか。また、変わらないか。
- (2) また、家庭の外ではどうか。
- (3) 人の呼び名、および呼び名の使い方が、市民の各層でどうちがっているか。
- (4) 市民各層は、東京語の敬語、松江弁の敬語に対して、どのような意識を持っているか。

なお、付带的調査として、

- (5) 手紙文の中における敬語の使い方
- (6) 外来語の浸透状況について、調べる。

III 言語環境に関する調査

(1) 市民の言語環境

- (イ) 市街地における看板・掲示等の実情
- (ロ) ラジオ・テレビ・地方新聞・広報紙・通達・チラシ広告等の実情
- (ハ) 図書館・貸本屋の図書利用状況
- (ニ) 文房具等の利用状況

(2) 市民のコミュニケーション的環境

- (イ) 市民の交通圏
- (ロ) " 商業圏
- (ハ) " 人口動態

C 調 査 の 実 施

調査は、現地の市当局とくに民政部（民政部長＝漢東種一郎氏）ならびに教育委員会（教育長＝金山千氏），および，市内の各学校・報道機関などの好意的な協力を得て，終始円滑に進められた。なお，被調査者としての市民各位の協力も，全般的にひじょうに好意的であった。

1. 準 備 調 査

7月1日から7日間にわたって，所員5名が現地を訪れ，関係方面に調査の協力を依頼する一方，つぎの準備的調査をした。

- (1) 基礎抽出の準備……市役所の市民課で住民登録表を，企画課（統計係）で国勢調査資料を借覧し，必要なものを転写した。
- (2) 松江弁の体系記述……松江市生えぬきで松江弁をよく保存していると思われる市民を調査協力者として依頼し，5日間にわたって所員2名が面接し，質問と録音を行なった。その結果，松江弁の音韻・語法の体系について一往の見通しをつけることができた。協力者は次のとおりである。

山田千代江 （52歳） 主 婦
落合 春雄 （58歳） 漁 業
原田 弘吉 （39歳） 金物商
漢東種一郎 （53歳） 松江市民政部長

- (3) 生徒調査のプレ・テスト……生徒調査（→2・1・3）の質問表を検討するために，市立四中の3年生2学級について集合調査を行なった。
- (4) 言語環境調査……市内の印刷物の配布状況や書記具使用の実情を知るために，印刷所，文房具商を訪問して，必要な聞きこみを行なった。
- (5) 交通圏調査……松江市の交通量を知るために，国鉄松江駅，一畑電鉄株式会社において，列車，電車，バスの乗車券の発売状況について資料を得た。

2. 本 調 査

本調査は，多数の市民を対象とする概観調査と，少数の市民を対象とする事例調査とに大別され，それぞれ次のような種類の調査を行なった。

2・1 概 観 調 査

2・1・1 基 礎 調 査（とめおき調査）

基礎調査では、A・B二種類の調査票を作成した。Aの調査票は、市民が一日にどんな言語行動をいとなんでいるか、きまり文句のあいさつをしているか、外来語をどの程度理解しているかについて質問するものであり、Bの調査票は場面や相手によって敬語をどう使い分けるかを主としてたずねるものである。また、A・B双方に共通するものとして、新聞・雑誌・手紙・電話の利用度、言語生活に対する意識、方言と標準語に関する意識などをたずねることにした。この二種類の調査票がサンプリングされた被調査者に、それぞれ半分ずつ行き渡るように企画したわけである。

(1) 基礎抽出作業（10.1～10.3）……松江市役所市民課の「住民登録票」に基づき、旧市域および上乃木町、浜乃木町、古志原町地区の全市民を等間隔抽出によるランダム・サンプリングで2646人をぬき出した。抽出比は、全地区とも1/25。さらに、そのうちから14歳以下、70歳以上の市民（全市民に対し約28.8%）を除いて、1887人を基礎調査の対象に決定した。

(2) 基礎調査票の配布と回収（10.4～10.8）……市内の公立中学校（一中～四中）の生徒に依頼して基礎調査票を配布、1414通を回収した。（回収率74.9%）

2・1・2 市 民 調 査（面接調査。11.26～12.3）

基礎調査票を回収することのできた1414人の中から、さらに220人を選び、所員8人と島根大学学生6人の調査員が、戸別訪問して面接し、主として、場面による敬語の使い分けに関して、質問した。（面接の所要時間1人あたり約30分）

220人の選び方は次のようにした。基礎調査票に基づき、男女、年齢（5層）、居住歴（3層）あわせて22の層から220人を選んだ。すなわち、松江市生えぬきの層では、年齢が10代、20代、30代、40代、50代以上の5層について、それぞれ男女10人ずつの割で計100人を選び、出雲生えぬきの層と、松江・出雲以外の層からは、それぞれ30代、40代、50代以上の3層について、やはり男女10人ずつ計120人を選んだわけである。

2・1・3 生徒調査（集合調査。10.2～10.5）

市内の中高校生について、家庭内の言語生活の実態ならびにそれに対する意識を主として調査した。また、外来語の理解度についても、あわせて調査した。調査対象は次の通りで、調査した生徒総数は683名である。

なお、この調査では生徒各人に家族構成について記入してもらい、それを資料として2・1・4の主婦調査における被調査者を選んだ。

県立松江南高等学校 2年生 2学級

〃 松江商業高等学校 〃 〃

〃 松江工業高等学校 〃 1学級

島根大学付属中学校 2年生 1学級

松江市立松江第一中学校 〃 2学級

〃 松江第二中学校 〃 〃

〃 松江第三中学校 〃 〃

〃 松江第四中学校 〃 〃

なお、この調査の集計結果から小学生と比較する必要を生じたので、後に、市内の次の3小学校について同様の調査をした。（39.3.10～3.11）

松江市立津田小学校 5年生 2学級

〃 白潟小学校 〃 〃

〃 内中原小学校 〃 〃

生徒調査では、家庭内の言語生活の実態と、それに対する意識を子どもの側から調べたが、同じことを、一家の主婦の立場から調べようというのが主婦調査、婦人学級調査、PTA調査の三つの調査である。

2・1・4 主婦調査（面接調査。11.26～12.4）

主婦調査は、生徒調査における家族構成の記載に基づき、しゅうとまたはしゅうとめと同居する主婦90人（俸給生活者、商業、農業の各層にまたがるように考慮した）を選び、所員4人が調査員となって、戸別訪問し、質問票に記入した。（面接の所要時間は、1人あたり約30分。）

2・1・5 婦人学級調査（集合調査）

主婦調査では、旧市内の主婦が主対象になったため、農業に従事する被調査

者が少ししか得られなかった。それを補うために、新市域の純農村地帯における婦人学級に協力を求め、主婦調査とほぼ同じ内容について、集合調査をした。

11月30日 松江市東持田町65 持田小学校 持田婦人学級 (62人)

2・1・6 P T A 調 査 (集合調査)

中学生の子どもを持つ母親を中心にして、家庭内における話し、聞き、書き読む生活の実態を一つの面からとらえようとする調査である。調査は、次の2校のPTAの協力を得て行なった。

11月27日 島根大学付属中学校 39名

12月2日 松江市立第四中学校 42名

なお、この調査に付随して、同じ調査対象に手紙文における敬語の使い方の実情をさぐるための「手紙調査」を、あわせて実施した。

2・2 事 例 調 査

概観調査で明らかにしようとした、個人の一日の言語行動、ならびに場面による言語の使い分けの実情を具体例について確かめるため、つぎのような事例調査を行なった。

2・2・1 24 時 間 調 査

松江市生えぬきの市民を1人選び、その言語行動を一日じゅう(午前6時～午後10時)観察し記録した。記録には、録音器を全面的に使用し、手書きや写真撮影でそれを補った。一日を2～3時間ずつに分け、各部分におのおの二名ずつの所員が同時に観察する方法をとった。被調査者および調査日時は次のとおり。

落合寿美子 (主婦 59 歳) 38年11月29日

2・2・2 継 続 観 察 調 査

24時間調査を補うものとして、毎日1～2時間ずつ、違った時間帯で何日間か継続的に観察しようとする調査である。これも所員2名が一組となり、録音器および手書きによって観察記録した。被調査者となったのは次の3氏である。

佐藤澄子 (デパート店員 21 歳) 38.11.30～12.1 (延べ5時間)

桑原 弘 (古書籍商 35 歳) 38.11.30～12.3 (延べ4時間)

漢東種一郎(市民政部長 53 歳) 38.12.2 (延べ3.5時間)

2・2・3 裏づけ調査（面接調査）

市民調査の結果，疑問の残る点，さらに細かく調べたい点などを，特に協力の得られそうな少数の市民について，面接調査した。

市民調査における 220 人の被調査者の中から，松江生えぬきの人を，年齢層によって10代，20代，30代，40代，50代以上の 5 層に分け，それぞれの年齢層から男女おのおの 1 人ずつの割合で被調査者を選んだ。その結果，予備も含めて計12人の市民について実施した。面接時間は，一人平均約50分。

大野貞子（新聞社勤務 47 歳）ほか11名。 39年3月12～16日。 （斎賀）

国語関係文献の調査

国語に関する学問の一般を知り、あわせて学界の動向や世論の動きをとらえるために、前年度に引き続き、本年度も、昭和38年1月から12月までの刊行の図書・雑誌・新聞についての文献調査を行なった。これらの文献目録はその他の資料・情報とともに、当研究所編『国語年鑑』（昭和39年版）に掲載されている。

以下、その各々について分類し、冊数および点数により、大まかな傾向を示すことにする。

A. 刊行書の調査

国語関係の刊行書について、書名・著（編）者名・発行所・発行年月・型・ページ数、ならびに内容を調べ、カード化し、総数375冊の分類目録を作成した。

刊行書の分類とその冊数

国語一般	16	読む・読書指導	15
国語史	11	書く・作文指導	10
音声・音韻	6	文字教育	3
文字・表記	12	文法教育	3
文法	5	テスト	5
文章・文体	14	幼児教育	3
語彙・用語	13	その他学習指導	3
方言・民俗	25	日本語教育	1
マス・コミュニケーション	4	言語技術	
広告	3	話し方	26
国語国字問題	3	書き方	16
国語教育		言語学その他	9
国語教育一般（国語教育史）	9	外国語教育	6
学習指導一般	23	辞典・用語集	
ことばの指導	3	国語辞典	18
聞く・話す	3	漢和辞典	6

用語辞典・用語集	18	資料	62
特殊辞典	15		計 375冊
索引	6	追補(前年度以前に出版されたもの)77	

昨年に比し、辞典・用語集に関するものの多いことがめだっている。昨年35点、本年73点。

B. 雑誌論文の調査

主として当研究所購入の諸雑誌、ならびに寄贈された大学や学会・研究所などの刊行物から、関係論文・記事を調査し、題目・筆者・誌名・発行年月・巻号数およびページ数などを記載したカードを作り、分類別カード目録を作成した。採録した論文・記事の総数は2412点に達した。

1. 一般刊行雑誌、および大学・研究所等の紀要・報告書類の種別数

a 一般刊行雑誌(学会誌も含む)……161種

国語・国文・言語ほか	72	外国語	4
方言・民俗	7	総合誌	3
国語問題	11	詩歌・芸能	5
国語教育	30	その他(社会学・心理学ほか)	9
マス・コミ関係	9	本年度臨時にはいった雑誌	11

b 大学・研究所等の紀要・報告類……108種

なお、調査した刊行物は、主として研究所に寄贈された分(後記、「昭和38年度に寄贈された図書」の一覧(2)「逐次刊行物の部」参照)と、当所購入による下記の諸雑誌である。

計量国語学(計量国語学会)	英語青年(研究社)
国文学解釈と鑑賞(至文堂)	教育(国土社)
文学(岩波書店)	教育心理(日本文化科学社)
国語と国文学(東大国語国文学会)	児童心理(金子書房)
放送文化(日本放送協会)	社会学評論(日本社会学会)
国文学言語と文芸(大修館書店)	沖縄文化(沖縄文化協会)
文学・語学(三省堂)	学術月報(日本学術振興会)

2. 論文・記事の分類とその点数

国語（学）

国語一般	41
意味	4
言語生活	39
言語活動	9
話しことば	12

国語史

国語史一般	24
訓点と訓読語	32

音声・音韻

音声・音韻一般	24
史的研究	12
アクセント・イントネーション	16

文字

文字・字体	12
用字	10
表記	13

語彙

語彙一般	19
古語	37
現代語	11
各種用語	4
流行語・新語	10
外来語	4
名づけ（地名・人名）	26
辞書・索引	35

文法

文法上の諸問題（現代語法）	37
文法の史的研究	50
敬語法	14

文体

文章・表現一般	43
史的研究	38
翻訳の問題	16

方言

方言一般（方言と標準語）	23
各地の方言	
東部	31
西部	34
九州・沖縄	38

古典の注釈

奈良・平安	
古事記・日本書紀	2
万葉集	24
大和物語・伊勢物語	10
かげろふ日記	13
源氏物語・紫式部日記	21
枕草子	9
その他	16
院政・鎌倉以後	
夜半寝覚	2
大鏡	13
新古今和歌集	2

平家物語	2	作文教育	165
問はず語り	5	文字指導	11
謡曲	3	表記の指導	10
近松・西鶴	4	語彙教育	28
その他	20	文法教育	16
国語問題		文学教育	81
国語問題一般	32	古典教育	21
表記法		漢文教育	6
表記一般	21	学力評価	22
当用漢字など	8	国語教科書・教材研究	80
かなづかい	3	特殊教育	12
送りがな	4	ローマ字教育	3
わかち書き	5	日本語教育	9
横書き・縦書き	3	言語学	
かな書き	11	言語一般	48
ローマ字	6	比較研究	11
地名・人名の表記など	4	自動翻訳など	10
国語教育		外国語研究	33
国語教育一般	95	外国語教育（学習）	20
言語能力の発達	29	マス・コミュニケーション	
国語教育史	21	一般的問題	19
学習指導		新聞	34
学習指導一般	100	放送	
学習ノート	7	放送一般	49
ことばの指導一般	53	ラジオ	18
聞く・話す	10	テレビ	36
聞く	6	広告・宣伝	20
話す	43	国語資料	16
読む・書く	15	書評・紹介	140
読解指導	123		
読書指導	31	追補	
		計	2412
			151

C. 新聞記事の調査

下記の諸新聞から、関係記事を切り抜き、それを整理し各月ごとに製本し、資料として保存し、閲覧に供するとともに、分類別のカード目録を作った。カードの記載形式は、見出し語（欄名だけで、見出し語のないものは、その内容によって、適宜題名をつけた。）・紙名・筆者名・年月日・欄名・行数・内容の順序によった。切り抜き総数は1524点である。調査した紙名、切り抜き点数および月別の切り抜き点数は次のようである。

1. 新聞の種類と切り抜き点数

日・夕刊紙		(大阪)	7
朝日	294	日本経済	90
(大阪その他) ※	6	(大阪)	3
毎日	221	中部日本	90
(大阪)	15	特殊新聞	
読売	222	読書	52
(大阪)	10	読書人	49
東京	184	図書	29
東京タイムズ	45	新聞協会報	34
産経	151	その他	22

※かっこの中は地方出版のもの。これは、大阪の山田房一氏、名古屋の平岡伴一氏などの地方在住のかたがたから、関係記事のあるごとに恵送されたもの。

2. 月別の切り抜き点数

1月 (106)	2月 (118)	3月 (134)	4月 (106)	5月 (114)
6月 (138)	7月 (134)	8月 (149)	9月 (147)	10月 (158)
11月 (106)	12月 (114)			

3. 新聞記事の分類とその点数

国語(学)一般	44	文字・表記	16
国語史	3	活字	2
音声・音韻	26	語彙	
文字		語彙一般	14

各種用語	88	地名・人名の表記ほか	42
新語・流行語・隠語	42	外来語表記ほか	14
外国語・外来語	49	ローマ字	6
辞書	15	国語教育	
問題語・命名	123	国語教教一般	3
文法	4	学習指導の問題	
文体		学習指導一般	26
文体・表現	28	話す（聞く）	5
翻訳の問題	25	読む（読書指導）	27
方言		書く（作文指導）	6
方言一般	18	学力テスト	18
各地の方言	13	教科書	4
言語生活		文学・古典教育	6
言語生活一般	76	特殊教育	16
話し方・聞き方	38	幼児語教育	40
読書・書き方	15	言語学	
ことばづかいの問題	82	言語学一般	14
敬語の問題	14	外国語一般	61
ことばと機械	20	外国語教育	13
国語問題		外国人の日本語学習	18
国語問題一般	94	外国語に関する紹介ほか	31
表記の問題		マス・コミュニケーション	
表記一般	24	マス・コミ一般	1
当用漢字など	45	新聞	10
かなづかい	10	放送	51
送りがな	2	宣伝・広告	17
かながき	4	出版	5
横書き・縦書き	4	書評・紹介ほか	146
略語・略称	6	計	1524

語彙のうち、問題語・命名の項目の数が増えているのは（昨年81点、日

本をニッポンと読むかニホンと読むかが、オリンピック東京大会を前にして問題となったのが大きい理由である（39点ある）と思われる。また、国語問題の項が昨年比べて多くなっているのは、第6期国語審議会の報告が出たことが一つの原因になっているであろう。その他外国語（123点） 幼児語教育（40点）に関係したものの多いのがめだった。

さて、これらの国語関係文献目録の詳細は、他の資料とともに、これを『国語年鑑』（昭和39年版）に掲載したので、ここではふれない。

D. 担 当 者

この調査および国語年鑑編集の作業は主として次のものが担当した。

飯豊 毅一 大久保 愛

なお、研究補助員 塚田菊子、小山孝子が作業を助けた。（飯豊，大久保）

図書の収集と整理

前年度にひきつづき，研究所の研究活動に必要な研究文献および言語資料を収集し，管理した。また，例年のとおり，各方面から寄贈されたものが少なくない。（下に示す。）

昭和38年度に新しく加えた図書の数は，次のとおりである。

器行本	購入	775冊
	寄贈	189冊
雑 誌	購入	1,675冊
	寄贈	835冊
新 聞	購入	10種
	寄贈	2種

年度末における蔵書数（単行本だけ）は，28,577冊である。（大石）

昭和38年度に寄贈された図書の一覧

寄贈者名（敬称略） 図 書 名

1 単行本 （ ）内は編著者が寄贈者と異なる場合の編著者名。※は抜刷。

愛知学芸大学名古屋中学校国語国字問題研究委員会「漢字制限・現代かなづかいが中学校各教科に及ぼした実態に関する研究」

池原樞雄 「現代児童万葉集」

市川一男 「口語俳句同人句集」（浦賀広己編）

井上増次郎 「序説ことばの原理」

印刷学会 「印刷適性」（高分子学会印刷適性研究委員会）

謀垣実 「語彙の地域差とその変遷」* 「日本外来語の研究」「兵庫県丹波方言文例調査」

遠藤嘉基 「最新古典文法便覧」

大久保忠利 「討論指導による言語与集団思考能力の向上」*

大阪大学 「博士学位論文」3・4

- 大阪大学図書館 「図書目録」7-1
- 樺島忠夫 「表現論」
- 鎌田般二 「方言とところどころ」(阪口保編)
- 神浜孜郎 「公用文と用字用語」(茨城県文書課)
- 川上肇 「段階アクセントから方向アクセントへ」*
- 九州大学言語科学研究委員会 「第4回研究発表会講演抄録」
- 京都大学国語学国文学研究室 「文禄二年耶蘇会板伊曾保物語」「隣語大方」「捷解新語文釈」「安永三年板複製悉曇要訣」
- 京都大学人文科学研究所 「東洋史研究文献類目昭和35年度」
- 桐原徳重 「漢字早引き表」
- 国広哲弥 「島根県方言の発音」*
- 慶応義塾言語文化研究所 「現代日本語の意味論的分析」(鈴木孝夫)
- “ZUM SEMANTISCHEN AUFBAU DER NEUARABISCHEN VERBEN,, (SHNYA MAKINO), 「市河文庫目録」
- 香山六郎 「ツピ単語集」
- 国際基督教大学 「日本語教育のために」
- 国立教育研究所 「教育図書館蔵書目録」(安西文庫)
- 国立国会図書館 「諸問屋名前帳細目」2・3
- 小林英夫博士の還暦を祝う会 「小林英夫著作目録」
- 佐藤嘉代治 「近世における漢語の語形変化」* 「漢語存疑」* 「西鶴の小説における用字についての試論」
- 渋谷清視 「児童文学を教室に持ち込むにあたって」
- 衆・参議院記録部 「国会会議録用字例」
- 史料編纂所 「大日本史料」1-12, 2-14, 8-26, 「大日本古文書 家わけ」12・18, 「大日本古記録 建内記」1, 「同 殿暦」2, 「大日本近世史料 唐通会所日録」5, 同「諸 問屋再興調」4, 「同 柳宮補任」1・2, 「史料綜覧」17, 「大日本維新史料 井伊家史料」3, 「日本関係海外史料目録」1
- 鈴木家三 「おじいさん・えり子の作文」
- 高羽四郎 「『である』の用法」
- 高橋一夫 「日本語教育のために」(日本語教育学会)
- 高橋哲二郎 「貴重マイクロフィルム目録」

田口渾三郎 「色彩調和、特に二色以上の調和に関する知見（その1）」（藤井千枝）＊
 竹下一男 「新丸地域における方言の研究」
 塚原鉄雄 「水晶婚」
 天理図書館 「地球儀・天球儀」Ⅰ、「曲亭馬琴」〔CATALOGUE OF BOOKS〕
 東洋文化研究所 「新収和漢図書目録」14～16
 豊島区小学校国語研究部 「読解における集団思考の指導（編）」
 鳥取県教育研究所 「教師のための基礎教養講座」〔教育研究資料目録 1962〕
 富山大学図書館 「増加図書目録 昭和36年度」
 長田久男 「授業時に用いる教師発言の記述方法」
 長野県短期大学 「農山村の児童生徒をめぐる生活環境調査（言語編）」
 奈良国立文化財研究所 「平城宮発掘調査報告」Ⅲ
 日本学術会議 「将来計画に関する中間報告」〔文科系文献目録〕15
 日本学術振興会 「研究報告集録（人文編）昭和37年版」
 日本国有鉄道 「工部省記録，鉄道之部」4～8
 日本速記発表80周年記念会 「日本速記80年史」〔日本速記年表〕
 日本大学図書館 「浄瑠璃本目録」「正本製草双紙目録」「土佐日記」
 日本放送協会 「スポーツ辞典 13 ボクシング」〔外国語のカナ表記〕〔農業用語集〕＊「青年の生活とテレビジョン」〔東北民謡集—福島県—〕〔放送のことば第1回アンケート結果報告〕〔国民生活時間調査〕
 日本ユネスコ国内委員会 「国際機関・団体の文献情報活動 1950～1959」
 美術研究所 「日本美術年鑑 昭和37年版」
 福田孫多 「生活に溶け込んだコトバ」＊「年のはじめの今昔」＊
 前川清太郎 「文体論のこころみ」＊
 水野弥穂子 「正法眼蔵随聞記」（訳）
 明治大学図書館 「増加図書目録（昭和37年度）」
 森田子竜 「現代教育における『書』の位置と役割について」
 文部省 「国語シリーズ53 当用漢字字体表の問題点」〔同55 国語改善と国語教育〕
 「同56 国語表記の問題」〔同57 文章表現の問題〕
 山形県教育研究所 「国語学習指導法の研究」
 山口隆俊 「ヒガンバナの里呼び名(1)」＊「ヒガンバナ球根沈没物語」＊
 山田忠雄 「山田孝雄追憶 史学・語学論集」

山田房一 「生字攻」

ユネスコ東アジア文化研究センター “JAPANESE RESEARCHERS IN ASIAN
STUDIES DIRECTORIES” No. 2., “INDUSTRIALIZATION OF
JAPAN” (I. NAKAYAMA)

渡辺綱也 「東蒲原郡言語調査報告」

NATIONAL SCIENCE FOUNDATION “CURRENT RESEARCH AND
DEVELOPMENT IN SCIENTIFIC DOCUMENTATION No.11”

2 逐次刊行物（おもなもの）

愛知学芸大学 「国語国文学報」16・17, 「名古屋教育研究所紀要」1

愛知県立女子大学 「説林」11・12「紀要」13・14

青山学院大学 「英文学思潮」35・36

秋田大学 「学芸学部研究紀要」13

明日香社 「明日香」287—298

跡見学園 「国語科紀要」11, 「短期大学紀要」2

いずみ会 「IZUMI」59・60

愛媛県立教育研究所 「紀要」36~40

大分大学 「学芸学部研究紀要」2—3・3

大阪学芸大学 「紀要」A—11, 「学大國文」6

大阪市教育研究所 「教育研究紀要」62~69, 「研究報告集」1・2

大阪女子大学 「女子大文学」14・15

大阪市立大学 「人文研究」14—3~11

大阪府科学教育センター 「研究報告集」2—4~10

大谷大学 「研究年報」14, 「学報」41—3・4, 42—1・2

王朝文学研究会 「王朝文学」8・9

お茶の水女子大学 「国文」19・20, 「人文科学紀要」16

香川大学 「学芸学部研究報告」1—16・17

学燈社 「国文学」8—1・2・6~15, 9—1~5

カナモジカイ 「カナノヒカリ」489~501, 「モジトコトバ」239~251

関西学院大学 「人文論究」13—1・4, 14—1, 「日本文芸研究」14—3~4, 15—1~3

北見ローマ字会 「KITAMI RÔMAZI」25~28

岐阜大学 「ことばと文学」2, 「国語国文学」2

九州大学 「語文研究」16, 「文学論輯」7・10・11, 「文学研究」61・62
 京都学芸大学 「紀要」「総索引」22—A・B, 「国文学会報」9
 京都女子大学 「女子大國文」29～32
 京都大学 「文学部研究紀要」7・8, 「教育学部紀要」9, 「教養部人文」10, 「心理学評論」6～2
 京都大学国文学会 「国語国文」343～351
 京都大学人文科学研究所 「紀要」34・35, 「調査報告」20
 熊本大学 「教育学部紀要」11—1・2
 訓点語学会 「訓点語と訓点資料」25～27
 群馬県教育研究所 「研究紀要」17・18
 高知大学 「學術研究報告」12—4, 「国語教育」11
 甲南女子短期大学 「論叢」7, 「甲南國文」10
 神戸市外国語大学研究所 「神戸外大論叢」65～70, 「外国学資料」14
 神戸女学院大学 「論集」28～30
 神戸大学 「教育学部研究集録」28～30
 神戸大学文学会 「研究」29・31
 語学教育研究所 「語学教育」261～267
 国学院大学 「国学院雑誌」64—1～12, 65—1～3, 「国語研究」15～17
 国語学会 「国語学」52～55
 国語問題協議会 「国語国字」15～20
 国立教育研究所 「紀要」38～40
 国立国会図書館 「洋書速報」151～180
 「古典と現代」の会 「古典と現代」18・19
 ことばの会・なごや 「ことば」30～32
 小林理学研究所 「報告」12—3・4, 13—1～3
 佐伯古文研究所 「古文研究」3・4
 相模女子大学 「紀要」15～17
 滋賀県教育研究所 「研究紀要」5—1～6
 静岡県立教育研修所 「教育研究」23・24
 静岡女子短期大学 「紀要」2～9
 静岡大学 「教育学部研究報告」13・14「文理学部人文論集」13

実践女子学園「実践文学」19・20
 信濃教育会 「信濃教育」917～928
 小学館 「総合教育技術」18—1～3, 19—1, 「教育技術学習心理」4—1～12
 上智大学 「SOPHIA」12—1～4
 昭和女子大学 「学苑」279～291
 初等教育研究会 「教育研究」18—4～6・8～11, 19—1～3
 信州大学 「教育学部紀要」12, 「教育学部研究論集」14, 「文理学部紀要」12,
 「可里婆弥」3
 成城大学 「成城文芸」32～34, 「伝承文化」3
 大修館 「英語教育」12—1～12, 「国語教室」114～116, 「国文学 言語と文芸」
 （東京教育大学国語国文学会）27～31
 田唄研究会 「田唄研究」4～6
 中央大学 「文学部紀要」13～15
 天理大学 「学報 人文・社会科学編」40～42, 「同 自然科学編」1, 「ビブリア」24～26,
 「山辺道」10, 「日本文化」41
 東京外国語大学 「論集」10, 「語学研究所所報」4
 東京学芸大学 「研究報告」13・14
 東京教育大学 「文学部紀要」44・52, 「教育学部紀要」9
 東京女子大学 「比較文化研究所紀要」15・16, 「比較文化」10, 「日本文学」6～12
 東京大学 「教養学部人文科学紀要」30, 「新聞研究所紀要」11
 東京大学国語研究室 「国語研究室」2, 別冊1・2
 東京都立大学 「人文学報」30～35, 「都大論究」3
 統計数理研究所 「彙報」18～20, 「通信」6, 「研究リポート」8
 東北大学 「文学部研究年報」13F, 「東北文化研究室紀要」別巻1, 「教養部文化紀
 要」9・10, 「教育学部研究年報」11, 「国語学研究」3
 東洋大学 「文学論叢」23・24
 東洋文化研究所 「紀要」29～31
 徳島県教育委員会 「教育月報」159～170
 中沢政雄 「国語教育科学」（国語教育科学研究会）27～38, 別冊
 仲田庸幸 「国語研究」（愛媛国語研究会）43～45
 名古屋大学 「文学部研究論集」31, 「教育学部紀要」10, 「教養部紀要」7, 「国語

国文学」13

南山学会 「アカデミア」37・38

新潟大学 「人文科学研究」23～25

日本音声学会 「会報」112～115

日本学士院 「紀要」20—1～3, 21—1～3

日本語教育学会 「日本語教育」1～3

日本国語教育学会 「会誌」22・23

日本大学 「語文」15～17, 「人文科学研究所研究紀要」4, 「文理学部研究年報」12

日本文学教育連盟 「文学教育」12・15, 「文学教育通信」8・9

日本放送文化研究所 「年報」8, 「放送学研究」5・6, 「文研月報」143～154

日本民俗学会 「会報」27～32

日本民族学協会 「民族学研究」27—1～4, 「民協通信」5

日本のローマ字社 「RÔMAZI NO NIPPON」136～138

日本ローマ字会 「RÔMAZI SEKAI」552～562

広島近世文芸研究会 「近世文芸稿」8・9

広島文学 「国語教育研究」7・8, 「国文学攷」30～32, 「文学部紀要」22—1～3, 総
覧, 「方言研究年報」6

広島中世文芸研究会 「中世文芸」26～28

福井大学 「学芸学部紀要」12・13

福岡女子大学 「文芸と思想」24・26

福岡市立教育研究所 「研究所報」45～47

文化放送 「ラジオコマーシャル」11～14

米国大使館文化交換局 「日米フォーラム」9—4～12, 10—1～3

放送批評懇談会 「放送批評」1～14

北海道学芸大学 「紀要」13—1・2, 14—1, 「学術文献収報」25～30, 「人文論究」23

北海道大学 「外国語・外国文学研究」11, 「教育学部紀要」9, 「国語・国文研究」24
～26

穂波出版社 「実践国語教育」(実践国語教育研究所)276～289

万葉学会 「万葉」47～50

水門の会 「水門」1～3

宮城学院女子大学 「研究論文集」22・23

明治図書出版K・K 「教育科学国語教育」53~65
 文部省 「初等教育資料」156~169, 「中等教育資料」144~160 (150欠), 「年報」
 88 (別冊)・89
 山形県教育研究所 「山形教育」97~102
 山形大学 「紀要」人文科学5—2, 社会科学1—4
 山口大学 「文学会誌」14—1・2
 山梨県立教育研修所 「研究報告書」1~6
 山梨大学 「学芸学部研究報告」13・14
 横浜国立大学 「学芸学部人文紀要」9・10
 立教大学 「立教大学日本文学」10・11, 「心理・教育学科研究年報」6
 立正大学 「文学部論叢」17・18
 立命館大学 「立命館文学」212~220, 「論究日本文学」20・21
 竜谷大学 「論集」373~375
 早稲田大学 「国文学研究」27・28, 「学術研究」12, 「史観」68, 「平安朝文学研究」9
 SEVER POP “ORBIS” 11—2
 UNIVERSITY OF CALIFORNIA “PUBLICATIONS IN LINGUISTICS”
 30・31・33
 UNIVERSITY OF LONDON “BULLETIN OF THE SCHOOL OF ORIENTAL AND AFRICAN STUDIES” 26—2・3
 UNIVERSITY OF WASHINGTON “MODERN LANGUAGE QUARTERLY” 23—4, 24—1~3

庶務報告

A. 庁舎および経費

1. 庁舎

所 在	東京都北区稻付西山町	
敷 地		10,247,84m ²
建 物		
本 館（延）鉄筋コンクリート，二階建		1,694,64m ²
付属建物（延）		1,720,94m ²
計		3,415,58m ²

2. 経 費

昭和38年度予算 総額	58,041,000円
人件費	46,798,000円
事業費	11,243,000円
昭和38年度文部省科学研究費（各個研究）	140,000円
昭和38年度各所修繕費	2,278,000円

B. 評 議 員 会

会長 久松 潜一	副会長 有光 次郎
阿部真之助	阿部 吉雄
伊藤忠兵衛	桂 寿一
佐伯 梅友	佐々木八郎
中島 文雄	中村 光夫
西尾 実	西脇順三郎
○武藤俊之助	山本 勇造
	横田 実

○印は 38.7.1 就任を示す。

C. 組 織 と 職 員

1. 定 員 教官 33 事務官 14 その他 24 計 71

2. 組織および職員

	職 名	氏 名	備 考
国立国語研究所	所 長	岩 淵 悦太郎	
第 1 研究部	部 長	林 大	
話しことば研究室	室 長	大 石 初太郎	
		宮 地 裕	
		南 不二男	
		鈴 木 重 幸	
		泉 喜与子	38. 4. 1辞職
		吉 村 香 苗	
		高 橋 隆 子	38. 4. 1採用 38.12.31辞職
書きことば研究室	室 長	見 坊 豪 紀	
		水 谷 静 夫	39. 3. 31辞職
		石 綿 敏 雄	
		宮 島 達 夫	
		橋 本 圭 子	
		高 木 翠	
		小 林 さち子	
		本 多 レイ子	38. 4. 1採用
地方言語研究室	室 長	柴 田 武	
		野 元 菊 雄	38. 9. 19英国へ出張
		上 村 幸 雄	
		徳 川 宗 賢	
		白 沢 宏 枝	
第 2 研究部	部 長	興 水 実	
国語教育研究室	室 長	芦 沢 節	
		村 石 昭 三	

第3研究部	言語効果研究室	室 長	吉 沢 典 男 根 本 今朝男 川 又 瑠璃子 永 野 賢 林 四 郎 高 橋 太 郎 渡 辺 友 左 屋 久 茂 子 山 田 巖	38. 5. 16千葉大学に配置換
			林 四 郎 永 野 賢 進 藤 咲 子 中曾根 仁 長 尾 紀 子 山 田 巖 広 浜 文 雄	39. 1. 17 近代語研究室長に配置換 39. 1. 17 言語効果研究室長に配置換
	近代語研究室	室 長	林 四 郎 永 野 賢 進 藤 咲 子 中曾根 仁 長 尾 紀 子 山 田 巖 広 浜 文 雄	38. 1. 17 言語効果研究室長に配置換 38. 1. 17 近代語研究室長に配置換
	古代語研究室開設準備室	主任(併)	山 田 巖 広 浜 文 雄	旧姓菅原
	第1資料研究室	部長(併) 室 長	岩 淵 悦太郎 松 尾 拾 西 尾 寅 弥 田 中 章 夫 露 峰 裕 子 河 東 はるみ	38. 4. 1採用
	第2資料研究室	室 長	飯 豊 毅 一 大久保 愛 高 田 正 治 塚 田 菊 子 小 山 孝 子 齋 賀 秀 夫 松 本 昭 宇 野 瑠美子	主任研究官
	第3資料研究室	室 長	齋 賀 秀 夫 松 本 昭 宇 野 瑠美子	
	庶務部	部 長	尾 崎 源之助	

庶務課	課長 課長補佐	三島良兼	38. 6. 1高知大学から配置換
		名古屋恒太郎	
		鈴木篁二	
		西山博	
		根岸佐代子	
		斎藤恭子	
		出牛清次郎	
		伊藤仲二	
		三浦清伍	
		渋谷正則	
会計課	課長 課長補佐	鈴木亨	38. 6. 1高知大学から配置換
		筒井士郎	
		岡本まち	
		金田とよ	
		加藤雅子	
		中村佐仲	
		安藤信太郎	
		船倉正章	
		大石初太郎	
		鈴木篁二(併)	
図書室	室長(併)	芳賀清一郎	38. 6. 1高知大学から配置換
		大塚通子	

D. 内地留学生受け入れ

全国都道府県から内地留学生を受け入れて、研究の便をはかっている。次にその氏名研究題目などを掲げる。

氏名	学 校	研 究 題 目	研 究 期 間
岩本 友一	山口県防府市立華西 中学校教諭	基礎力向上のための 国語学習指導, 国語 問題の現状	昭和38. 5. 1から " 38. 7. 31まで
丸谷 長進	富山県小矢部市立石 動小学校教諭	国語学力の分析とそ の指導法	昭和38. 5. 28から " 38. 8. 27まで

下釜 明	長崎市立西浦上小学 校教諭	国語学力向上のため の読解指導	昭和38. 7. 24から " 38. 8. 10まで
田中 逸雄	長崎県南高来郡布津 村立布津中学校教諭	学校図書館の運営と 読書指導	昭和38. 7. 24から " 38. 8. 10まで
大浦 勝	長崎県対馬豊玉村立 仁位中学校教諭	文章表現の指導・会 話の指導	昭和38. 7. 24から " 38. 8. 10まで
古田左右吉	岐阜市立加納中学校 教諭	国語スキルのプログ ラム化の実際	昭和38. 8. 28から " 38. 9. 27まで
堀内恵美子	秋田県鹿角郡尾去沢 町立尾去沢小学校教 諭	児童に読解力をつけ るための指導法	昭和38. 10. 17から " 38. 11. 6まで

E. 日 誌 抄

1963. 5. 7～8 文部省所轄研究所長会議（水沢で）
5. 14 横浜市立北方小学校教諭外10名研究所見学
5. 17 東京教育大学教授河野六郎外13名研究所見学
5. 23～24 第14回文部省所轄機関事務協議会（国立中央青年の家で）
5. 28～29 第22回文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議（日本
学術会議で）
6. 24 日本音声学会長大西雅雄外30名研究所見学
7. 4 第52回国立国語研究所評議員会
議事
1. 昭和38年度の研究事業計画
 2. 昭和37年度の研究事業報告
 3. その他
7. 5 東京工業大学教授実吉純一外6名研究所見学
7. 5 埼玉県福岡町立福岡第二小学校教諭上田武男外3名研究所見
学
7. 20 早稲田大学語学研究所講師ブルチョーヘルベルト研究所見学
7. 22 米国オハイオ州立大学教授 William S-Y Wang 研究所見
学
8. 12 札幌市立陵北中学校教諭三浦利八郎研究所見学
9. 5 文部大臣灘尾弘吉研究所視察

9. 27 埼玉県羽生市羽生中学校長小川美一郎外15名研究所見学
10. 7～8 第16回文部省所管研究所事務協議会（北海道洞爺湖で）
10. 15 I nternational Center for Japanese Studies 志賀一清
外5名研究所見学
10. 16 九州大学教養部助教授森山 隆研究所見学
10. 17 文部省所轄研究所長会議（統計数理研究所で）
10. 28～29 文部省所轄ならびに国立大学附置研究所長会議第3部会（神
戸大学経済経営研究所で）
10. 30 各省直轄研究所長連絡協議会総会（虎の門共済会館で）
11. 8 新聞用語懇談会藤井継男外36名研究所見学
11. 16 板橋区立舟渡小学校教諭黒坂勝志外38名研究所見学
11. 21 二松学舎大学教授浮田章一外28名研究所見学
11. 26 荒川区立荒川第八中学校長岩沢遠四郎外13名研究所見学
12. 5 第53回国語研究所評議員会
議事
 1. 研究事業の中間報告
 2. その他
12. 20 国立国語研究所創立記念日
12. 24 栃木県教育委員会指導主事鈴木清研究所見学
12. 26 パリ大学教授 Ch. Haguenauer 研究所見学
1964. 2. 24～25 第14回文部省所管研究所第3部会事務協議会（本郷会館で）
3. 23 第54回国語研究所評議員会
議事
 1. 昭和38年度研究報告
 2. 昭和39年度予算の内示について
 3. 昭和39年度研究課題について
 4. その他

昭和 40 年 12 月

国立国語研究所

東京都北区稲付西山町
電話東京(900) 3111(代表)

UDC 058:495.6

NDC 810.5

国立国語研究所刊行書

国立国語研究所年報

1～14 (昭和24年度～昭和37年度)

国立国語研究所報告

- 1 八丈島の言語調査
- 2 言語生活の実態 (秀英出版刊) (¥300.00)
—白河市および付近の農村における—
- 3 現代語の助詞・助動詞
—用法と実例—
- 4 婦人雑誌の用語
—現代語の語彙調査—
- 5 地域社会の言語生活 (秀英出版刊) (¥600.00)
—鶴岡における実態調査—
- 6 少年と新聞
—小学生・中学生の新聞への接近と理解—
- 7 入門期の言語能力
- 8 談話語の実態
- 9 読みの実験的研究
—音読にあらわれた読みあやまりの分析—
- 10 低学年の読み書き能力
- 11 敬語と敬語意識
- 12 総合雑誌の用語 (前編)
—現代語の語彙調査—
- 13 総合雑誌の用語 (後編)
—現代語の語彙調査—
- 14 中学年の読み書き能力
- 15 明治初期の新聞の用語
- 16 日本方言の記述的研究 (明治書院刊) (¥900.00)
- 17 高学年の読み書き能力
- 18 話しことばの文型(1)
—対話資料による研究—
- 19 総合雑誌の用字
- 20 同音語の研究
- 21 現代雑誌九十種の用語用字
—総記および語彙表—
- 22 現代雑誌九十種の用語用字
—漢字表—
- 23 話しことばの文型(2)
- 24 横組みの字形に関する研究
- 25 現代雑誌九十種の用語用字
—分析—
- 26 小学生の言語能力の発達 (明治図書刊) (¥2,100.00)

国立国語研究所資料集

- 1 国語関係刊行書目(昭和17~24年)
- 2 語彙調査
—現代新聞用語の一例—
- 3 送り仮名法資料集
- 4 明治以降国語学関係刊行書目 (秀英出版刊)
¥300.00)
- 5 沖縄語辞典 (大蔵省印刷局刊)
¥2,500.00)
- 6 分類語彙表 (秀英出版刊)
¥900.00)

国立国語研究所論集

1 こ と ば の 研 究 国語年鑑

- (昭和29年版) (秀英出版刊)
¥450.00)
- (昭和30年版) (秀英出版刊)
¥600.00)
- (昭和31年版) (秀英出版刊)
¥450.00)
- (昭和32年版) (秀英出版刊)
¥480.00)
- (昭和33年版) (秀英出版刊)
¥480.00)
- (昭和34年版) (秀英出版刊)
¥500.00)
- (昭和35年版) (秀英出版刊)
¥550.00)
- (昭和36年版) (秀英出版刊)
¥800.00)
- (昭和37年版) (秀英出版刊)
¥500.00)
- (昭和38年版) (秀英出版刊)
¥950.00)
- (昭和39年版) (秀英出版刊)
¥980.00)

-
- 高校生と新聞 国立国語研究所 共著 (秀英出版刊)
日本新聞協会 ¥280.00)
- 青年とマスコミュニケーション 日本新聞協会 共著 (金沢書店刊)
国立国語研究所 ¥280.00)

1963—1964

ANNUAL REPORT OF NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

CONTENTS

Foreword

Outline of Researches from April 1963 to March 1964

Study of Colloquial Japanese-grammar

Research on Use of Characters and Vocabulary in Magazines

Preliminary Study for the Statistic Investigation of Vocabulary by

Electronic Date Processing Equipment

A Contrastive Study of the Dialects and the Standard Language

Development of School Children

Study of Typographic Conditions Necessary for Writing Laterally
of Japanese Sentences

The Influence of Situation on Sentence Pattern in Japanese

Study on Japanese Language of Meiji Period

Making of Word Index of "IROHA-ZIRUISYO", a Classified
Japanese Dictionary in Heian Period (12C).

Social Survey on Problems of Linguistic Life

Research in Special Problem

Others

General Affairs

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE

INATUKE-NISIYAMA, KITA, TOKYO